世界に嫌われた女の子

chemical

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界に嫌われた女の子

【Ｎコード】
Ｎ５２５５Ｚ

【作者名】
ｃｈｅｍｉｃａｌ

【あらすじ】
ハルがふっとばされた世界で出会ったのは、神と皇帝。女嫌いの皇帝と人を信じきれない少女のはた迷惑な恋物語。（リハビリのために、サイトにあるお話を少しずつ改訂していくことにしました。タイトルは同じですが、少しずつ内容は変わっていくと思われます。全部改訂しなおしたら、サイトに戻します。土日以外１日１回更新したいです。）

1（前書き）

不意に流血や痛いお話がありますのでご注意ください。
この改訂が終わったら、サイトを通常運転に戻したいです・・・

1

晴は不思議な子であった。
晴自身は当り前の事だとだと感じていたのだが。
周りの人には分からないものが、彼女には見え、聞こえ、触れられた。
けれど、晴はいつからか
自身に見えたこと、体験したことをあまり口に出してはいけないのだということも学んでいた。
それは、彼女の母親がいたからだ。
母親は精神的に弱っていた。
晴の言動一つ一つにひどく過敏に反応し、良いとは言えない反応を示す。
晴は子供の動物的な本能で感じ取っていた。
物心ついた時には彼女の母はすでにそういった精神状態であったし
時折、気まぐれのように示される愛情も
言葉の暴力を投げかけるときでさえも晴にとっては母という存在以外の何者でもなかった。
母のその状態は彼女が生まれる少し前に他界した父親の事故のせいでもあったかもしれないが、
彼女もまた敏い人であったから晴の異常さに怯えていたのかもしれない。
母親は晴の不思議な言動を子供の言うことだから、と受け流すことをせず
罵りに変えて吐き出していった。
まだ、言葉の暴力だけだっただけ、ましだと思うかもしれない。
晴自身は、幼すぎてそのころの生活を思い出すことも難しいが
母と子、2人の生活の中で、大きな影響をもつ存在からの否定は
彼女を内向的にするには十分だった。

内向的になった彼女を、支えてくれたのは母ではなく、人でもなかった。
そうして、その交流を母に知られることでまた母の精神も削られていった。
悪循環というのだろうか。
繰り返される言葉の暴力と堂々巡りに晴は黙って耐えることしかできず、
彼女は母親の前であまり喋らず、行動しない子になっていった。

だが、晴には逃げ場所ができた。
それは、彼女にとってとても幸運なことであったといえるだろう。

子供というものには考え方、感じ方の見本が必要であり、一番の身近な手本が保護者だ。
それをなくしては精神の成育はうまく成り立たない。
晴にもそれは例外ではなく、事実その状態のままであれば
彼女の今の状態はなかっただろうと容易に想像がつくというものだ。
彼女が世間一般的に見ていい子に育ったのは彼女の母方の祖父母のおかげに他ならない。
彼らは、年に一度は顔を見せに来ていた孫と娘が訪ねてこないことに疑問を抱き
母親と晴を訪ねた時、彼らはその異常に敏く気が付いた。
それだけではなく、彼らは彼女の母親が精神的に弱っている状態にあるということや
母の晴への接し方を知ったときに素早い対応をしたのだ。
もしかしたら、祖父母も薄々自分たちの娘の精神状態を疑っていたのかもしれない。
彼らは世間や周りの目を気にすることなく

母親を病院に無理矢理入院させ、晴を自分たちが住んでいる田舎へと引き取ったのだった。

祖父母に連れられて田舎へと行った晴は
その小さな目に、収まりきらない世界を見た。
怯えた小動物のようなビクつきは消え、青白かった頬には赤みがさし
子供らしい柔軟性と順応性で欠けていた様々なものを取り戻したように見えた。
彼女の顔には表情が戻り、毎日近くの野山を駆け回ることを楽しみにする普通の子供になっていった。
彼女自身の周りには相変わらず、不思議な出来事が多かったが
田舎特有の空気と、風土に紛れ込む程度のことだった。
けれども、晴は不思議なことは祖父母の前でしか語らなくなっていった。
幼かったとはいえ、母親の怯えや嫌悪の表情からそういった事柄を忌むべきことと認識していたからだろう。
他の人間には友人であったとしても曖昧に誤魔化していたが
一緒に生活を営んでいる祖父母にはさすがに通用しなかった。
初めのころは、祖父母に対しても怯えながら話していたが
母親の代わりに彼女を愛しんでくれていた祖父母は、晴の話を聞いても母のような反応は一切見せず。
笑って頷いてくれたり、ときには真剣な顔で注意を促したりした。
祖父母は晴がほかの子と違うことに恐怖は覚えていないようだった。
いや、本当は彼らも晴に恐怖を覚えていたかもしれず、
ただ、その感情を決して晴には悟らせないようにしていたのかもしれない。
祖父母は、普通の子と同じようにやってはいけないこと、危ないと思われるようなことは
晴に厳しく言い含めたし、他の子らと同じように叱りつけた。
晴が不思議なことを体験した時は

幼い子供は神様の子だからね。と、優しく頭をなでてくれていた。
それは一度壊されかけた晴の世界を壊さないものであり、とても居心地が良かった。

2

そんな日々が続いていたのに。
晴の7歳の誕生日にひとつの悲劇が彼女を襲った。

その場所に決しているはずがない彼女の母親が、彼女の前に現われたのだ。
精神的に弱っている彼女の母親は祖父母の手配した病院に入院しているはずで、
その病院はここからとても離れているというのに、
母親はそこにいた。
入院患者の着ているような服ではなく、以前見ていた普段の服装のままで
庭先に立つ彼女は、晴を見つけてゆっくりと微笑んだ。
そのとき祖父母は、晴の誕生日の御馳走のために1時間かけて
隣の市の大きいスーパーに行くと車で出掛けていた。
祖父母の帰りを楽しみに待ちつつ庭で遊んでいた晴の目の前に立った母親。
その世間的にとても美しい部類に入るその顔は、別れた時となんら変わっていなかった。
晴のものとは違い黒曜石のような髪と瞳をもつ彼女が、
静かにたたえた微笑みは、見る者に優しさを感じさせるには十分だった。
「晴」
呼びかけられたその声に、晴は思わず母親に飛びついていた。
足がもつれるような勢いであったが、母はしっかりと晴を抱きしめてくれた。
いくら傷つけられたとしても、いくら罵倒されようとも

彼女は晴の母親であり晴の大好きな人なのだ。
物心ついてから晴が知る母は、時折気まぐれに愛情のようなものを示す人だったが
そんな偏った情を与えてくれる彼女でも、母親という晴の狭い世界の中心だった。
そんな彼女が、笑顔で腕を広げ
晴を包み込むように抱きしめてくれたことは
その時の晴には誕生日よりもうれしいことであった。
母親には1年ほどあってはいなかったが、
こんな微笑みで晴を呼ぶ彼女はもう、弱っていた精神が回復し
退院してきたのかと思わせるほどで。
「おかあさん！おかぁさん！・・」
泣きながらしがみついてくる我が子をやさしく抱きしめながら、
縁側から彼女は娘を家の中へと誘導する。
その顔には変わらず、微笑みを浮かべたままで。
「晴、ずいぶん大きくなったのね…」
頭をなでながら優しく、泣きじゃくる娘に語りかける。
一瞬、声の中に暗いものが奔ったことに
泣いていた晴は気がつかなかった。
けれど、それきり何も言わない母親に
晴は顔をあげ、母親を見上げた。
涙でかすんでいたが彼女の母親はさっきと同じ微笑みのまま。
そこで、晴は妙な違和感に取りつかれた。
こんな顔を母親は一度でも見せたことがあっただろうか。
時折見せてくれた愛情の中、こんなに手放しの微笑みはあっただろうか。
母親はいつも、少し怯えが見える顔で
それでも精一杯微笑んで晴を見つめてはいなかったか。
張り付いたように動かない母親の顔を、晴は思わずじっと見つめてしまっていた。

変わらない。優しい笑顔。晴が見たことがないくらいの。
変わらない表情に、どこからだろうか
晴の中に恐怖がぽつりと広がった。
晴は染みのように広がる本能のままに、母親から後退る。
畳で、晴の膝が少し痛いくらいに擦れてしまったが
それを気にする余裕はなかった。

母親は変わらない微笑みで彼女を見る。
「どうしたの・・・？」

微笑みは変わらない。
変わらない。
変わらない。
「やだっ！」
晴は怖くなって逃げ出そうとした。何が、とかなんでとか、理由は
分からなかったけれど
とにかく逃げることしか考えられなかった。

恐怖に背を押されるように部屋を飛び出そうとして後ろを向いた彼
女の首に細い、
ひものようなものがしゅるりと巻かれる。

それが何かを確認する間もないまま、ものすごい力で絞められた。

「な・・・」

疑問を声に出そうとしても首が絞められているために声にならない。

だが、苦しそうな晴をみながら母親は静かに言った。
彼女の首を絞める動作には何の躊躇もないまま力を込めて。

「大きくなるからよ。晴が、私のちいさな子のままでいないから。
こうやって、もう一度晴は小さくなるの、小さくなって
あのころに戻ってもう一度3人でやり直しましょうね」

精神が病んでいるからか、晴にも理解できない。
言葉の意味を考える間もなく、晴の意識は闇に落ちた。
晴の中を駆け巡ったのは、母親に対しての疑問や怒りではなく
生きることへの欲求

ただ、死にたくなかった。

次に目が覚めたとき、彼女は無機質な白が囲む部屋にいた。
そこには祖父母が泣きながら彼女が目覚めるのを待っていて
晴の名前をずっと呼びながら、よかった、ごめんね、しななくてよかった。
そう何度も何度もかけられる声と彼らの涙に
彼女の記憶にあることが現実に起こったことなのだと実感させられ、
それが悲しくて晴は思い切り泣いた。

悲しいのは、母親にそこまで嫌われていた事実だった。
なんとなく、自分が生きているからには母親は死んだのだろう。
と妙な確信が彼女のなかにはあった。
受け入れたくない記憶を、無理やり認めさせるかのような祖父母の
泣き声に

晴は、その記憶から逃避することもできず
ただ、本当にあったこととして刻みつけられたのだった。

大分大きくなってからだったが、祖父母に教えてもらったことによると、

母親は欄間にロープをかけて首をつっていたらしい。
そばには彼女の字で“晴をあたしから守って”という走り書きのメモも見つかった。

晴は自分では首を絞められてずっと気絶していた
と思っていたのだが、祖父母の話によると醜く変わった母親のそばでぼんやりと母親を見上げていたらしい。
祖父母が声をかけると、けいれんを起こして倒れ、そのままあの病院に担ぎ込まれたということだった。
医師が晴を診察して初めて、首にひもが巻かれ尋常でない圧力で絞められた事実が明らかになったという。
いくつかの組織はひどく傷ついていたが運良く重要な器官や声帯に損傷は見られず
絞痕に比べると医師も首をかしげるほどの軽傷だったらしい。

その後も、なんだかんだと問題はあったものの、晴は順調に成長していった。
ただ、なぜか人よりもとても成長が遅かった。
小学校6年生でも3年生ほどに見えたし、中学生になっても小学生と間違えられる容姿のままだった。
だが、そのことで彼女がいじめられたりすることはなかった。
からかわれることはよくあったが、彼女は事実を否定はしなかったし逆に言い返すこともしていた。
ひとえに彼女が、小柄ながら運動神経が抜群によく

小学生のころから誰一人彼女に喧嘩で勝てる者がいなかったということも
いじめられなかった理由の一つだろう。
広くて狭い田舎では、晴の祖父母が有名なサーカス出身ということが知れ渡っていたため、
彼女の運動神経を誰も不思議には思わなかった。
上級生も、彼女には一目置いていたし、
何より頭の回転が速く運動が抜群という彼女自身が
人に嫌われるような性格ではなかったという所が大きいだろう。
もしかしたら、知らず知らずのうちに頻繁に彼女の周りで起こる出来事によって、
周りの人間たちの同情を得ていたのかもしれない。
少なくとも晴はそう思っていた。

それなりに、晴は幸せな生活を送っていたが、１４歳の時に彼女の祖父が突然他界した。
高齢であったのもそうだが、不幸な事故だった。
おしどり夫婦と評判高かった祖母も、祖父の他界から体調を崩し、
晴が１５歳の時に亡くなった。最後まで晴を気にかけてくれていた。
早過ぎる、二人の死はとても悲しかったが
周りの助けと、祖父母の遺してくれた
これから生活していくのには困らないだけの遺産、
生命保険によるお金、更にはよく知る弁護士のおじさんが後見人になってくれるという、
祖父母の温かい庇護は祖父母がいなくなっても晴を守ってくれていた。

そうして１６歳になった晴は祖父母の家で一人暮らしながら高校生活を送っている。

3

「いってきます」
写真の中の祖父母にいつものように挨拶をして、彼女は学校に行くために家を出る。
なぜだろうか、彼女の親しい人たちはたとえ生身の姿ではなくなったとしても
彼女の前に姿を現すことがなかった。
常ならざるモノたちを見、交流することができる晴の不思議も
依然として幼いころのまま残っているというのに。
もしかしたら、姿を現すことで晴があちら側に飛び込むとでも考えているのかもしれない。
それもいいかもしれないと、本当に時々考えてしまう。
庭の隅でさわさわとうごめくモノたちに恐怖を感じることもなく、
逆に親近感さえわいてしまうのだから。
そんなことを考えながら、晴は門の脇に寄せていた自転車に鞄を放りこみ
田舎の一本道を自転車で駅まで向かった。
その駅から４つはなれた駅の近くに晴の通う高校があるのだ。

途中、朝からだだっ広い畑で農作業中の近所のおばさんたちと会い、
いつものように挨拶をすると
一人のおばさんが手に持っていた籠の中から黒いこぶし大の物を投げてきた。
晴がそれを軽く片手で受け止めると、おばちゃんは笑った。
「晴ちゃん！いまから学校かい？おばちゃんの特製焼肉おにぎりだよ！もっていきな！」
「危ない人には気をつけるんだよ！」

「知らない人についていっちゃいけないよ！！」
「ほら、ジュースも持って行きなさい」
晴に次々とおばちゃんたちから物が投げられる。さすがにするめいかは朝からちょっと重いけれど。
みんな、晴が幼いころからのご近所さん達で
晴の祖父母が亡くなったときから、まるで親のように晴を怒り、心配してくれている人たちだった。
彼らは、晴に会うといつも食べ物をくれる。
金銭的には困ってはいないのだが、そういった食べ物は晴にとってとても助かるものだった。
晴は、料理があまり得意ではないからだ。
何しろど田舎なのでコンビニも少ないし、
スーパーの惣菜も夕方の割引を狙っているご老人たちやおば様たちにかかれば
晴が学校から帰ってきたころには微妙なモノしか残っていない。
「ほら、あんまりぼさっとしてると電車に遅れちゃうよ！
くれぐれも、暗い路地には入らないようにね」
いつものようにお菓子やらジュースやらをもらって、
高校生な自分にはちょっと過保護すぎる言葉をもらってと、いつも通りの朝だった。
「ありがとう！いってきます！！」
そう言って、もらったもの達を鞄に急いで詰め込んだ。
腕の時計を見ると、少し急がなければならない時間になっている。
おばさんたちに笑顔で手を振ると、自転車に飛び乗り
そのまま黙々と自転車をこぐ。
朝の少し冷えた風が心地よく、通り抜けて行った。
数分自転車をこぎ続けていると、田畑が少なくなり段々と車通りが多くなる。
駅前の繁華街が近づいてきたのだ。
繁華街といっても住民が買い物をする商店街と

全国チェーンのファストフード店が一軒あるだけのもの。
けれども国道はそれなりに交通量が多く、ちらほらと小学生が近所の小学校に登校している姿も見える。
国道沿いに駅へと向かっていた晴は、視界の端に黄色い帽子がぴょこんと動くのを見た。
無意識に眼で追ってしまった晴が次の瞬間に見たものは
目の前の国道に黄色い帽子を被った男の子が飛び出すところだった。
「あぶない！！」
叫んだが、自転車に乗ったままの晴の声は少年まで届かなかった。
物を落っことしたらしく、少年は下しか見ていない。
けれど、少年が飛び出した道にはトラックが迫っていた。
大きな音を鳴らすトラックに、少年は逃げるのではなくびくりと体を硬直させた。
とっさに晴は自転車から飛び降りて、走った。
「っ・・・・・！！」
間に合うかギリギリのところだ。
持前の運動神経で体勢を崩すことなく自転車から道路に着地し、
男の子を抱き上げると同時に男の子を歩道側へと放りなげる。
いつも通っている道だから、勘でしかないが
確か少年を投げた方向にはゴミの山があったはずだった。
なくても、トラックにぶつかるよりはましだろう。
だって、少年を抱えたまま反対車線に出ても別の車にひかれてしまう。
そこまでは頭と手が回ったのだが、
少年を投げた後自分がどうなるかなんて考えてなかった。

ブレーキ音、悲鳴、衝撃

奇妙な浮遊感。
晴が覚えているのはそこまでだった。

死にたくないな。
そう、ずっと昔と同じことを思った。

4

思えば結構悲惨な人生だったのかと思う。
自分としてはとても幸せだったのだけれど、客観的に見て自分は悲しい人生を
歩んできたのではないだろうか、不思議なものが見え、母親に殺されかけ、
祖父母は早く亡くなり、その他、周りの人たちから心配されるほど、いろんな事件に巻き込まれてきた。
そうして、自分は子供を助けてトラックにふっとばされる。
・・・どう考えても典型的とまではいかないが、悲惨な人生だ。

「あー、まあ本人が満足してるだけでいいかなぁ」
お、声が出た。自分はてっきり死んだと思っていたのに。
「あ、死後の世界だから自分のどうとでもなるのかな？」
首をかしげる。実際生きているのならトラックにあたったからには少なくとも骨折や、怪我をしているはずで、その痛みがあるはずだ。けれども今、自分の体には全く痛みも傷もない。
と、ここまで考えて気がついた。

「ここどこ・・・・？」

ほのかに白く明るい夢の中のような場所。
ここが死んだ人が来る場所なんだろうか？
てっきり、すぐに幽霊にでもなるかと思っていたのだが、
意外に、未練とかがなかったのだろうか。
「違うわよ。　ハル」
聞こえてきた声が、空間を切り裂いたように晴の耳に届いた。
「ここで会うのは久しぶりね。まあ、もう元の世界には戻れないけ

ど」

傷の具合はどう？

とにこやかにほほ笑みながら、声と同じくいきなりその人は現れた。

真っ黒な瞳と豊かにうねる髪を背中に流し、

白い布で挑戦的な体の覆い方をしている。ないすばでーのお姉さんだ。

ちなみに背中には真っ白な翼があった。

天使のような恰好のその人を見あげて

晴は、言葉を失った。

いきなりファンタジーな恰好をした天使っぽい人が現れたからではない、

その人が、日本でこんな恰好をしていたら捕まりそうだなと思ったからでもない

いきなり現れたその人の顔に、だ。

黒曜石のようにまっ黒な瞳と髪の毛

大きな目と少し厚めの唇。とても整ったその顔は

――――――母親のものだった。

「あ・・・お・・かあさ・・・？」

目の前の者は母親に瓜二つであった。

混乱する。

自分の頭がおかしくなったんじゃなかろうか。

ふいに、過去の網膜に焼きつけられた映像が、頭の中を掠める。

だってお母さんは・・・ゆれていなかっただろうか・・？

忌まわしい記憶の中の映像に心臓と体の言うことが聞かなくなる。

耳元で、うるさいくらい心臓の音が聞こえた。

かは、と肺から小さく空気が漏れる。

息ができない。

息を吸おうとしているはずの肺が、筋肉が働きを止めたかのようだ。

まるで昔の無声映画のように、目の前で切り替わる映像のことしか考えられない。

「ストップ。落ち着きなさい！　ハル」

突然の女の人の声に、どうしてか晴の思考がはっきりとクリアになった。

無声映画のような映像は瞬く間に視界から消え、緊張していた体が自由になる。

胸を押さえていた手も、制服も汗で湿っていた。

片手を床につけ、必死で酸素を肺に入れるため息を吸い込む。

息を整えながら、ここまで動揺してしまうものなのか、と頭の冷静な部分で考えた。

まだ、囚われている。

母親に。

息を整える晴の前に、母親と瓜二つの女性は膝をつく。

気配に、晴が顔をあげると

女性は晴の肩にそっと、まるで愛しむように手を触れた。

「正確にいえば、あたしはあなたの母親ではないわ。

母親のような存在ではあるし、そっくりなのも認めるけれど。

――――――落ち着きなさい。あなたは死んでないわ」

もう一度、言い聞かすようにゆっくりと言われた言葉は案外すとんと晴の心の中に落ちてきた。
「あなたは・・・だれですか？　ここは・・・・？」
絞り出すように言った言葉は、震えているけれどきちんと声にすることができた。
何のひねりも芸もない言葉だが、一番知りたいのだからしょうがない。

晴の中に冷静さはいくらか戻ってきたようだった。

女の人は笑って晴と同じようにその場に座り込み晴の目をのぞきこんできた。
とても怖かったが
さっきの自分に負けたくなかったから、晴は無理やり目を合わせ続ける。
そこにあったのは意志のはっきりとした黒い瞳。強い生命力にあふれた瞳だった。
そう、あの人はこんな目をしなかった。
あの人の目はいつも違うところを見ていて、覗くとどこか暗い処に引き込まれそうになる。
そんな瞳をしていた。
この人と、彼女は違うモノだと
感覚で理解すると、晴の中に落ち着きと冷静さが一気にすべて戻ってきた。

女の人の目がやさしくなる。
そこには彼女には無かった、晴への純粋な愛情があった。
祖父母の笑顔を思い出すような、そんな視線だった。
見ず知らずの彼女から、そんな感情を向けられることに少し混乱しつつ

晴は彼女が口を開くのを待った。

「ハル。ここはね、あなたがいた世界と違う神々が治める世界。
あたしはその中の一人。リルヴァーナ。
あなたは元の世界では事故にあって、いなくなったことになってる」

言われていることは無茶苦茶なのに、どうしてか真実だとわかってしまう。
真実だと理解してしまうことがおかしいのかもしれないが、
晴は、この人の言葉に嘘はないと信じてしまっている。
この人には、そうせざるを得ない圧力がある。
世界が違うとか、普通に考えてもおかしいことだ。
いくら、普通の人には見えないモノたちを見てきたとはいえ
晴は疑り深いほうだ。
神はまだいい。日本にはそれこそ多くの神々がいて
私もその存在を幼いころから疑ってはいない。
神と呼んでもいいのかわからないものたちも多くいるが
神と呼ばれる存在はどことなくキラキラとしているのだ。
この女の人、リルヴァーナもそう。
時折目を細めてしまうほど、眩しい。
昔からの不思議現象のせいでこういう事態に慣れてしまったのか。
どちらにしても一応は納得するしかないだろう。
今の晴が疑いを持っても、あまり意味がない。
万が一夢の中だとしても、だれにも迷惑をかけていないのでセーフだ。
「私は、元の世界に戻りたいです」

戻れないとさっき聞いたような気がするが、聞いてみなくちゃ分からないだろう。
ここが夢であろうとどこだろうと、私が生まれた所はあそこなのだ

から。
私の言葉に、リルヴァーナは少し厳しい顔をしていった。
「あちらの世界の神々はあなたを手放すことに決めたわ。もう、戻れないの」

ごめんね、と
いつの間にか握られていた手を強くつかまれて泣きそうな顔で言われては、
根っこが馬鹿なくらいお人好しだといわれる晴に勝ち目はなかった。
リルヴァーナが言った、晴を手放すとはどういうことなのだろうか。
「つまり、あっちの神様・・？　仏様とかキリストとかに私が嫌われたということですか？」
推測を言葉に出してみて、首をひねる。
神様に嫌われるって・・・なんか悪いことをしただろうか？
そんなに悪いことをした覚えはないはずなんだけど・・・
と、難しい表情で考える晴にリルヴァーナは焦っていった。

「嫌われたんじゃないの！むしろ好かれたからこっちにいるのよ！
あのね・・・あっちの世界とあなたの相性はものすごく悪かったの。
神々は何とか助けようとあなたを一度こっちに飛ばして相性の修正を図ったんだけど・・・
結果は・・・運の悪さからもわかるとおり、ね。
だから、お気に入りのあなたを死なせたくないから、
相性のいいこっちの世界に泣く泣く手放すことに決めたのよ」
必死な言葉から嘘はないと感じられて、それはそれで悲しくなった。

神様に言われるくらい
やっぱり、私ものすごく運が悪かったんだ…。

そんな気はしていたが改めて言われるととても悲しくなってくる。
確かに、神様に嫌われているような気はしなかった。
助けようとしてくれるまで好かれていたのも知らなかったのだが。
けれども、神様に助けてもらっていたというのにあんな運の悪さだったのならば
確かに世界と相性が悪いというしかないだろう。
生きているだけましというものだ。

トラックに吹っ飛ばされて、いきなり変なところにきて
神様に会って、世界と相性が悪かった・・・ってどれだけ現実離れしているんだろうか。
今の状況が夢でも一向に構わないし、むしろそのほうが嬉しいのだがこっそりとつねった頬は痛いし、脳味噌以外の感覚が現実だと示している。

戻れないと言っていた。
元の世界に戻れないとなると、もう、友人にも近所の人たちにも会えなくなるということだ。
脳が考えるのを拒否しているのか
ふわふわとした現実感のない、悲しさがどんどん膨らんできて、勝手に涙まで出てきた。

「う・・・」

目の前がゆがむ。

頬を、温かいものが流れていく。

泣き始めた晴をリルヴァーナは優しく抱きしめて頭をなでてくれた。
リルヴァーナのその手がまるで、お母さんのようで
遠い遠い、昔の記憶が少し開いたのかもしれない。
悲しみだけではなく、既視感に後押しされて涙はどんどん流れていった。

泣き続ける晴にリルヴァーナは何も言わずにずっと頭をなで続けてくれる。
どれくらい泣いていたのかわからない。
これから自分がどうなってしまうのか、どうやって生きていけばいいのか
全くわからないまま、晴はリルヴァーナの腕の中で泣きつかれて眠ってしまった。

5（前書き）

皇帝視点です。

5

政務も終わって、汗も流して寝るときになって、問題というものはやってくるらしい。
自身の寝室に入ってすぐに違和感に気がつき
帝国の若き皇帝サングルド・ジャヴ・フリードリヒは冷静に腰の剣に手をかけた。
そのまま、何やら膨らんでいる自分のベットの掛布をめくると、そこには少女が眠っていた。
・・・・・・・・・・・・・変な格好をした少女が、自分のベットで寝ている。
警備の厳しい皇帝の私室と、ある理由から
可能性は低いが、暗殺者か
夜這いをしにきた貴族のバカ女かと思っていただけにこの状態は予想がつかなかった。
以前友人と流した自分がホモであるという噂はどこかで曲解されて幼女趣味にでもなったのだろうか。
もちろん自分はホモでも幼女趣味でもないが、女性というものに興味ではなく嫌悪を覚える、
という一種のトラウマのようなものがあるために噂を流して女性を遠ざけたのだ。
友人の一人にそういった趣味を持つ者がいたためにたくらみは成功し、
近頃ほとんど女が近寄ってくることなどなくなっていたのに、
どうしてこんな状態になっているのであろうか。

「おい」

とりあえず声をかけてみるが少女に起きる様子は全くない。
よくよく見てみると頬に泣いていた跡がある。

何なのだろうか。
この恰好を見るからには、ほかの国の者と考えるのが妥当だろう。
だが、記憶を探ってみてもこんな恰好をする国などない。
さらに、色素は薄いが黒茶の髪の毛とは珍しい。
黒に近い色の髪の毛はサングルドでは生まれにくい。
この国で信仰されている神の持つ色だからだ。
一瞬、似たような色が頭の中を過ったがすぐに眠たさに襲われる。
頭を軽く振って、寝ている少女へと近づいた。
ここまで近づいても全く起きる気配がない。
ジャヴはどうしたものかと、ため息をついて寝台に腰を下ろした。
そうして、無造作に少女の髪の毛に手を伸ばす
色が珍しかったからかもしれない。
髪の毛を触ってみるとシーツの上に広がっている通り癖がなかった。
さらり、と手から滑り落ちる。
ふと、今更であったがここでいつも感じる嫌悪感がまったくないこ
とに気がつく。
女ならば少女でも老女でも関係なく感じていた嫌悪感が今はない。
不思議な感覚に驚きながら、皇帝は少女の肩を揺らした。

「おい」

少し強くゆすると少女がうっすらと目を開けた。髪の毛と同じ黒茶
の瞳が見える。
だが、焦点はあっていない、寝ぼけているのだろう
ゆっくりと皇帝を見上げると、笑顔を見せた。

「リルヴァーナ・・・」

そのままこてんとまた、ベットの上に転がってしまう。
女神の名前を呼んで寝こけた少女。殺気もないし、安全そうだが、
どうしろというのだろうか。
少し考えて、ジャヴはこういう結論に達した。
まあ、寝る場所は十分にあるか

そう考え、皇帝は少女の隣に寝転んだ。

6

朝、目が覚めると誰かの腕の中にいた。

リルヴァーナだと思い込んでそのまま胸に顔を当てるようにしてすがりつくと、

おかしいことに気がつく

リルヴァーナの胸がない

昨日はあったはずなのに、だ。

おかしい。これはおかしい。

意を決して晴が顔をあげると、深い紫色の瞳とぶつかった。

あっちも驚いているのかちょっと眼が見開き気味だ。

光を反射する長い銀色の髪と紫色の瞳の、日本人ではない青年。顔はとても整っている。

なまじ整っているだけに、髪の色などとあいまって少し冷たい印象がある。

マッチョといえるほどがっしりはしていないけど

腕の筋肉がしっかりしているから何か武術でもしているのだろう。

と、青年の腕をぺたぺたと触りそこまで考えてから自分がちょっと混乱していることに気がついた。

知らない人の腕を触って筋肉の確認をする乙女はあまりいないだろう。

というか、知らない人に腕を触られて大人しくしているこの人も何か反応をしてほしい。

青年はそんな晴をただ見ていた。

あまり表情は変わらなかったが、なんとなく怒っている雰囲気では

ない。

昨日のことでちょっと耐性がついたかなと思ったのだけれど、
所詮人間は1回程度じゃ耐性は身につかないらしい。
自分の学習能力にも疑問を抱きかけて、気がついた。
そもそもリルヴァーナの腕の中で眠っていたはずが、起きたらやたらきれいな青年の腕の中。
混乱しないほうがおかしいかもしれない。

「お、おはようございます？」

「おはよう」

外国人みたいなのに言葉が通じる。
それに、きちんと挨拶は返してくれた。
少なくとも直感から言って悪い人ではなさそうだ。
抱きしめられているのだが、他に何かされた様子もないし
彼が落ち着いている様子から考えて、これが彼のベッドなのだと予想がつく。
やっぱり謝るべきだろうか。
晴が悪いわけではないのだけれども。
考え始めた晴の横で
青年はゆっくりと晴を抱きしめていた腕を外してベットから上半身を起こし
伸びをした。しなやかな動きは、大きな猫みたいだ、と思う。
やっぱり、彼の様子からして危険はなさそうなので、晴もあくびをして伸びをした。
ここは、どこなのだろう？
あのあと晴はリルヴァーナの腕の中で泣き疲れて寝てしまったのだと思う。

と、いうことはリルヴァーナが連れてきたに間違いないが、何の説明もなしとはひどくないだろうか。
彼も吃驚していたようだが、まずは状況を知らなければ話にならない。
とりあえず、初めて会った人への基本を実行してみた。

「あの、はじめまして、私は晴・三上と言います」

「ハル・ミカミ？」
「はい、晴がファーストネームで、三上がファミリーネームです」
外国っぽいからこういう名前の紹介をしたがどうやらあっていたらしい。ちょっとほっとする。
「私はサングルド・ジャヴ・フリードリヒだ。どう呼んでも構わない」
そう言って頭をなでられた。
言葉は冷たいが、いい人だと思う。ただし、子供扱いされてる感が否めないが。
「ところで・・」

質問をしようとした青年の言葉にかぶさるようにして扉が乱暴に開かれた。
「ジャヴ！！いい朝だね！さあ重要なお知らせがあるんだ！
この私の神官長としての今朝のお告げで女神が御子をこの国に預けるとでたんだ！
黒茶の髪と瞳の女性だってさ！！　何年ぶりだと思う？」
金色の長い髪を一つにくくったその人は白を基調とした服を着ていた。
まるで、物語の中の王子様が着るような軍服とでもいえばわかりやすいだろうか。
その人自身も、まるで王子様みたいな顔立ちだ。

緑の瞳を輝かせて青年と晴のいるベットに目を向けた白い人は、そのまま固まった。
綺麗な顔なのにあごが外れそうなくらい口が開いている。
思わず定規を当てて測ってみたいくらいだ。
「ジャヴ・・・？その女の子は・・？まさか・・・」
白い人が何か言っているが、小さな声すぎて晴には聞こえなかった。
その代わりジャヴが晴に尋ねる。白い人の登場にも彼の表情はあまり変わらなかった。
「ハル、おまえは何歳だ？」
「１６歳です」
一呼吸おいて、
傍目に分かるくらいぎょっとされた。確かに今でも中学生に間違われるが、その反応は傷つく。

「ジャヴは、何歳なんですか？」
お返しとばかりに、ちょっと気になっていた青年の年齢を尋ねると、１９歳だと言われた。
こっちもちょっと吃驚した。
彼の表情や落ち着きようから、もうちょっといってるかと思っていたのだ。
それがわかったのだろう。ジャヴがちょっとムッとしたように言った。
「お前が小さすぎるだけだ」
事実だが、何か釈然としない。

「今に大きくなります」

こんなやり取りを見ていた、さっきの話からするとシンカンチョーとかいうらしい青年は、

間の抜けた顔から、一気に怖い顔になってベット近くまでずんずんと歩いてきた。

「ちょっとジャヴ。女には興味無いんじゃなかったの？」
そうなのか、特殊な趣味をジャヴは持っていたんですね。
白い人の言葉に、晴は内心なるほど、と手を打つ。
だから、晴が危険を感じなかったのだ。
白い青年の言葉にジャヴに視線を向けると、ジャヴはうなずいた。
「興味がないというか、嫌悪感があるな」
嫌悪感か、それは大変だな。と
そこまで考えてちょっとおかしいことに気がついた。
晴は女の子だ。世間一般的に見てどう考えたって女の子だ。
じゃあ、ジャヴというこの青年は晴にも嫌悪感を抱いていたのであろうか。
「すみません・・・」
いやな思いをさせちゃいましたか？と言外にこめた言葉をおくると、ジャヴはちょっと困ったような顔をして首を振った
「いや、なぜかお前は大丈夫だ。安心していい」
ジャヴのその言葉から
どうやら、この幼い外見ならば大丈夫らしい。
そう勝手に結論づけた晴は、この青年に嫌われなくてちょっと安心していた。
人から嫌われるのは、あまり好きではない。
だが金髪の青年の解釈は違ったらしい。
「ジャヴ！なんてことだ！ジャヴが、ジャヴが女に騙される日が来るだなんて～！！」
頭を抱えて叫びまくっている。
騙されてはいないと思うのだが、この状態であったならば勘違いされてもおかしくない。
こんな風に叫ぶなんて、もしかしたらこのシンカンチョーという青

年はジャヴの恋人なのかもしれない。
悪いことをしたな、と思ったが、どう説明すればいいのか全く分からない。
何しろこの世界に来てまだたった1日なのだ。
恋人（仮定）のはずのジャヴも白い人の誤解を解くでもなくベッドのすぐ脇で叫び続ける彼を見ているだけだ。

7

しばらくたって、叫び疲れたのか
青年が静かになってきたころを見計らって、ジャヴが青年に話しかけた。
「おい、カイザーク。お前が何を思ってようとどうでもいいが、女神の御子とはこれのことじゃないのか？」
さっき青年が言ったことをきちんと聞いていたらしいジャヴは、ハルを指さす。
ハルは指差されたあげくにこれ、と言われたが気になったのはそこではなかった。
「めがみのみこ・・？なんですか？それ」
女神なら知っているがめがみのみことはどう漢字変換していいのか分からなかった。
そんなハルを見た青年は、鼻で笑う。
「ジャヴ、女性といっただろう。そんな１０歳くらいの幼女を捕まえて女性とは・・・
目がおかしくなってしまったのかい？」
「ちょっとまってください！幼女はひどいです！私は！」
叫んだハルを手を上げて遮ると、青年は冷ややかな目を向けてきた。
ジャヴに向けていた目と違って、本気で敵意がこもっている。
「そうだね、皇帝の寝所に忍び込むなんて幼女ではなく、悪女の間違いだったね」
そう言うが早く、青年の手元が素早く動いてハルの喉元に剣があてられた。
「さぁ、君はどこの手のものだい？何をしにここに来た。
さっさと吐かないとかわいい首が体から離れるよ」
そこにさっきまでの叫びつつけていた変な青年はいなかった。
あまりにも素早く変わった雰囲気、凍りつくような視線と殺気が彼

を取り巻いている。
気を抜けば殺されるだろう。
隠されることがない殺気と、あてられた剣から伝わる力が示していた。
さっきまでの会話の中で殺されるような話題の要素はあっただろうか。
ハルの主観だけだが、なかったと思う。
じゃあ、寝室に入っただけで殺されるような人のところに来てしまったのだろうか。
たぶん、それが正解だろう。
混乱していた時は目に入らなかったが、剣を首にあてられた状態で動き出した脳は
視界に入るものたちが高級なものとは縁がない自分でもわかるほどきれいで凝ったものばかりだと訴えていた。
ジャヴは偉い人であったとしたら、そこに勝手に不法侵入したのは私だ。
殺されても仕方がないかもしれないが、あいにくと簡単に殺される気もない。
白い人の言う言葉に全く心当たりがないのだから。
答えようもないし、いきなり剣を突き付ける人に話したくもない。

そう、のど元に剣を突き付けられた一瞬で冷静に考えた自分に苦笑する。
あいにくと、こんなことは初めてではなかった。
平和な日本という国においてさえ、ハルの日常は妙に危険に満ちていたのだから。
周りの人間から同情を向けられ、あだ名がつくほどに。
様々な危険から身を守るために必死にいろんなことを学び、
身につけて今日まで生きてきたのだ。

あまりに遭遇する事件や危険、昨日初めて知ったその理由は世界に嫌われていたから、
なんていうふざけたものだったけれど
おかげで、１６歳ながら世界の理不尽さはわかっているつもりだ。

死にたくないなら足掻くしかない。
隙を探しながら、無表情に青年を見上げると青年も殺気を向けてきたまま動かない。
冷静だった。隙がまったくない。
「動揺もしない。本当に可愛くないね。何も言うつもりがないのなら死―」

「１６歳だそうだ」
青年の言葉の途中でジャヴが何も感情のこもっていない声で言った。
ジャヴの言葉と、内容に一瞬青年の動きと注意がそれる。
その瞬間を、まっていた。
ハルは自分の喉にあてられていた剣に首が切れるのも構わずに、
わざと首を押し付けて隙間を作る。
ハルが予想した通り、青年はジャヴの言葉に少し迷いが出たのだろう。
剣を引いてハルの首を飛ばすことをとっさにしなかった。
それがハルの狙いだった。
ハルの首は剣を押し付けたことによって切れたが、切れただけだ。
首の傷には構わずにハルは小さくやわらかい体を利用して体をひねり
あてられていた剣の軌道から抜けだした。
突然の反撃に応えようとした、青年の
剣を持っていた手が返される瞬間をねらって青年の懐に飛び込む。
剣は、一定以上離れた相手を攻撃するのに適している。
つまり近づきすぎた人間にとっさに攻撃しようとするならば手首を
返すことが必要になるのだ。

ハルは、剣を持っていた青年の手首を捕まえると合気道の応用でひねりあげた。
剣から手が離れそうになったところで手首を捕まえていた手を放し落ちかけた剣を奪って、青年に向けた。
全てはたった数秒の出来事だった。

ここまでハルが素早く、的確に動けるなんて思ってもみなかったのだろう。
なにしろ、青年の中で彼女は１０歳くらいの少女ということになっていたのだろうから。
ハルだって、いつも相手にしている包丁やナイフとは違う刃物相手で、
うまくいくかはわからなかった。
けれど、このとき運はハルに味方した。
火事場の、というやつだろうか。いつもよりも素早く動けたし、
青年の手をひねるのも簡単だった気がする。
初めて扱う形の剣を支える持ち手が震えないように、両の手で剣を支えた。

逆転された青年が晴を睨む。
そうしてハルの顔の額のあたりに目を向けて、驚いたように緑の目を見開いた。
「おまえ・・」
「１０歳じゃありません。１６歳です！失礼な人ですね！！」

8

青年が何か言いかけていたがとりあえず言いたかったことを言う。
首の傷がちょっと痛いので乱暴な言い方になってしまったかもしれないが
いちばん言葉で訂正したかったのはそこだ。
喉を動かしたせいかさっきの傷からとろりと生暖かい血が流れるのがわかった。
気持ち悪い感触に思わず顔をしかめると、ふわりと傷に何かがあてられた。

見ると、ジャヴが寝間着の袖口を傷に押し当てていた。
首を絞めるでもなく、どうやら圧迫して止血しているらしかった。
「痛いか？」
そういった彼はなぜかハルのもつ剣を取り上げたりせず、
なぜか、侵入者扱いをされたハルを心配してくれているようだった。
「少しだけ」
素直にそう言うとまた血が流れたようで寝巻の袖の赤がじんわりと広がってゆく。
「喋るな。今医師を呼ぶ。カイザーク、呼んで来い」
ハルに剣を突き付けられている青年にそう命令するとジャヴは
ハルの首に少し強く袖を押し当ててきた。
傷は意外に深かったらしい。

血は苦手なほうではないが、何しろ起き抜けだ。
ハルは寝起きが悪い。ときどき寝惚けることもあるくらいだ。
めまいがしてきたハルは剣を両手から外すとゆっくりとしゃがみこむ。

からん、と乾いた硬質な音をたてて剣が床に落ちる。
床に膝をついてしまうとジャヴの手だろうか、
寝台に寄りかかるように体の位置をずらしてくれた。
どれほど経ったのか、
青年はいつの間にかいなくなっていて
ジャヴの命令どおり医師を呼んできてくれたらしい。

急激な失血によるめまいか、ただの寝起きのためか
目を閉じて動けないでいたハルの首に
ジャヴではない第3者の手が添えられた。
「大丈夫ですよ。手をお放しになってください。でなければ治療ができません」

ハルは手を床につけているのでハルにではなくジャヴへの言葉だろう。
優しげな老人の声が祖父とかぶって聞こえた。
気が抜けて、涙が出てしまいそうになるのを必死でこらえる。

もうどれくらい祖父の言葉を聞いていないのだろう。

いつもはこんなことで泣いたりなんかしないのに。
信じたくはないし、まだ完全には信じられないのだが
世界から嫌われ、こちらに放り出されたということが精神的にきているのだろうか。
そんなことを考えていたら、ジャヴの手が首から外れていった。

手をついていた体を支えてくれる。
少し引き寄せられた形になった。
力が出なかったのでジャヴに寄りかかってしまう。
「ありがとう」

と、唇だけで言うと一言「いい」とだけ返ってきた。
なぜか、その一言ですごく安心する。

と、ここでわずかに残っていたハルの理性が自身に疑問を投げかけた。
ほぼ初対面の、しかも美青年に傷口押さえてもらい、
あまつさえ、支えてもらって安心するのは何故なのだろうか？
答えを考える。
やっぱり美青年だからか。
でも、ふつうは緊張するだろう。やっぱり美青年だし。
ああ、でも男性愛主義者だって言ってたしな。
でも、これが金髪の方の青年だったら緊張とかの前に意地でも自力で立っていたと思うのだ。
じゃあどうしてなのだろうか？

思考はとりとめがなく、痛みのせいか冷静に分析することができない。
考えれば考えるほど、よくわからない気持ちがハルの胸の中から出てくる。

まるで、無理矢理おいしいものを食べらせられたような。
釈然としない気持ちだ。

回らない頭で懸命に考えていたからか、顔にまで血が昇ってきたように感じた。
そうこうしているうちに、そっとハルの傷口に手が添えられる。
消毒するのだろうか？
出血が多かったようだしもしかしたら縫うのかもしれないな、
と思っていたら
突然、首のあたりが一瞬確かに温かくなる。

そのすぐ後にはさっきまでの感じていた傷の痛みと熱さが消えていた。
めまいは変わらなかったが、いきなり体が楽になったのだ。
眼を開き、ゆっくりと喉元に手をやると
血はついたが、肝心の傷はなかった。

「あれ・・・傷・・ない・・・？」
茫然と呟くと、そばにいた老人が顔をくしゃくしゃにして笑った。
着ているものは金髪の青年と同じもののようだったが、胸に金色の花の刺繍が入っている。
「お嬢ちゃん！　治癒もしらんのかい？　いったいどこの山奥で生活してたんだい？」
笑いながらハルの顔を覗き込んだ老人も、
先ほどの青年と同じようにハルの額を見ると一瞬驚いたようになる。
「・・・・・ああ、額に御印があるねえ。お嬢ちゃんが女神の御子様かい・・・
わしは、神殿庁のグラン・ドルフという」
それからハルの額をまるで孫にするように、しわくちゃの手でゆっくりとなでる。
懐かしくて、されるがままになっていたのだが
グランはおもむろに立ち上がり、近くにいた青年を思いっきり殴り倒した。
「御子さまを傷つけるやつがおるか！　この馬鹿者！！」

本当に思いっきりだったのだろう。
と、いうか老人の一撃にしてはいやに青年が吹っ飛んだ。
青年はものすごい音を立てながら壁に激突していったし、今も動かない。
おそるおそる見ると、完全に白目をむいていた。
大丈夫だろうか？

グランはなおも、倒れた青年近づくと青年を蹴り始めた。
「御印も確認せんで！　この馬鹿が！　一遍死んでその腐った脳みそ取り替えてこんかい！」
白目をむいた人間にやるようなことではなかった。
一方的な暴力が続く。
ジャヴも、見ているはずなのに一向に止めようとしない。
さすがに、かわいそうになってきたハルはグランに向かって声をかけた。
「あ、あの・・・」
「なんだい？　お嬢ちゃん」
グランは素敵な笑顔と共に振り向いた。
素敵過ぎて、かける言葉が見つからないくらいだ。
けれども・・・さすがに、
「さすがに・・しんじゃいませんか？」
そう言ったハルの言葉でグランは青年を蹴るのを止めた。
ちょっと舌打ちしていたのが聞こえたが、気のせいということにしておこう。
青年をけり終えて、ゆっくりとハルたちのほうに戻ってきたグランは、
明らかにちょっとすっきりしたいい笑顔だった。
グランはジャヴの前に来ると深いお辞儀をした。
「陛下。では、わしはこれで。・・お嬢ちゃんはわしと来るかい？御子様は神殿庁の管轄だからね。これからいろんなことを知らなきゃいかんだろうて」
祖父のような、グランのしわくちゃの手が差し出されたが、ちょっと戸惑ってしまう。
神殿庁とはどこかはわからないが、みことやらが行く場所らしい。
きっとリルヴァーナが、ハルをみことやらにしたのだろう。
けれど、神殿庁にそこで転がっている青年みたいなのがたくさんいたらどうしようと思ったのだ。

グランみたいな人ばっかりだといいのだが・・・
困って、ハルは思わず、ジャヴを見上げてしまった。
不安がハルの顔に出ていたのだろう。
少し考えたような沈黙の後、ジャヴはハルの頭を撫でて言った。
「別にここにいていい。神殿庁から教育係を呼べばいいだろう」
無表情だったが、頭をなでる手は優しかった。
「ありがとう、ございます」
グランの懐かしさとは違うこそばゆさを感じながら、ハルはジャヴにお礼を言った。
小さく見えることも、時には役立つらしい。と考えながら。
このときグランが、ジャヴの言葉とハルの頭を撫でる動作に目を見開いて絶句していたのを
ハルは見ていなかった。

9

この世界にふっ飛ばされて3日目。
ハルはこの城の何かがおかしいことに気がついた。
まあ、城といってもまだジャヴの居住区域から出たことはないのだが。

とりあえず、ここに来て一番驚いたことは、
銀髪の美青年、ジャヴがこのサングルド帝国と呼ばれる国の若き皇帝だったということだ。
１９歳といっていたはずなのに、その若さで皇帝だという。
確かに、外国では若い国王がいるところもあると、聞いたことはあった。
ただ、若い国王がいたとしても政治的な面ではあまり活躍しているかどうか怪しいところだ。
けれど、ジャヴはある程度重要な案件では最終決定権を持っているし一応総ての、帝国に関わる機関を動かすことができると言っていた。
上の地位に立つにはそれなりの実績が必要であり
年齢も経験の一つとして重要視するが、皇帝だけは例外なのだという。
そんなこの世界の常識がハルにはいまいちピンとこない。
まあ、日本とほとんど環境が違うのですぐに納得できるものではないかもしれない。
一つだけ、納得できたことといえば
カイザークと呼ばれた失礼な人があれだけ警戒心もあからさまにしたことだ。
王様の部屋に不審者がいたら、あんな対応にならないほうがおかしいだろう。
だからと言って、彼に対する印象が良くなったのかと聞かれれば

ハルには否という方かなかったのだけれど。
もうひとつ、ハルが驚いたのが敷地の広さだった。
ハルがいるのはジャヴの居住区域で、つまり皇帝の家のようなものらしい。
館や塔というよりも、独立した一つの城に近いそこは
皇帝一人のためにしてはとても広いのだ。
万里の長城みたいな塀の中は東京ドーム何個分だろうと考えてしまったのは日本人の性だろうか。
だが、窓の外から眺める限りでも確実に5個以上は入ると思う。
建物だけでなく、庭もだだっ広いのだ。

でも、おかしいのはそこじゃない。
この区域、というか、城に人が少なすぎるのだ。
ジャヴという皇帝が住んでいるところなのだから、
もっと警備の人とか、メイドさんとかいてもいいはずだ。
けれども実際に3日間で見たり会ったりした人は１０人ほど。

同じ人には何回も会うのだが、他の人とは会わない。
最初はハルが警戒されているのかとも思ったりしたのだが、それにしてはこの城は静かすぎる。
人が動いている気配というか、ざわめきがちっとも聞こえてこないのだ。
つまり、ハルが警戒されていたり監視されているのではなくて、
もともとこの区域には働いている人が少ないということなのだろう。
そういえば、ジャヴも皇帝陛下という身分のはずなのに着替えなどは一人でしているらしい。
ハルはこの国の服をまだ一人では着られないので、
ディアというぽっちゃりとしたおばさんに手伝ってもらっている。
その人が、そう話してくれたのだ。

偉い人もきちんと身の回りのことを一人でするんだなと、感心した。
ディアはこの城で見る3人の女の人のうちの1人。
この城は人が少ない上にさらに女の人はもっと少ない。
3人はみんなメイドのような服装をしているおばさんで、侍女というものらしい。
1人はマリーという洗濯物を集めて洗っている人。
2人目はエリザベスという人で、いつもものすごい速さで掃除をしている人。
そして、3人目のディアは食事のときとか、服の手配とかそのほかいろんな細々したことをやっているらしい。
みんないい人たちだ。
ディアが主にこの世界に不慣れなハルの身の回りのことを世話してくれているのだが
カイザークとかいう、あの白い人のように
いきなりジャヴの寝所に現れたハルのことを怪しむでもなく、ものすごく好意的だった。
ディアだけではない、城の中で出会う人のほとんどがそうだった。
ジャヴやグランからなにか伝えてあったのだろう。
彼らは好意的ではあったのだが、
微妙に何か期待のこもった目で見られているような気もした。
グランもそういう目を時々する。
2日目から毎日、午前中に、ハルはこの世界のことなどを教えに来てくれるグランと勉強会をしているのだが、
ハルを気遣ってくれているのか
グランは空いた時間にはお菓子やお茶を持ってきてくれたり、声をかけにきてくれた。
彼の教え方はとても解りやすいし、この世界のことを知るのはそれなりに面白い。
ハルの知る常識からはかけ離れているものもあったが
政治や、お金などの考え方はよく似ていた。

今日も、さきほどまでグランと勉強会をしていたのだが、
ディアが来て「だいぶ時間を過ぎてますよ！」と、授業を中断させたのだった。
根を詰め過ぎるのも良くない、とディアは
ハルとグランがすっかり忘れていた食事を持ってきてくれたのだ。
それなりに記憶力が良く、勉強熱心なハルにグランもついつい熱が入ってしまうらしく、
気がつけばいつも午後をだいぶ過ぎていた。

グランはハルに、この世界の仕組みや成り立ちを丁寧に教えてくれた。
それはもちろんハルの常識とはかけ離れているからこそ、
現実として理解するのは簡単ではないが、神話を聞いているようで面白い。
実際に神という存在を知ってしまっているからこそ、切り替えも早かったのかもしれない。
この世界の輪郭が見え始めてきていた。

10

この世界は6人の神様によって作られたフォールという世界で、
6人の神様にちなんだ6帝国があるという。
帝国のほかにも国はあるが、帝国と呼ばれるのは6つだけらしい。
この国は光の神様リルヴァーナにちなんだ国でサングルド帝国という。
リルヴァーナの眷族である光竜を祖先に持つ皇帝が代々治める国で、
他の帝国はそれぞれ闇の神様ガゥルの闇竜の末裔ヒューバルド帝国、
水の神様リィンファの水竜の末裔ラヴェル帝国、
風の神様テューダの風竜の末裔シルフィ帝国、
土の神様キリエの土竜の末裔ムルグ帝国、
火の神様カカルヴの火竜の末裔ルスティーダ帝国がある。
6つの帝国はそれぞれ、独立しながらも協力して大きな世界を治めているそうだ。
神々と竜によって帝国ができたというグランの話は、まるでおとぎ話のようだった。
帝国以外の他の国は帝国に協立や属国を誓った国だったり、
完全に独立体制を貫いている国なんかもあるらしい。
そういった国は小さいが多く、帝国には手を出さないが国同士の争いは頻繁に起こっていると言っていた。
そういった事への介入や、戦争の停止、他の帝国との連携、
自国の政治などを、皇帝や帝国が行っているという。
サングルド帝国での主な政治の仕組みは頂点に皇帝、
その次に政庁、財庁、魔術庁、神殿庁、騎士庁があり、
またその下にいろんな機関があるというものであった。
政庁には5人、他の各庁には3人の庁官長がいて、仕事と権力を分担して政治を行っている。
政治に関しての重要な案件は各庁の庁官長と皇帝とで会議を行って

決議するのだそうだ。
最終的な決定権は皇帝にあるが、決議も決して飾りではなく重きをおいているという。
また、法律もきちんと定められていてサングルド帝国法という分厚い本が5冊ほどあった。
これはグランが持ってきてハルに1冊見せてくれたのだが、何とか書いてある事の意味はわかるものの、
ハルには難しかった。
ハルは女神のおかげなのかは分からないが、便利なことに
この国の言葉だけではなく書いてある文章の意味もだいたい理解できることが分かった。
だが、文字は書けない。
そのため、グランとの勉強会のほかに小さい子用の教本で文字を覚えている。

ハルがディアの用意してくれた遅めの昼食を食べながら
今日習ったことを整理していると、
部屋のドアから軽めのノックの音が聞こえてきた。

11（前書き）

皇帝視点です。

11

若き皇帝、サングルド・ジャヴ・フリードリヒはいつもの執務室で
３日前のことを思い出していた。
３日前に現れた少女。ハルのことである。
ジャヴは5年前の前皇帝の逝去の際にあったある出来事で、
女性というものに嫌悪しか感じなくなっていた。
軽く殺意まで覚えるときもあり、相当なものである。
だからと言って男に恋愛感情を抱いたことはもちろんないのだが、
女性に触れられるだけで殺意がわくという今までの状態から
自分は一生独身で過ごすことになるかもしれないと先日までは考えていた。
帝位は最悪、すでに貴族に降嫁した姉の子供でも養子にすればいいかと思っていたのだ。
血筋的には少し問題があるが、リルヴァーナの庇護が厚いこの帝国ならば
何とかやっていけるだろう。
そう、考えていた。
あの少女が現れるまでは。

あの少女、ハルは出会いからして不思議だった。
寝室にいきなり現れたのに、自身は彼女を切り殺すことなく放置してしまった。
ジャヴの居住区域は極端に人の数を減らしてある。
あそこにいるのはジャヴに幼いころから仕えている
比較的嫌悪を感じないメイドと使用人や護衛のみ。
彼らが優秀なため、侵入できるものはよほどの実力をもった暗殺者くらいであろう。
一度、勘違いをした女官が来たこともあった。

なかなかに優秀な者だったのだが、仕事を評価したことが勘違いを助長したらしい。
メイドたちも、仕事のことだと思い彼女を通したらしいが
ジャヴが彼女に女性としての魅力を感じたことはなかった。
執務室に来ていた馬鹿女たちのことを知らなかったわけではないというのに
私室まで来て、無事に帰れると過信していた彼女に待っていたのはジャヴの容赦のない攻撃だった。
皇帝の私室に許可なしに、理由もなく侵入したとして不敬に問われたと聞く。
一応命は取り留めたと報告があった気がするが、彼女のそれからに興味はなかったので
その後どうなったのかは知らない。

最初、ハルに気がついた時にも、実際殺そうと思っていたのだ。
寝ぼけていた時の自分の状態をはっきりとは思いだせないが
ただ、難攻不落だったこの場所に侵入してきたやつの顔を見てやろうと思ったのかもしれない。
それが
あの時掛布をめくった理由だったと思う。
だが、掛布をはいだところに居たのが少女だったのは驚いた。
しかも、変な格好でのんきに寝ている。
一瞬、馬鹿な貴族の差し金かと思ったが、
そこまで、ジャヴを理解していない貴族などもうほとんどいないだろう。
女嫌いのジャヴの居住区に死を覚悟させてまで娘を送り込むだろうか。
いくらなんでもそんなことはしないだろう。
新手の暗殺者かとも思ったが、暗殺者が標的の部屋で寝こけるはずもない。

何より、殺気もないし、寝たふりをしているのも感じられなかった。
うっすらと覚えていることは、声をかけて髪の毛を触ったということだ。
ジャヴは極限に眠い時寝ぼけた様な状態になってしまうのだが、
女性に声をかけ、ましてや触るなんてことをするほどではない。
ただ、あの少女に興味が湧いたのだと思う。
触ってからしばらくして嫌悪感がないことに驚いた。
それでなくとも、触ってから気がつくなんて頭がどうにかしていたんじゃないかと思う。
あの後、普通にベットで一緒に寝たのはたぶん衝撃が大きすぎて
理性的な考えが停止していたのだろう。
いや、今でも停止しているのかもしれない。
なにしろあの日から、ハルという少女については嫌悪なんてまったく感じていないのだから。
むしろ、何か小動物のような感じが可愛らしいとも思う自身がいる。
起きて、自分がハルを抱き込んでいたことにも驚いたが、おかしいとは思わなかった。
黒茶の瞳が女性に対する嫌悪感なんてすっとばしてしまったかのようにも思える。
あれで１６歳とは驚いたが、少女じゃないとわかっても何も変わらなかった。
カイザークが部屋に来た時の言葉で妙に納得したくらいだ。
これだけ嫌悪を感じないのは、普通の少女ではなく女神が選んだ御子だったからか、と。
ジャヴの嫌悪感もさすがに神に対してはあまり向けられることがない。
カイザークが少女に向かって剣を構えたときには
わずかに憤りを覚えたような気がする。
ハルが１６歳だという言葉をカイザークに言った時も
女性に援護するような言葉をかけた事実が

そんな自分が信じられなくて、思わず固まってしまっているうちに
少女の流血だ。
ハルのカイザークに対しての行動と度胸はものすごかったと思う。
常人ではできないような無駄な動きがない逆転。
しかし、それを見ても彼女が暗殺者だなんて思わなかった。
いや、すでにそう思えなかったのかもしれない。
ハルの首から血が流れているのが目に入ったときには、
自分の体の血が逆流したような感じがした。
首に袖を当てて圧迫しても、血が逆流したような感じは止まず。
気がつけば、思わずカイザークに命令していたのだ。
カイザークも何か思うところがあったのか、いつもならば
もう少し疑り深くなるところを急いで部屋を出て行った気がする。
今思えば
神官たちや魔術師には、
御子に付けられた印を見分けられる技があると聞いたことがある。
カイザークも何か感じていたのかもしれない。
あの時、カイザークが医師でもある神殿庁官長グランを呼んで、
戻ってくるまでの間も妙な感覚は収まることがなかった。
そのため、目を閉じたままのハルに何も声をかけられないまま
グランが来てもジャヴはハルの首から手を離せなかったのだ。
グランの言葉にやっと放して、ハルの体を支えたのだが
ハルの目は開かず、顔色も蒼くなっていた。
思わず声をかけたら、ありがとうと唇の動きだけで返ってきて
どうやら意識もはっきりしているらしいとわかって妙に安心した。
ハルにグランが治癒をかけるとハルの傷は癒え、
ジャヴはその時にはじめて自分がハルを心配していたということに
気がついたのだった。
グランは、ハルを神殿庁に連れて行くと提案してくれたが
多分、女嫌いのジャヴを気遣ってくれたのだろう。
だが、ハルがジャヴを不安そうに見つめている姿を見たら思わず

ここに居ればいいと言ってしまっていた。
そう言った後の、安心したようなハルの笑顔が可愛らしかったので
思わず頭をなでてしまったのだが、
その時のグランの顔は見ものだった。
あの、グランが目を見開いて絶句した様子など初めて見たような気
がする。
その後のハルの世話を頼んだ使用人たちの顔も面白いことになって
いた。
何しろ、女嫌いの皇帝が少女と一緒に住むといったのだから当然だ
ろう。
少女といってももう１６歳だと言っていたが、完全に周りは子供扱
いだったように思う。
メイドたちは、女嫌いのジャヴが連れてきたのだから
もう、嫁候補だお祝いだと騒いでいた。まあ、あそこにはメイドも
３人しかいないのだが。
この様子で行くとハルを皇妃にするために何も言わずともいろいろ
世話してくれそうだった。
幼女趣味だと噂が立ちそうだが、仕方がない。
独身でいようかと思っていたところに、
嫌悪感がまったくわかない少女が出てきたのだから
これぞまさに女神の思し召しというほかないだろう。
ジャヴの顔に自然と笑みが浮かぶ。
出会って３日目にして、ジャヴにはハルを逃がす気は全くなかった。

12

皇帝の執務室の扉がノックもなしに開かれる。
こんなことをして許される人物は決まっているため、訪問者が誰かはわかっていた。
ため息とともにジャヴが顔をあげると、ジャヴによく似た線の細い美青年が執務室に入ってきたところだった。
いや、青年というのはおかしいだろう。
よくよく見れば、女性特有の体つきをした男装の麗人。
彼女はアルトの声を響かせ、芝居がかった仕草でジャヴに言い放った。
「ご機嫌麗しゅう。我が弟よ！とうとう運命の人を見つけたと聞いて思わず屋敷を飛び出してきてしまったよ！
さあ！恥ずかしがらずに姉さんに未来の義妹を紹介しておくれ！！」
「うるさい。帰れ」
ジャヴと彼女ではテンションがまったく違う。
だが、麗人は気にした様子もなくしゃべり続けた。
「ふぅん。年を重ねたことで女性に対する嫌悪が消えたわけじゃないんだね。
ともすれば、我が弟が幼女趣味になったという噂は本物だったかな？」
最後の言葉は小さく呟いて、麗人は
ジャヴと同じ紫の瞳を面白そうに細めると、
入ってきたときと同じように唐突に体を回転させ、ジャヴに背を向けた。
「まて、・・・どこに行く気だ？」
嫌な予感がしたジャヴは、出て行こうとしていた実姉に問いかける。
弟の疑問を受けて、麗人は背を向けたまま片手を上げて答えた。

「決まっている！弟に捕まえられた天使を見に行くのさ！」
言い放って、ジャヴが何か言う前に扉は閉められた。
こんな時の彼女の行動はとても素早い。
ジャヴは今の姉に何をいっても無駄だろうと諦め、今日中に片付けなければならない手元の書類に目を戻した。

なんだかんだ言っても、彼女はジャヴに細心の気を使っている。
男装は昔からだが、あの事があってからは
会う時があっても一定距離には入ってこないし、大抵の連絡は手紙や音声で行い
彼には滅多に会いに来なくなった。
そんな彼女は、今回のことで驚いているのだろう。
いつもよりも口調が早かったし、おどけた表情も少なかった。
降嫁したとはいえ、元帝国の皇女だ。気を使ってないように見せかけて、周りに目を配り、配慮を忘れない。
そんな彼女だからハルに会わせても、そんなに悪いことにはならないだろうと判断してそのまま行かせた。
きっと姉はあのまま真っ直ぐ彼女を訪ねるだろう。
使用人たちも姉であれば中に入れてしまう。
初めて会うハルは、彼女の性格と姿に驚くかもしれないが、姉がハルを気に入ってしまえば結婚は早くなる。
姉も気に入った物はすぐにでも手元に置きたい人だから、ハルを丸めこむのに利用できるだろう。
使えるものは何でも使う。
そうしなければ、欲しいものは手に入らない。

そんなことを考えていたら、今度はきちんとしたノックの音が部屋に響いた。
「入れ」
ジャヴが入室の許可を出すと、扉が開き部屋の中にグリーンの物体

がすべりこみ、そっと扉が閉められる。
グリーンの物体は明らかに執務に関係のない類であった。
外の近衛は一体何をやっているのだろうか。
そう考えたジャヴの耳に、よく通る高めの声が届く。
「ご機嫌よう。皇帝陛下。わたくし、父の使いで参りました。ヴィオラ・ビーデルと申します」
物体は胸元が大きく開いた、グリーンの鮮やかなドレスを身につけた少女だった。
少女は貴族らしい完璧なお辞儀をすると、微笑みながらジャヴを見上げる。
一般的に見て整っている顔。幼い顔立ちだが、化粧をした顔は危うい魅力をたたえている。
大抵の人間ならば、美しいと賛美するだろう。
だが、それを見てジャヴが思ったことは一つだった。
もうきたか。
ジャヴの予想ではもう少し遅いと思っていた。もちろんこの手の女が来るのが、だ。
別に隠しているつもりはないが、ハルの外見の噂は城内に広まっているようだ。
そこから、皇帝は幼女趣味だったと勘違いする馬鹿貴族が出てきたのだろう。
そんなことを無言で考えていると、ジャヴの無言を自分の良いように解釈したのか、
少女が微笑みながら机の上にあったジャヴの手にそっと手をのせようとしてきた。
「わたくし、以前から皇帝陛下をお慕いしておりまし・・・」
少女が言葉を言い終わる前に
さくり
と、何かが刺さる音が少女の手元で響く。
その音に少女が手を見ると、少女の手にはインクの付いた羽ペンが

突き刺さっていた。
既に少女の手の下にジャヴの手はなく、そこには羽ペンで縫いとめられた机があるだけ。
「いやぁっ！」
視界に映る光景を認識し、痛みと驚きに少女は手を引こうとしたが羽ペンは手を貫通して机に深く刺さっていたため
抜こうとすればするほど、傷口と痛みが広がっていった。
羽の部分が意外に固くなっているので、少女の手の肉を抉っていっているのだろう。
動かすたびに血が机の上に流れていく。
「――――っ！」
少女はもがけばもがくほど、酷くなっていく痛みと血に泣きながら、手のひらから羽ペンを抜こうともう片方の手で必死にペンの羽を引っ張っている。
そんな状態の少女のすぐ傍で、羽ペンを突き刺した本人である皇帝は淡々と机の上の書類を集めて持ち上げると
少女に一瞥もくれずに部屋を出て行った。

「机が汚れた。処理しておいてくれ」
そう、なんでもない事のように部屋の外で待っていた赤毛の騎士に告げる。
騎士は部屋の中から漏れ聞こえる声に、顔をしかめた。

「ジャヴ。やりすぎだ」
「通したのはお前だろう。お前の責任だ」
淡々と、告げる皇帝に騎士は苦笑いを浮かべた。
「・・・この分だと、何人も来そうだったんでな。一人がやられりゃ、しばらく出てこねえだろ」
とんでもないことを言った騎士に無言でジャヴは歩き出す。

「おーい。どこ行く？」
騎士に呼びかけられ、書類を抱えた皇帝は
少し振り向いて、戻るとだけ彼に告げた。
それだけで分かったのか、騎士は手を上げて彼を見送る。
「はいよ、了解。後片付けはしておく」
赤毛の騎士は上げた手をひらひらと振ると、面倒そうに悲鳴の聞こえる執務室へと入って行った。

13

軽いノックの音に現れたのは、ジャヴにそっくりの銀色の髪に紫の瞳の男装の麗人だった。
突然入ってきたその人は昼食を食べていたハルを見つけるなり
ものすごい勢いで近寄ってきて、喋り始める。
「貴女だね！　弟の天使は！　はじめまして、
あなたのお名前は？　天使さん？
ああ、自己紹介がまだだったね。ついつい興奮してしまったよ！
私の名前はサンドラというのだが
貴女の口からはぜひお姉様と呼んでほしいものだね！
さあ！呼んでみてくれたまえ！」
すべてを息継ぎなしで言いきったサンドラは、ジャヴによく似た美貌でにっこりと
ハルにお姉様、と呼ぶことを求め始めた。
ハルは思わず食べていたものをのどに詰まらせそうになりながら
何とか無理やり飲み込んで、「ハルです」とだけ言うと
サンドラと名乗った女性を見る。

お姉様？
彼女、サンドラが女だということはわかるのだが
なぜお姉様と呼ばなくてはならないのだろうか。

弟という言葉があったし、ジャヴによく似ているからにはおそらくジャヴの姉か血縁者であることに間違いはない。
だが、ジャヴの姉なのにハルが彼女をお姉様と呼ばなくてはならないのは何故だろう。
もしや、彼女は弟ではなく妹が欲しかったのだろうか？
悩むハルの横でサンドラは期待に目を輝かせながら、ハルを見つめ

ている。
お姉様とハルが言うまでずっと見てそうだった。
美人に見つめられるというものはある意味、とてもきつい。
きっと気のせいだとは思うが、見つめられているだけなのに妙に息苦しさを感じる。
息苦しさと、視線に耐えきれなくなってハルは口を開いた。

「お、・・おねえさま・・・？」

姉妹のいなかったハルには言いづらい言葉だった。
妙な気恥かしさで顔が赤くなる。
なぜかとても恥ずかしい。

数秒の沈黙。
ハルを見つめていたサンドラは、赤くなったハルを、
いきなり満面の笑顔で抱き上げると
叫んだ。
「この、小動物め！　大好きだーー！！」
どうやらハルはサンドラに気に入られたらしい。
サンドラの突然の行動に動けないでいるハルを力いっぱい抱きしめると、
人形や赤ん坊にするように、くるくるとその場で振り回した。
「ハル！ほんとに愛らしいな君は！！　弟にはもったいないくらいだよ！！
いや、ほんとにもったいない！　どうだね？　私の息子の嫁にならないかな？！」
本当に嬉しそうに聞いてきたが、いい勢いで振り回されているため、
舌を噛みそうでハルは喋ることができない。
というか、若そうなのに息子がいることにも吃驚だった。
そのまましばらくハルを振り回し、サンドラはやっとハルが喋れな

かったことに気がついたらしい。
抱き上げたままハルが座っていた席に座りこむと、そっとハルを膝の上にのせた。
「悪かったね。つい、嬉しくなってやりすぎてしまったようだ。ハル、大丈夫かい？」
サンドラが叱られた子犬のような表情で訊ねてくる。
本当に、顔がいい人は得だと思う。
綺麗な大人の女の人だというのに、今のサンドラの表情は可愛らしい。
それにしても、なぜ彼女の膝の上に乗っているのだろうか。
もっともな疑問が脳裏をかすめたが、子犬のような瞳に見つめられハルは、疑問を飲み込んで頷いた。
「大丈夫です」
そう言うと、サンドラの顔が笑顔に変わる。
「いいね！」
サンドラはハルの頭を片手でわしゃわしゃと撫でる。
サンドラのまるで小さい子にするような撫で方に、
ハルは自身が何歳に思われているのか疑問に思ったのだが
嬉しそうなサンドラの顔を見てしまったら何も言えなかった。
ひとしきり、頭を満足するまで撫でた後
サンドラがハルに尋ねる。
「ハル？　なんで、君はドレスを着ないでズボンを着ているんだい？」
そう言うサンドラだってズボンをはいていたが、彼女と違って男装をしているわけではなさそうな
ハルの恰好が気になったようだ。
この世界の主流では女性はドレス、男性がズボンらしく
メイドの人たちもスカートだ。
「えっと、サ・・お姉様だってズボンじゃないですか」
サンドラさん、と言いかけたハルはサンドラに目線だけで窘められ

る。
こんな風に目が物を言う所は、サンドラがジャヴと姉弟だと感じさせた。
ハルの聞き返しにサンドラは胸を張って言った。
「だって、こっちのほうが私に似合っているじゃないか！
やっぱり似合っているものを着たほうが美しさというものは引き立たされるだろう？」
確かに、サンドラは男装がよく似合っていた。
中性的な顔立ちと、細いが女性にしてはちょっとしっかりとした体形で
男物の服を着ると逆に女性っぽさが滲みでていて、妙な色気がある。
「確かに、似合っています。
えーと、私がズボンをはいているのは」「私との約束があるからだ」
ハルの言葉を遮って、声が響いた。いつの間にか部屋に入ってきたらしい。
よく知っている声にハルは振り向こうとしたが、それよりも早くサンドラの膝の上から持ち上げられる。
「ひゃあ！」
ジャヴに持ち上げられたというか、サンドラの腕からすっぽり抜かれたといったほうが正しいだろう。
そのまま、今度はジャヴに抱きあげられた。
この3日間で、ハルはジャヴに抱き上げられるのには慣れてしまっていた。
うら若き乙女としては、慣れてはいけなかったのだろうが
誰も見ていなくても恥ずかしいから降ろしてくれといくら彼に頼んでも無駄だったのだ。
もう2日目の夜あたりで諦めたので、抱き上げられるのは別にかまわなかったが、
いきなりは引っこ抜かれたのにはちょっと吃驚した。
「何をやっている？」

サンドラよりも少し深い紫の瞳が、ハルを覗き込む。
「サンドラさんとお話しをしていました。ジャヴは、もう少し仕事じゃなかったですか？」
たしか、４時に約束をしていたはずだったが、今は3時頃である。
3日ほどの付き合いだったが、時間には正確なジャヴだったからか、
ハルは不思議そうに首を傾げた。
その問いかけに、ジャヴは軽く息をついた。
「・・・・早く終わった。もう少ししたら始めるぞ、準備してこい」
ジャヴがすこしだけ言葉に詰まったことは気になったが、
ハルは早く始められることが嬉しくて頷いた。
用意するために降ろしてもらおうとして、固まっているサンドラが目に入る。
そう、彼女は完全に固まっていた。

驚きすぎて、言葉も何も出てこない。
あの、弟が自ら進んで女性に触っただけでなく、自然に抱き上げたのだ。
この間まで、寄ってくる女性は全て切りつける勢いで排除していた弟が
少女と約束して、抱き上げて、会話している。
夢じゃないだろうか。
頬を抓りたい衝動に駆られて思わず尋ねるように呟いてしまう。
「・・・ジャヴ。私は夢を見ているのかな？奇跡に近い光景を見ているのだが」
茫然とした姉の言葉にジャヴはそっけなく返した。
「とうとう幻覚が？」
頭がおかしくなったのかと、言外に言う弟に
サンドラはいつもと同じ弟だ、とほんの少しだけ安心した。

14

体を酷使している間だけは、不思議と楽に呼吸ができるような気がした。
自分の置かれた状況も。世界も、地位も関係ない。
見つめるのは相手の動き
動かすのは自分の手足
その時だけは、何も頭に浮かんでこない。

「はぁ・・・ぅくっ・・・・・・・・」
ハルの苦しそうな吐息だけが広い部屋の中に響く。
1時間の間に、幾度となく合わせた紫の眼からは冷静な色が消えていないというのに
ハルの頭は、動きすぎた疲労と酸欠のため冷静に何かを考えることができなかった。
体にも、腕にも力が入らなくなって
とうとう、耐えきれなくなってハルの膝がかくり、と落ちる。
それでもその眼は必死にジャヴを睨みつけたまま。
一方、睨まれているはずのジャヴはハルと対照的に冷静そのものだった。
息も乱れていないし、いつもと変わらず余裕の表情で立っている。
体はもう限界だったけれど、それでもハルはジャヴから視線は外さなかった。
「ハル、・・・・そんな眼で見られても男には煽っているようにしか見えない」
ハルの涙目で上目使いに見つめてくる様子に、ジャヴはちょっと唇の端を歪めて笑う。
そんな眼とは言うが、その原因はジャヴである。
悪役のようなジャヴの笑いに、悔しくなったハルは気力を振り絞っ

て立ちあがろうとした。
が、その瞬間にはハルの首にジャヴの剣があてられる。
「これで、１０敗だな。これで今日は終わりだ。限界だろう？」
余裕の言葉とともに、首にあてられていた剣がジャヴの腰の鞘へと戻る。
悔しいが、何か言う気力もないハルは素直に肯いた。
手に持っていた剣を引きずるようにして鞘にもどすと、べたっと床に倒れるように寝転ぶ
ほてった体に、床の冷たさが心地いい。
体力の限界だった。
しばらくそうしていたかったが、なぜかジャヴの腕がのびてきてハルを抱き上げる。

「熱いです！」
お互い今まで運動していたのだから当然だ。
ハルの体はもちろんのこと、ジャヴの体もちょっと汗ばんでいる。
そんな状態で抱き上げられて熱くないはずがない。しかも、べたべたする。
文句を言ったハルに、ジャヴはしぶしぶといった態でハルを部屋に備え付けの簡易ベンチに座らせた。
軽く運動をするための部屋なので、布張りではなく木の簡素なものだ。
それでもいろんな模様が彫られ、深い艶が光るこれは安いものではないのだろう。
しかし、疲労には勝てない。遠慮なく、ぐったりと体をベンチに預けた。
そんなハル達にぱちぱちぱち、と拍手をしながら部屋の隅にいたサンドラが近づいてきた。
「やあ！すごかったねえ！　何時もあんなことをしているのかい！？
弟の剣についていくのは大変だろう？　ましてやその小さい体でよ

くあんなに重たい剣を受け流せるものだ！！
ハル、君は剣に覚えがあるのかい」
２時間ほどジャヴとハルの剣の打ち合いを見ていたサンドラは、本気で驚いていた。
サンドラも多少剣を使えるが、
帝国騎士のトップを軽くあしらえるほどの弟の剣技には遠く及ばない。
２人が剣の打ち合いをはじめたときには、驚いた。
てっきり、お遊びのようなものを想像していたのに。
彼が少女相手にあまり手加減をしていないように見えたのにも驚いたが、
ハルが剣を上手く使っていることにも驚いたのだ。
小さくて可愛らしいハルが弟と２時間も剣を打ち合い、
流石に勝つことはなかったが、１０敗しかしなかった。もちろん、
弟が手加減していたのはわかっている。
体格の差を素早さで埋めるように隙を突くハルに対して、ジャヴは冷静にすべてを見切り受け流していた。
力の差から、ハルはあまり剣を打ち合うことをせず逃げているようにも感じられたが、
それでもジャヴの剣を受け止め、なおかつ弾いていたところもあった。
確かに二人の間には実力の差、経験の差は確実にある。
だが、信じられないことにジャヴが攻撃を受けそうになった場面も何度かあったのだ。
長い時間打ち合っていたため体力が限界に近づいているはずなのに、
ハルは剣を合わせた瞬間に、合わさったところを支点にしてくるりと回りながら飛びあがった。
それだけでも並の運動神経ではできない。
とても驚いたが、それだけではなかった。
ハルはそのままジャヴの後ろ側に着地してから攻撃をするのかと思

いきや、
空中で体をひねりながらジャヴの頭めがけて剣を振りおろしたのだった。
瞬発力、体の柔らかさと判断力がそろっていないとできない攻撃だ。
そもそも、そんな動きをする騎士は見たことがない。
まるで曲芸を見ているようだった。
とっさに体をひねって避けたジャヴだったが、よけきれなかったのか肩のあたりの服に剣先を食らっていた。
どこかの騎士団にでも所属していたのだろうか。
サンドラから見てハルは剣の扱いに長けているようにみえたのだ。
人ではないといわれる竜の血を継ぎ、神に祝福された皇帝にも劣らないほどの運動能力。
正直に言えば、サンドラはハルを他の帝国の皇家の者かとも疑っていた。
サンドラの問いに、ハルはあいまいに頷く。
「まあ・・・、少しだけ」
ジャヴにもらうまで、ハルは今使っているような映画に出てきそうな剣は使ったことなど全くない。
使っていたのは主に木刀と、ナイフと包丁だ。
木刀は護身のためにと中学の時に入部した剣道部で。
ナイフと包丁はコンビニ強盗、銀行強盗、バスジャックなどでやむなく扱うことになったモノ達である。
人質になると、毎回といっていいほど首筋にナイフを当てられていたので、
その特性や使い方を知らなくては対処できないだろうと祖母が護身用に教えてくれたのだ。
サーカス出身の祖父母は、考えられない頻度で危険に遭遇するハルを心配し、鍛えてくれた。
才能があったのか運動神経が良かったのかハルの刃物さばきはどんどん上達し、

ナイフ投げなら１０ｍ位離れていても、簡単に目標に当てる事ができるほどになった。
成長するにつれてその異常さがわかってきたのだが、小学生の時からありえないほどの頻度で人質にされるという、
不運なハルには、祖父母の教えてくれた技術は怪我をしないために、もっと言えば生き残るために必要だった。
さすがに小学生で腹筋が６つに割れそうになったときには祖父が嘆いたが、
時が経つにつれて筋肉はついているはずなのになぜか目立たなくなっていった。
鍛えているのに外見の印象が幼いままであったため、幾つになっても人質にされることは多かったが、
自力で切り抜けられるようになったのは不幸中の幸いだっただろうか。
そんな技術を身に付けたハルは、いつしか不幸少女という悲惨なあだ名をつけられてしまった。
中学では剣道部に入り、竹刀を持ち歩くようになってさえ
そういう目にあっていたからかもしれない。
高校では、帰宅時間が遅くなるために入部を断念したが。
最初は、剣道をしているという目印になり、武器とも呼べるものを持っていたら牽制になるという理由で始めた部活だった。
死活問題とも相まって、ハルはどんどん上達し3年になるころには部員達に負けることはなくなっていた。
大会などには、必ずと言っていいほど事故や事件で出られなくなっていたので、実力は判らないままである。
そんな風に過ごしてきた経験のためか、
この世界の剣も昨日、今日と慣れてきたらしく振り回せるようになってきていた。
曲芸のような動きが多いとは、剣道部の部員にも言われたことだ。
防具をつけたまま、どうしてそんなに動けるのかとよく不思議がら

れたが
祖父母の特訓に比べたら動きやすい、としか言えなかった。
それに、重力の問題とかではないかと疑っているのだが
初日の勘違いではなかったようで、ここはとても体が動かしやすい。
まだまだ、力も技もジャヴには全然及ばないが。もう少し鍛えたら、
少しは見られるものになるだろうか。
「ちょっとっていうレベルじゃないだろう！君みたいな少女がこん
なに剣を扱えるなんて！！
弟にも負けてはいたけれど、十分剣で食べていける腕前だよ！」
興奮しながら言うサンドラに、ハルは褒められて嬉しくなったが
サンドラの言った「君みたいな少女」という言葉にちょっと引っか
かりを覚えた。
それが顔に出ていたのだろう、ジャヴがサンドラに向かって一言言
った。
「１６歳だ」
分かりやすいほどに、笑顔でサンドラが固まった。
たっぷり１０秒は固まっていただろう。
サンドラはひきつった笑顔のまま、ギギ・・と音がしそうなくらい
ぎこちない動作でジャヴの方へ体を向ける。
「・・・・・ハルが？・・・・１６歳？てっきり私は１２歳くらいだ
と・・・」
ここまで驚いたサンドラは、そう本気で思っていたのだろう。
「１年が３６５日で１日は２４時間の暦で１６歳です！」
ハルはこのところ毎日繰り返している言葉を叫んだ。
年齢を言うと、暦の数え方が帝国間の標準のものではないのだろう
と聞かれるのだ。
この区域の人たちに紹介されるたびにされる反応に、ハルは暦を読
み上げた上で、自身の年齢を主張するようにしたのだった。
彫りの深い外人顔の人たちと比べてしまえば、１２歳くらいに見ら
れるのかと

日本に比べて、更に外見年齢が下がったことで悲しくなったハルに気がついたのか、サンドラがあわてて言う。
「いや、可愛らしいし、いいじゃないか！
・・・うーむ、最初は弟が幼女趣味にでもなったのかと思ったら、そういうことなんだね！」
幼女趣味やそういうこととは、どういうことかハルにはわからなかったが
隣でジャヴは否定することなく頷いていた。何か二人の中に通じるものでもあったのだろうか。
「でも、なんだって、剣の稽古なんてしているんだい？　ハルが戦うわけでもあるまいし！」
サンドラの不思議そうな言葉に、ジャヴが答えを返す。
「ここ以外は城でも安全とは言い難い。
だから、自分の身を守れるようになるまでこの区域から出させないようにしている」
そうなのだ。この世界でも、ハルに前と同じことが起こらないとは言い難い。
この世界では大丈夫だと思いたかったが。
それでも、ハルは危険というものを知っている。自分で自分の身を守れるようになりたかった。
「護衛をつければいいんじゃないかな？」
ハルの考えとは違い、サンドラは腕の立つ騎士を一人でもハルにつければ城の中なら大丈夫ではないかと提案した。
むしろ、サンドラとしてはハルの腕ならば護衛などほとんどいらないとさえ思ったのだ。
サンドラの提案にジャヴの顔がちょっとだけ固くなる。

「馬鹿貴族が何をしてくるか。　護衛は付けるが、保険だ」
本当は、ハルの剣の腕を知って鍛えてみたくなったのもある。
ジャヴだって、ただの少女であるハルが剣を扱えるとは思っていな

かった。
最初は、ハルに平和ボケしたところがあるので
本当に剣が危険なことを認識させるためだったのだが
二日のうちに、そんなことは関係なくなっていた。
ハルの腕なら騎士として十分通じる。
だが、ハルには剣を扱うことに対する注意というか危険度がしっかりと認識できていない気がするのだ。
ハルは日常が危険だとは思っていない。
剣を使えるという意味でも、それは試合や訓練での話だ。
実践というものを教え込まなければ、危険な考え方だった。
馬鹿な貴族にも、もうジャヴがそばにおいている少女の情報は出回っている。
これで、ジャヴの女性に対しての気持ちが変わったと勘違いした貴族は絶対にいるであろう。
だから、邪魔だと考えられるハルを消しに来る可能性はものすごく高い。
いや、ハルが女神の御子だということを考えても殺すという手段ではなく、
誘拐や拉致監禁という手で来るかもしれない。
その時のためにもう少し、ハルに危機感を叩き込んでおかなければならなかったのだ。
「そうだね。馬鹿な貴族には困ったものだ。　私はハルを気に入ったから、
夫と私の力で周りの貴族には脅しをかけておくよ。　まあ、微々たるものにしかならないかもしれないが」
「頼む」
サンドラは弟の言葉に一瞬息を飲んだ。
弟の頼むなんて言葉、いったいいつから聞いてないかわからないがとても信じられないことだ。

あの事件の後、ほとんど姉である自分さえ直視することはなかったのに。
今話している状態も奇跡に近いが、頼むという言葉が出るとは。
「弟よ！　君は本当にいい人を手に入れたね！！」
サンドラは満面の笑顔でそう告げると、疲れたのか瞼が落ち始めているハルを起こさないように部屋を出て行った。

15

目を開くと、畳が目に入った。
あわてて身を起こすと、そこが自分の家だということに気がつく。
物の配置も、畳に映る影もいつもと変わらない。
いつもと変わらなかった。
矛盾を頭は訴えるのに体がついていかない。
今まで夢を見ていたんだろうか？リルヴァーナも、ジャヴもみんな夢であったのだろうか。
だって、ほら祖母の呼ぶ声が聞こえる。
「・・・晴・・晴ってば！どこにいたの？　寝てたんだね？　頬に畳の跡がついてるよ！
・・もう、ばあちゃん達出かけるからね！　お母さんもすぐ帰ってくると思うけど、
それまで出かけるんじゃないよ！！」
ふすまが開いて、祖母が現れる。晴を見つけると腰に手を当てて言った。
なぜか、祖母は白いものが混じる髪をきれいにまとめて、余所行き

用の着物を着ている。

そうか、今日は祖父と祖母のデートの日だった。こういう時の祖母に逆らうと後が怖い。

あいまいな返事を返して、欠伸をした。

「晴？」

呼ばれたのは名前。

いつもの日常であるはずなのに、何故だろう、晴という呼ばれ方が懐かしく感じた。

考えていると、祖母は寝ぼけていると思ったのか晴の顔を覗き込んでくる。

「大丈夫かい？・・・ああ、ただ寝ぼけてるだけかい。　若い娘が休日にデートの一つもしないなんて情けないねえ。

ま、ばあちゃん達はいってくるから、後は頼んだよ？」

「うん、いってらっしゃい」

晴の声と顔色に、祖母は心配ないと判断したのかそのまま、玄関のほうへと歩いていく。

デートと言ってもこんなど田舎で何をしろというのだろうか。相手がいたとしても、ちょっとした繁華街に出るだけで公共交通を使用して片道2時間だ。せっかくの休日に疲れることはしたくない。

「そろそろいくぞ～」

「はいはい。　女の支度には時間がかかるんだよ」

祖父の祖母を呼ぶ声と、祖母の軽口が玄関へと消え、車の音が遠ざかってゆく。

今日は街へ映画とショッピングだと言っていた。帰ってくるのは夜だろう。

車だと電車より近くなるとはいえ、片道1時間はかかる。

家の中に人の気配が無くなった。ハルは起き上がって、体を伸ばす。

ちゃぶ台に置いてあった小豆入りのお手玉を手に取って立ち上がると、縁側へと向かった。

庭の木々の緑が反射して目に眩しい。

緑の影にいる者たちは日差しには当たりたくないみたいだ。日陰の部分に蹲っていたのに、晴が庭に下りるとちょこちょこと出てくる。

ふわふわしたもの、子鬼のようなもの、鳥みたいなもの。

いつもの顔ぶれがハルの足の周りにまとわりつく。暇なら、遊べということだろう。

ここの異形の者たちは遊びが好きだ。

晴が持ってきたお手玉を投げるとうまくキャッチしてみんなで投げ合っている。

5個も同時に投げ合うと、誰に来るかわからないので結構難しいものなのだ。

1人に3個ぐらい一気に来た時にはいかにうまくキャッチするかがとても難しい。

段々と投げるスピードを速くしていくので晴も混じって、白熱した戦いになる。

これで日々反射神経を鍛えられているような気がする。

しばらく投げ合いが続いていたが、一匹が突然動きを止めた。

「帰ってきた」

そう言うが早く、それは素早い動きで緑の中に入っていってしまった。

他の異形たちも、お手玉を晴に投げてよこすと次々に緑の中へと戻っていく。

ちょうど最後の一匹が戻ったところで、門のところに母親の姿が現れた。

いつも、彼らは晴の母親が来ると隠れてしまう。相性が悪いのかもしれない。

「晴。ただいま」

買い物袋を提げた母親が晴を見つけて笑顔になった。

おそらく、荷物を運ばせようというところだろう。

「一杯買っちゃった。重いのよ、晴、運んでくれない？」

「ご褒美があるなら、頑張っちゃうよ？」

笑顔で言われては、やるほかないだろう。

駄賃代わりにおやつを要求すると、母親はしょうがないわねえと苦笑した。

「そう言うと思ったわ。葛饅頭買ってきたから、生もの冷蔵庫の中にしまったらおやつにしましょうか」

「やったあ！」

ご褒美という名のおやつがあるならば、やる気も出ようというものである。

晴は母親の持っていた買い物袋を受け取ると、台所へと軽い足取りで向かった。

冷蔵庫に、食材を入れようとしたところで、買い物袋の下のほうに何か固いものが入っていることに気がつく。

「食べ物じゃない硬さだなぁ。日用品かな？」

ちょっと気になったが、後で取り出せばいいやと、上のほうの食材から冷蔵庫に入れていく。

しばらく冷蔵庫と格闘していたら、母親が手を洗って戻ってきた。

「いっぱいあるでしょう？安かったから」
晴の後ろで母親が、大変だったわとつぶやく。確かに量が多い。
「言ってくれれば荷物持ちに行ったのに」
「そうねえ、晴もこんなに大きくなったものねえ」
感慨深げに呟いた母親の一言が、晴の動きを止めた。
ガタッ
手の力も緩んでしまったようで、ハルは食材を取り落としてしまう。
慌てて拾おうとして、気が付いた。
なぜだかわからないが、拾おうとした指が震える。食材が拾えない。
気がつけば、寒くもないのに体が細かく震えていた。
「どうしたの？晴」
母親の柔らかい声が背中にかかる。
違和感が、急に湧き上がった。
「晴？」
心配そうな声だ。震えが止まらないハルを心配してくれているのだろう。
こんなに心配されているのに、ハルには言葉を返すことができなか

った。
必死に、湧き上がってくる違和感と震えを意志の力で抑え込もうと
片手で服の裾を握りこむ。
反対側の震えそうな手で、食材をつかみ冷蔵庫へ入れた。
「大丈夫だよ・・・・。ちょっと・・・・寒かっただけ、冷蔵庫の前
にいたから」
母親のほうを見ることができずに、晴は次の食材を取ろうと買い物
袋の中に手を伸ばす。
さっきの固いものが手に当たる。
ハルがそれを取り出そうとしたら、母親の手がそれを抑えた。
「これは、いいのよ」
晴の手の中からそれを奪っていく。
ゆっくりと視線を向けたハルの目に映ったのは
母親の手の中にあった、荷造り用の麻紐だった。
「っ」
目を見開いた晴に、母親はするするとそれを引っ張り出していく。
動けないハルに、笑顔を見せながら
母親は無造作に麻紐を適当なところで喰いちぎった。
ブチンっと音がして、麻紐が切れる。

普通は切れるはずがない、ソレは本当に力任せに喰いちぎったのだろう。

母親の口からは笑顔のまま、血が溢れ出していた。

真っ黒なその眼が、黒目が、吸い込まれそうなくらいに深い色を狂気を湛えていた。

口の端から血を流して、まるで歌っているような口調で彼女はハルに告げる。

「大きくなっちゃいけないでしょう？

しゃべってはダメ。

だって、晴はずうっと、あたしの中にいるんでしょう？」

そうしたら、きっとあの人も戻ってくるわ

そう呟いて

開いた唇から更に、血と、言葉があふれ出る。

ぼたぼたと台所の床に血がたれ、ありえない量の血だまりを作っていく。

不意に、母親の手が動いた。

それは本当に一瞬の出来事で。

どうやったのかわからないうちに晴の首には麻紐が巻かれていた。

思いっきり引っ張られて、晴の体が体勢を崩し台所の床に倒れこむ。
けれど首の力は緩まなかった。苦しさに紐を何とか外そうとするが、
首に深く食い込んだ紐はどうやっても外れない。

「貴方は私の子供のまま、子供のままで、ナカにいるの、ねえ、・・・」

繰り返される呪いのような母親の言葉を聞きながら、体をばたつかせて
紐の間に指を入れようと必死で抵抗をする。

目がかすんで意識が落ちそうになったところで、
突然に晴の首の苦しさが消えた。

静寂。

声も母親の気配も何もない。

恐る恐る目をあけても首の紐もない。
目に入るのは畳と、いつもの影だけだった。

キィ・・・・
かすかな物音に上を向くと、
目に入ったのは欄間からぶら下がる物。

こぼれおちそうな目玉。

ありえないくらいに伸びた舌。

赤黒く変色した醜い顔。

排泄物の匂い。

欄間からぶら下がる母親に、晴は、絶叫した。

「っっ・・・」

飛び起きると、ハルはまず、周りを確認した。
天蓋付きの豪華なベットに、暗闇の中うっすらと見える部屋の様子。

ここは、ジャヴの部屋の隣にあるハルが借りている部屋だ。
それを認識して、やっと脳は活動を始めた。
全力疾走した後のように安定しない呼吸を、ゆっくりと整えた。
口の中は乾いているのに粘ついていて、とても気持ちが悪い。

夢だ、夢だ。と何度も心の中で繰り返すと、段々と冷静になってくる。

ハルは汗をかいている額を手で軽くぬぐうと、ベットを抜け出した。
この夢を見たあとは、いつもこうなる。
これ以上は、今日はもう眠れない。

悪夢は、元の世界に居た時からずっとハルを苦しめていた。二週間に一度は必ずこの夢をみる。
場所は変わっても、場面が変わっても、ハルの年齢や容姿が変わっても
それでも夢は必ず母の言葉と最後の姿を見せつけるのだ。
母の最期を覚えていない自分を責めるように。

ハルはテーブルに置いてあった水差しを持ち上げて、コップの中に水を満たした。
気を落ち着けるために、コップの中の水を口に含む。
粘ついた口の中が水で潤されて
幾分か、気分がすっきりとしていく。
周りをみるとまだ、夜中のようだった。外は真っ暗で、物音も聞こえない。
ハルは静かに部屋を抜け出すと、庭へと続く廊下に出た。

16

この世界に来てから一週間たっただろうか。
夢をみることが無くなって、ハルは本当に安心していた。
だがそれは、ジャヴとの稽古で疲れきって泥のように眠っていたのが原因だったらしい。
今夜夢を見たのは、ジャヴとの稽古に体力の余裕が見えてきたからであろう。
毎日、繰り返される剣の稽古にハルは信じられないくらい順応していた。
倒れてしまうまで体力を使うことが無くなって、
剣に加える力の使い方を覚えたといった方が正しいだろうか。
まだジャヴには勝てるなどとは冗談でも思えなかったのだけど。

そんなことを考えながら歩いていたら、運が良かったのか、
ハルは見回りをしているはずの騎士に出会わずに庭へ出ることができた。
庭に出ると、ハルは迷わずに整備された道を外れて緑の深いところへと進む。
広い庭は、小さいハルを隠してしまえるほど緑が溢れていた。
人の気配も遠く、薄く。
ハルが歩く音と葉を揺らす音、小さな生き物の立てる微かな音が耳を掠めていく。

どれだけの濃い闇であっても、夜の闇は怖くない。
何もかもを包み込んで、隠してしまう闇の中には怖いものなんて何一つない。
本当に恐ろしいのは、怖いのは自分を含めた――――人だ。

緑の中に蹲る。
木や、緑の匂いに安心した。これは元の世界と変わらない。
でも、違うのだ。

自分自身が、他の人と違う。
経験も。
そしておそらく、能力も。
ここにきてから一週間。
たったの一週間だ。
けれども、ハルはここにものすごいスピードで馴染み始めていたし
身体能力は以前より上がった。
そう。
確実に、ハルの運動能力は上がっていた。
自分自身ですら、はっきりとわかるくらいに体が軽くなった。
世界そのものが違うのだから、前に考えたように重力などの関係で
そう感じているだけかもしれない。
けれど、一日経過するごとに
ジャヴのあんなに速かった動きも、何となく感じられるようになっ
てきている。
これはおかしいだろう。と頭の中の自分が叫ぶ。
今の状況は、ハルの中の恐怖を確実に助長している。
それを差し引いても、ハルは以前から自分自身が怖かった。
幼いころから人とは違う、この自分自身が。

他人には見えないものが見える目。
聞こえないものが聞こえる耳。
触れられる、人ではない体温。
そして、怯える母親。

何度も、事件に巻き込まれることで

周りは皆、ハルに対して不思議がっていた。
気味が悪いという人もいた。
けれども、ハルはあまり表だって人に嫌悪の感情を向けられた事がない。
それも、怖かった。
今は大丈夫でも、いつか恐怖の対象になってしまうことが。
ぽろりと疑問を口に出してしまえば、途端に人はハルを排除しようとするのではないだろうか。
母のように。
頭の片隅にこびりついて離れないその考えは
ふとした拍子にハルに牙をむく。

異形の、人とは違うモノたちに、
それは小さな神と呼ばれるものであり鬼のようなものであったのだけど。
ハルが不安を零すと、彼らは決まって笑ったものだった。
お前に害なすものなど、いないよ。と
みんなお前が大好だと。傷つけるようなことはしないし、させない。
言葉を話せるモノは大抵そう言ったし、話せないモノたちは心配いらないとでも言うように
ハルの手を、指を握り笑っていたものだった。
もちろん、出会うすべてのモノがハルに友好的というわけではなかったけど。
日本には、多くの神がいるという。
田舎であったからなのだろうか？確かに、キラキラしたモノは沢山いた。
神社などにも、道端にも、森にも。
けれど、リルヴァーナのようにあれほど強烈なモノは見たことがなかった。
凄すぎて怖かったのに、なぜか知らないけれど安心した。

何故、いつも安心するのは人ではないモノの傍なのだろう。
どうして、自分は人なのだろうか。

いっそ、人ではなかったならば
これほど悩むこともなかったのに。

沈み込んだまましばらく顔を上げずにいたら、
いつの間にか周りがぼんやりと明るくなっているのに気がつく。
顔をあげると、色のついたぼんやりとした光がまわりに漂っていた。
ぼんやりとした光に目を凝らすと、光の中に妖精のような姿の小さな者たちがいて。

「大丈夫？」
「くるしいの？」
「いたいの？」

いろんな色の妖精のような者たちは口々にハルに聞いてくる。
ちょっと煩いが、心配してくれたのだろうか。
「大丈夫。　怖い夢を見ただけですから」
正直に答えると、周りの者たちがもっと騒ぎ出した。
「それは災難ね！」
「かわいそうだわ」
「慰めてあげる！」
「そうね、私たち、慰めてあげるわ！」
「歌を歌いましょうか？」
「お話をしてあげましょう！」
「いえ、きれいなお花を見せてあげるわ！」
彼らは口々に色んなことを言ってくるが、その騒がしさが今はとてもありがたかった。
世界は違うのに、異形の者たちはどこでもハルに接してくれる。

その事が、とても嬉しい。
思わず涙が出そうになって、あわてて上を向くと、光の一つがびっくりした声を上げた。
「まあ！貴女、女神さまの印をつけているのね！素敵だわ！！」
その声に、周りも女神さま！と口々に叫ぶ。
神官のグランが言っていた印だろうか。
わからないので口を開かなかったハルの前に、光たちがきれいに並んだ。
「女神の御子のお嬢さん。私たちあなたのこと気に入ったわ！
素敵なんですもの！！」
「困ったことがあったらいつでも呼んでね！」
「でも、ここじゃ私たちあんまり力を使えないわ。　竜がいるもの」
「そうね。　竜の気配があるから派手なことはできないわ」
そう言うと、並んだ光たちはふわふわと踊るようにハルの周りを漂いだす。
幻想的で美しい光の様子に、ハルは言葉もなく見入っていた。

しばらくすると、楽になった思考と
戻ってきた冷静さが視界の中に別のものを見つけた。
近寄っては来ていないが、周りのふわふわしたもの達に比べキラキラしいのでかなり目立っている。
なんとなく、ハルは彼女のような気がした。
「リルヴァーナ？」
キラキラした気配は、そこだけ明るくてとても目立つ。
案の定、前のような姿でリルヴァーナはハルの目の前に現れた。
容姿は母親とよく似ていたが、彼女の明るい雰囲気は違うものだと認識させてくれるには十分だ。
彼女はハルに、この前のように微笑みを向けた。
「ハル。こんばんは」
そう言って、近づいたリルヴァーナは優しくハルを抱きしめる。

草花の匂いとよく似た匂いと、人肌にとても安心する。
安心したのに、涙が零れた。

「・・・あれ？」
ここで泣くようなことなんて一つもなかったはずだ。
なんでだろうと、目をこするハルに、リルヴァーナは優しく笑った。
ハルが落ち着いてきたところで、リルヴァーナはゆっくりと腕を離した。
見上げたリルヴァーナの顔は、少し厳しいものになっていた。
「ハル。ずっとこうやって、元の世界でも同じことをしていたの？」
リルヴァーナの問いに素直に頷く。
祖父母がいたころは、彼らの布団に潜り込めば安心した。
けれど彼らはもういない。
祖父母がいなくなってから、ハルを慰めてくれたのはいつも緑や、異形の者たちだった。
そんなハルを見て、リルヴァーナは悲しそうに顔を顰め、
また厳しい顔に戻って言った。
「駄目よ。こんなことをしていては。ハル、貴女は人間なのよ」
ハルは何のことを言われているのか解らなかった。
自分が人間だということは知っている。
「精霊たちは優しい？　彼らの傍にいたい？　でも、ハルは人間なの」
さらに、リルヴァーナは続ける。
「神にも精霊にも馴染み過ぎてはいけないわ。それは人間である貴女自身を壊してしまう。
人間に、頼ることを覚えなさい。
人間を、信じなさい。
貴女は、人間でいたいのでしょう？」
リルヴァーナの言葉はどうしてかハルの胸に刺さる。
確かに、ハルは祖父母を失ってから、緑や異形の者たちに心を寄せ

ていた。
人間を信じられなかったからなのかどうかはわからないが、それは事実。
今まで、目をそむけていたことに突然光を当てられて、混乱はするが怒りはわかない。
悪いことだなんて思ってなかった。
ましてやそれが、人間という自分自身を遠ざけているなんて。
「でも」
そうした行動で自分は、人間から逃げていたのだろうか。
思わず考えこんでしまったハルに、リルヴァーナは愛おしそうに微笑んで
ほら、と後ろを指さした。

「きっかけが、近づいているわよ。　怖がってないで、ぶつかりなさい。
・・・・・大丈夫、同じ人間だもの」
そう言うと笑んだままリルヴァーナはふっとかき消えた。

17（前書き）

皇帝視点

17

何かに、呼ばれているような気がしてジャヴは目が覚めた。
ハルだろうか。
そう考えて、自分勝手に決め付けたジャヴはハルに何かあったのかもしれないと考え
そばに置いておいた剣を持ち、隣の部屋へと向かう。
困ったことに、部屋の中に気配がない。
確認のため、一応ノックをしてからドアを開けると、やはりベットの上にハルの姿はなかった。
ベットが乱れていないことからも、自分で部屋を出て行ったのだろうと考えられる。
枕元にはハルに与えた剣がそのまま置いてあった。
ざわりと背筋を這い登った感覚に、不快感を覚えてジャヴはため息をつく。
彼女はわかっているのだろうか。この城の中は決して安全ではないことを。
この区域の人間は信用のおける人物ばかりだが
右も左もわからぬ小娘が
夜中にひとりで出歩くなんてあってはならないことだった。
しかも、ハルは武器を持っていない。
たった1週間で、
皇帝であるジャヴも驚くほどの才能を見せ、剣を使いこなせるようになってきたハルだが、
やはり、妙に危機感が薄いところがあった。
平和ボケをしているというか、警戒心は人一倍強いくせに彼女は危機感が薄い。
この国で、いや、世界において、身を守る手段を持つということはある程度の年齢になれば自覚するものだ。

帝国の中にだってほかに比べれば少ないものの犯罪は多い。
ハルの年齢である１６歳ともなれば、
危険に近づかないことや身を守る手段を持つことは当たり前のこと。
そうやって人々は生きていくのだ。
技術はあるのに、ハルにはそういった自覚が足りなかった。
そのくせ警戒心は強く、ほとんど嫌な顔を見せないところは自身の保身を考えてのことか。
無意識なのか、いきなりこれまでとは違う環境に置かれているはずなのに
無理をしていると感じさせないその姿勢は評価できる。
おかしな娘で、おかしな御子だった。

神の御子とは、神に愛でられた者をさす言葉だ。
何かに秀でていたり、神に気に入られることによって与えられる印。
印は通常、神官や魔術師などにしか見えない。
ジャヴだってよく見れば見つけられるだろう。
印には神の力が宿り、御子はそれゆえに特殊な存在であった。
神々の祝福を受けたものはそう多くはないが、各帝国に何人かは必ずいる。
筆頭が、皇帝だ。
皇帝は即位するときに必ず神の御子となる。
神に属する竜の子孫であり御子になるというはっきりとした力を持つことで、
皇帝は巨大な帝国を治め、反乱させることなく統治するという仕組みだ。
実際に皇帝の力は権力の意味でも、純粋な力という意味でも絶大である。
それゆえに、時に諸刃の剣となるものでもあった。
一人でも皇帝が、間違った考えを持てば他の帝国や国、ましては世界にまで影響を及ぼしかねない。

まあ、そんな考えを持ったと知れたところで、神々に印と皇帝の座は取り上げられるだけだったが。
御子というものは、通常は神が属する帝国内の人間を気に入ったときにするものだ。
今まで、神が遣わした御子などいなかったように思う。
珍しい、黒茶の瞳と髪を持った
１６歳というには幼すぎる外見をもつ少女。
この御子が何を意味するのかはわからないが
神が遣わした御子ということとは関係なく、ジャヴにはハルが必要だった。

この１週間というもの、ジャヴにとっては驚くことばかりだった。
触れても、抱き上げても嫌悪感はわかない。
喋っていても、剣の稽古をしていてもきちんとジャヴに追いついてくる。
気がつけば、この状況に置かれた彼女の精神状態まで心配までしている有様だ。
初めは無意識のうちに起こしている行動が脳にも追いつかなかった。
女に対してというか、これまで誰に対してもそんなことをした覚えはない。
ジャヴの皇帝という身分に対しての自制心はずっとこれまでそんなことを許さなかったのだ。
誰に対しても許すつもりもなかったものが。
それが、一人の少女に崩れかけている。
表面上は変わらずに過ごしていたが、ずっと彼は考えていた。
なんでこんなにも彼女を手元に置いておきたいのか、ということを、だ。
「やっぱり、一目惚れか」
ジャヴは呟いて、ハルの部屋を出る
ずっと考えていた答えは簡単で

2日前くらいに、これが一目惚れというものかと納得した。
女嫌いが一目惚れとは、世界も酷いものである。
ただ、ジャヴ自身は納得した時に妙にすっきりとした気分になったのだった。
そういえば、幼い頃にもこんな気持ちを感じたことがあったかもしれない。
ジャヴは、自身の長い髪をちらりとみて一人頷く。
もともと高い方ではないが自尊心が傷つくなんてこともなく、ハルへの思いを自覚した。
不思議な感覚だったが、不愉快ではなかった。
ただ、彼女を自分の物にしたいと思う。これを人は恋と呼んでいるのだろう。
初めて自覚した恋。
それだけに、ジャヴは部屋からいなくなったハルが心配だった。
この区域では襲われることはないかもしれないが、
夜中に少女の一人歩きは襲ってくれと言っているようなものだ。
舌打ちするとジャヴは歩き出した。

18

ガサリと草がかき分けられ
リルヴァーナが示した方向から、現れたのは寝ているはずのジャヴだった。

きっかけとは何だろうか
私は人を頼ってなかったんだろうか。
リルヴァーナの言葉が胸の中をぐるぐると回って落ち着かない。
何より、どうしてジャヴがここにいるのだろう。
「ジャ」

そう思ったハルが問いかけるより早く、これまでの経験からかハルの体が反応していた。
後ろに大きく飛んでそのまま距離を取る。
ザスッ
ハルがいた場所に鞘に入った剣がめり込んだ。
表情を変化させることなく、ジャヴはゆったりとした動作で剣を構えなおすと、
静かにハルに問いかけてきた。
「何で、夜中に1人でこんな所にいる」
ハルが思わず後ずさってしまうほど、わかりやすくジャヴは怒っていた。

心配して探しに来てみれば、ハルは1人で庭の中にいる。
しかも泣いていたようだった。
自身を心配させたことに対してなのか、彼女が1人で泣いていたことに対してなのか分からないが
ジャヴはハルに対して怒りを見せていた。

「こんな風に、誰かが襲ってきたかもしれない。
何度も、1人で行動するなと注意したはずだ」
言いながら間合いを詰めてハルに剣を振り下ろす。
今度の攻撃もなんとか避けたが、それを見た彼は振りおろした剣の軌道を変えてハルが避けた方向に薙ぎ払った。
ハルは予想していたのか剣の下を転がり抜けてジャヴの背後に回る。
「何するんですか！あぶな」
講義をしようとして叫んだハルの足が、言い切る前にジャヴに払われた。
体勢を崩して、ハルは地面に尻餅をついてしまう。
「くっ」
体勢を立て直そうとしたところで、ジャヴの鞘付きの剣が首にあてられていた。
「ハル、お前は今丸腰だな
そんな人間が一人で、出歩いているのは襲ってくださいと言っているようなものだ」
剣先をそれ以上動かすことなく、ジャヴは呟く。
呆然と見上げていたハルは、その眼が怒りだけではないものを含んでいるのに気がついた。
今のジャヴの言葉で、きっと彼が心配してくれていたということも理解できる。
だが、なぜジャヴがこんなことをしたのか分からなかった。
わざわざ、攻撃を仕掛けなくても口でいえば済むことではないか。
「口で言うよりも早いだろう。不逞の輩は言葉をかけたりなんかしないぞ」
ハルの疑問が顔に出ていたのか、ジャヴが剣を腰に戻しながら言った。

その言葉にハルの中の何かが切れた。
立ち上がって、彼の服を掴んで引っ張る。
「今の不逞の輩はジャヴです！なんなんですか！いきなり！！」
確かに、ハルは浅慮だったかも知れないが
鞘付きの剣とはいえ、いきなり切りかかることはないではないか。
当たっていたら、間違いなく骨が折れていそうだ。
「口で言ってください！ジャヴのバカ！！」
怒鳴りながら、ハルは服を掴んだままジャヴの胸を叩いた。
ジャヴがきたとき、ほんの少し
ちょっとだけ安心した気持ちがあったというのに。
すでに、ハルの中からその時の気持ちは吹っ飛んでいた。
ジャヴの攻撃に、行動に怒りがこみ上げてきて、そのせいか目の前が霞んでいく。
「ちょっと夜風にあたりたかっただけなのに！なんで切りかかられなくちゃならないんですか！」
敬語も少し崩れてしまった。
叫んだハルに対して、ジャヴは冷静だった。
淡々と言葉を返してくる。
「1人で泣くためにか」
「違う！」
「1人になりたかったんじゃないのか」
「1人になりたかったわけじゃない！　だって、ジャヴだって皆だって寝てたじゃないですか！
起こしたら迷惑でしょう！？」
「だから、庭に出たのか」
なんとなく彼の性質の悪い誘導に引っかかっていることは分かったのだが、
言葉は止められない。
「悪いですか！？」

「悪い。だから、泣くな」
「泣いてないです！！」
「わかったから、泣くな」
焦ったようなジャヴの言葉に、ハルはいつの間にか自身の頬に再び涙が流れていることに気がついた。

怒りで目が霞んでいたんじゃなくて
涙が流れていたのか。

ハルは掴んでいた手を離し、乱暴な仕草で涙をぬぐった。けれど、拭っても拭っても目からはどんどん涙が零れ落ちてくる。
何とか止めようと顔を拭い続けると、ジャヴの手がそっとそれを止めた。
いつものように抱き上げられるのではなくて、ぎゅっと強い力で抱きしめられる。
息苦しいのに、怒っていたはずなのに
ジャヴの体温と背中をなでる手が心地よかった。
ハルは、ジャヴにしがみついて泣いた。
怒りと悔しさ、安心した気持ちも混ざってぐちゃぐちゃだった。
この世界に来てから、混乱することや泣くことがとても多い。

特に、人の前で泣いたのは何年振りだろう。
祖父母が死んでから、なかったような気がする。

泣きながら、そんなことを考えていたら
ハルを抱きしめたまま、ジャヴが言った。
「お前が何を考えているのか知らないが、勝手にいなくなるほうが迷惑だ。
1人で泣くな。1人が嫌なら傍にいる」
言葉はすとん、とハルの中に落ちてきた。

でも、そんな言葉は信用できない。
「嘘、つき・・・」
「嘘じゃない」
「だって、おじいちゃんも・・・おばあちゃんもそう言ってたけどすぐに居なくなっちゃいました」
「そうか」
「いなくなるんなら、そんな・・・約束しないでください
だから、だって・・・・・」
「何を怖がっている」
「う・・・」
「言え」
「・・・・・げ、現実味がなさ過ぎて・・・怖いんです。
こんな、優しくしてもらって、あんなに動けて・・・」
「現実じゃないと？」
どうしてだろう、ハルを抱きしめている彼の腕の力が強くなった気がした。
「だ、だって・・・」
「お前は、ここにいるだろう」
「私は」
本当に、ここに存在しているのだろうか。
「いても、いいんですか・・・？」
「傍にいろ。　現実の区別がつかなくなったら、いつでも斬りかかってやる」
「・・・それはやめてください」
「そうか」
ハルが顔をあげてうん、と涙声で何度も呟くと、
ジャヴは安心したように微笑んだ。

19

「陛下！会議に遅れますよ！陛下！！・・・ちっ・・オイッ！ジャヴ！寝てんな！起きろ！」
騒がしい声とともにジャヴの部屋のドアが乱暴に開けられた。
寝汚い皇帝陛下は月に何回かは寝坊する。
それをおこしにきたのが、近衛騎士である自分だった。
無駄に広いベットを覗くと、声に起きたのかもぞもぞと掛布が動いている。
寝坊をした時のジャヴは、殺気を見せるまで起きないことが多いのに珍しいこともあるものだと掛布をめくった
「っ！！？」

掛布をゆっくりともどす。
いま眼に入った物は何だ。
幻覚？お化け？・・・ドッキリか？
幻覚であったなら、騎士の仕事はやめたほうがいいかもしれないなそう考えながら、目の前の掛布を見る。
モゾリ、と動いたそれから
白く細い腕が伸びた。
「むあー。よく寝たー！・・・あ、おはようございます」
腕は掛布から完全に出ると少女の姿が見えた。
少女は寝間着姿で大きく伸びをしてから、騎士に気がついたのかきちんとお辞儀をしながら朝のあいさつを述べた。
「あ・・・おはようございます・・・」
騎士は間抜けな挨拶をしながら目の前の少女を見た。
黒茶の髪と瞳の可愛らしい少女は、１２歳ぐらいであろうか
寝間着姿だったが、貴族の女がするような羞恥は一切見せずに騎士のほうを

きょとんとした瞳で見ている。
騎士にそう言う趣味はないが、その手の人間じゃなくても可愛らしいと感じてしまうような少女だった。
いや、問題はそこではない。
問題は、
少女が、ジャヴのベッドで寝ていたということだった。
女嫌いの皇帝陛下のベッドで寝ていた少女
まだ、頭は理解するのを拒否していたが、
さっき掛布をめくったとき、皇帝陛下はこの少女を抱きしめて眠っていなかっただろうか。
信じられない出来事に騎士の頭は付いていかなかった。
本来ならば、ジャヴを起こすなり
少女に名前を名乗るなり、少女の名前を聞くなり
できたはずだったが
彼の頭は、現実を拒否していた。
騎士がなんともいえない表情で立ち尽くしていると

少女が何やら掛布をはぎだした。
そこには、先ほどとあんまり変わらない姿で眠っているジャヴの姿がある。
右手だけ、ゆっくりと何かを探すようにシーツをたたいている。
少女は、それを見るとおもむろにベッドから降りた。

何をするのかと思いきや
笑顔でシーツの端を両手でつかむと、せーのっ！と、掛け声をあげてシーツを引き、ジャヴをベッドから落としたのだった。
いや、落としたというよりは飛ばしたと言ったほうがいいだろう。
少女のどこにそんな力があるのかわからないが、彼女は確かに青年一人を
シーツを使って投げ飛ばしたのであった。

ガシャーン！！と派手な音がして、サイドテーブルとともにジャヴは地面に転がった。
・・・・・。

顔から着地したように見えたのは騎士の気のせいだろうか。
「あ・・・サイドテーブルまでやっちゃいました・・・」
少女はジャヴに巻き込まれたサイドテーブルのみに気を使っていた。
ジャヴを飛ばしたほうに行って、サイドテーブルだけを直している。
と、投げ飛ばされたジャヴが起き上がった。
ゆらり、と擬音がつきそうな動きで周りを見る。
額には赤いぶつけた跡が残っていた。
「・・・・・ハル」
低い声で少女のらしい名前を呼ぶ。
やばい。
切れたか？
女嫌いのジャヴならこのまま切って捨てそうな雰囲気だった。
騎士は、少女を守るために一歩踏みだそうとした。
「おはようございます、ジャヴ。いい朝ですね！」
ハルと呼ばれた少女は、ジャヴの不機嫌さと
額が赤くなっていることに気付いていそうだったが
にっこりとジャヴに笑顔で話しかけた。
いい根性である。
こんなときでなければ拍手をしたいくらいだった。
「・・・・何をしている」
ジャヴはハルの言葉に不機嫌そうに一言言った。
騎士のほうまで言葉は聞こえなかったが、表情からジャヴの不機嫌を悟って
騎士は少女の前に、身を滑り込ませる。
「おはようございます皇帝陛下。早くしねーと、今日の会議に遅れるぜ？」

いつものように軽く言うが、皇帝陛下、ジャヴは全く聞いていなかった。
「・・・・・ハル」
騎士を無視して後ろにいるハルにいう。
言われたハルは、何を言われているかがわかったのか
ぴん、と、人差し指を立てて言った。
「ジャヴは皇帝陛下なんです。昨夜は混乱しちゃいましたが、
居候させてもらっている身で偉い人に敬語を使うのはあたりまえです。　この話し方でもだいぶ崩れているような気がしますし」
オイ、その皇帝陛下をシーツで投げ飛ばしたのは誰だ。
心の中で突っ込みながら、騎士は冷汗を垂れた。
目の前のジャヴはどんどん機嫌が悪くなっていっている。
「今さらだ。
・・・あと、これは何だ？」
そう言って額の赤い跡を指さす。
「それは昨日の仕返しです。いきなり切りかかってこられて乙女心は傷つきましたー」
不機嫌なジャヴに対して、にっこりと笑顔で言うハルは
痛かったですか？と、
ジャヴに近づいて額を確認した。
「少し驚いた」
「じゃあ、大丈夫ですね」
「お前・・・」
「怪我もしてないのに怒るなんて狭量ですよ」
「・・・・・・」
「あ、おはようございます」
じーっと見つめられて、ハルは何を思ったのか笑顔で言った。
そこじゃねーだろ、と突っ込みを入れたくなるのを我慢して、騎士は二人の行動を見守った。
「おはよう」

ジャヴはそう言うと、ハルの頭をなでて
クローゼットへと向かう。
「着替える」
そういうと、ジャヴは少女を気にせず着替え始めた。
少女はじゃあ、私も着替えてきます。と部屋を出て行く。
騎士は先ほどの状態から動けないでいた。
少女を守ろうと、剣に手を置いたままである。
あれは、なんだ。
あの、少女は何者だろう。
あれが噂の少女だろうと見当はついたが、理解はしても衝撃はなくならない。
女嫌いのジャヴのベットに一緒に寝て・・・まあ、そういうコトは何もないみたいだが。
あったらあったで問題だ。騎士には仕えている皇帝の性癖は受け止めきれないかもしれない。
投げ飛ばしたのに、何も咎めは受けない
あげくの果てに普通の会話までして、頭までなでてもらっている。
一種の奇跡だと思う。
あの、ジャヴにそんな女ができるなんていうことは。
たしかに、妙な少女だった。

可愛らしいが、それだけではない不思議な、いや、カリスマのようなものが
少女にはあった。
ジャヴとは違い、本当に女に興味のない自分が
友人であり、主人であるジャヴから守るために動いてしまうなんて
本来ならば、あってはならないことなのに。
先ほどは自然に体が動いてしまったのだ。
恋情を抱いているわけではない。断言できる。
これは、いわば主人への服従に近い感じだった。

気がつけば、手のひらにちょっと汗をかいている。
騎士を気にせずに着替えているジャヴをちらりと見て、
本当にすごい少女を手に入れたな、と思う。
勘だが、あれはある意味で恐ろしいものになるだろう。

あれでは、並の貴族の女たちは勝てないな。
口元に自然に笑みが浮かんでいた。
「お姫様に、後できちんと紹介しろよ？」
ジャヴに声をかけると、ニヤリとした笑みで返された。

20

用意してもらった朝食を、3人で囲んだ。
朝に弱いらしいジャヴはいつも、無言でもそもそと食べている。
ハルも別段それを気にすることもなく、無言で食べる。
自分で作ったものよりはるかにおいしいご飯は、いつも楽しみだった。
食べ終わったらしく、ジャヴは席を立つ。
あわてて、後を追おうとする騎士を
ジャヴは振り返ると、彼を指さしてハルに言った。
「そいつに、案内してもらえ」
「えっ！・・・いいんですか？」
ジャヴの意図を正しく読み取ったハルは
来週ぐらいに案内してもらえるはずだったのでは、と驚いた声を上げた。
その声に応えるようにジャヴはニヤリと笑う。
「昨日の、詫びということにしておこう」
そう言って赤毛の騎士を残してさっさと会議とやらに行ってしまった。

赤毛の騎士の名は、バルトグラス・ムルクと自身を紹介した。
炎のような赤い髪に、茶色の目をした大柄な騎士だ。ジャヴよりも背が高い。
精悍な顔立ちで、まさに武人というような表現がぴったりな人だった。
「ジャヴ・・・・・俺、お前の護衛なんだけど・・・・って聞いてないな。

お嬢ちゃん・・いや、ハル様。そういうことらしいから、俺と一緒に城の中まわりますか？」
あきれた表情でジャヴを見送っていたが、諦めたらしい。
ハルに向き直ると、笑顔でそう言った。
しかし、その眼にはハルの事を値踏みするような色がある。
かといって、あの最初に出会ったカイザークとかいう乱暴神官よりましだった。
彼の目に浮かんでいるのはほとんどが好奇心の様に見えたから。
ハルは、バルトグラスの様にしっかりと笑顔を顔に張り付けて礼をした。
こちらの礼など分からないので、日本式だ。
「よろしくお願いします・・・・・あと、敬語なんて使わないでください。
バルトグラスさんは私よりも年上です。
それに私は敬語を使われるような人間ではないですから、必要ありません」
笑顔のハルの口から出てきた言葉は、感情的ではなく、事実をただ述べたもの。
バルトグラスは、そんなハルの言葉と礼にちょっと驚いたように眼を見開いたが
すぐに笑顔を見せた。
「よし！御子様の命令には逆らえねぇな。
皇帝陛下のご命令もあることだし、ハル、良かったら俺と一緒に城内を見に行かねえか？」
「はい！　ぜひお願いします。
でも、午前中はグランさんに勉強を教えてもらっているのでお昼からでもいいですか？」
バルトグラスの切り替えの早さに笑いながらハルは答える。
腹の中でどう考えていようと、切り替えの早い人間は好きだ。
ジャヴが信用しているようだから、酷い人ではないと思う。

バルトグラスはハルから見て、優秀そうな騎士だった。
近衛騎士、というジャヴの身辺警護なのだから剣の腕も相当なものだろう。
時間が空いていたら、ぜひ、稽古をつけてもらいたいものである。
城の探検はとても楽しみだったが、稽古もちょっと楽しみであった。

「じゃあ、俺も一緒にいていいか？
　ジャヴは護衛のつもりで俺を置いてっただろうから、仕事はしなくちゃな」
腰の剣をたたきながらバルトグラスは言ったが
その本音は、もう少しハルを見ておきたかったからだった。
先程、ハルに感じたものの正体をつかんでおかなければ。
また、神の御子といえども皇帝に何か仇なす様なことがないか見極めておく必要があった。

「ハル様は本当に、教えがいがありますなあ。
・・・・・・おい、バルト！！お前も見習え！！そこで寝てるくらいだったら、お前のお得意な
剣の一つも振り回して腕を磨いたらどうじゃ！！」
ハルの勉強が始まって1時間後、バルトグラスは少し離れたイスに座って爆睡していた。
当初の目的なんかはもう、グランの話が始まってすぐに消し飛んだ。
ハルの勉強は、バルトグラスの苦手な分野である歴史や、しきたりが主なものだった。
実用的な学問にしか興味のなかったバルトグラスは、貴族の子息らしく学校にはいったが
歴史や礼儀作法系の授業はさぼっていた。
そのためか、すぐに眠りの世界に入ってしまったのだ。
「・・・・・悪いな、爺さん。俺は全く、その分野に耐性がないんだった。忘れてたよ」

眠い目をこすりながら言うと、グランは呆れたように言った。
「お前さんの妹のイリアリスは、わしの授業をきちんと聞いておったぞ。
　さぼっていたお前と違ってな」
グランは開いていた教科書代わりの本を閉じると、ゆっくりと立ち上がった。
「さぁて、今日はもう、お終いにしましょうかの。なぁに、いつも倍はやっとるので
そのご褒美じゃよ」
「えっ・・・・あ、ありがとうございます！」
ハルは嬉しそうに笑って、グランに礼を言った。
初めての外出が気になって、そわそわしていたのをグランにきっちり見抜かれていたようだ。
「いいんじゃ、楽しんできなさい。
・・・・おお、それとバルト、案内するのは騎士鍛錬所がわしはお勧めだと思うぞ」
ハルとグランそれぞれに告げると、グランはゆったりと部屋を出て行った。

「ハル、本当に鍛錬所でいいのか？そんな恰好までして」
バルトグラスは、困ったように頭をかきながらハルを見た。
「大丈夫です！　すごく楽しみです」
バルトグラスの心配をよそにハルは鼻歌まで歌いだしそうなくらい上機嫌だった。
ハルは今、バルトグラスと同じ騎士の服を着ていた。もちろん剣も騎士用のものを腰にさしてある。
稽古にも参加したい旨をバルトグラスへ伝えた結果、
バルトグラスの親戚の騎士見習いのお嬢さんということにして、少し参加させてもらえることになったのだ。
明らかに上等な服を着て、鍛錬所にいっても動けないし邪魔だとい

う。
しかし、騎士の服ならば、バルトグラスが傍に付いていても疑われないしハルの立場も隠せる。
ただ、バルトグラスが心配だったのはハルの稽古だった。
女性に年齢を聞くのは失礼だが、バルトグラスが思うに、
ハルはどう見ても１２歳ぐらいのか弱そうな少女である。
外見に加えて、好戦的な性格でもなさそうな少女が剣に興味を持ったのはジャヴの影響からだろうか。
どうせ、やってみたいといっても１，２回誰かに剣を打ち合わせてもらうだけで満足するだろうと
勝手に結論付けて、バルトグラスはハルと一緒に城を出た。

このときバルトグラスは、騎士用の重量のある剣を腰につけても、
全く動きに変化がないハルに気がつかなかった。
ましてや、ハルが日々皇帝と剣の稽古をしていたなんていうことも、
彼は知らなかったのだ。

21

案外簡単に、ジャヴの居住区域から出たハルとバルトグラスは、
歩いて２０分ほどで騎士の鍛錬所と思われるところに到着した。
大きいグラウンドのような土が見える広場と、体育館くらいの大きな建物、
それになぜか少し広い森が鍛錬所になっていると説明を受けた。
「森は、騎士がどんなところでも戦えるよう訓練する場所だ。
実戦で役に立たないやつは、死んじまっても文句は言えないからな」
聞けば、今の時期は帝国の城内に配属された騎士しかこの鍛錬所にはいないという。
時期が違えば新人の騎士たちが集められているため、この鍛錬所だけでは足りないくらいの人数になると
バルトグラスは笑いながら教えてくれた。彼曰く、その時期はとても汗臭くて鍛錬所には近寄りたくないくらいになるらしい。
その時期でなくて良かったと、ハルが胸を撫で下ろしていると、
グラウンドにいた何人かの騎士たちが、バルトグラスに向かって走ってきたのが見えた。
「バルトさん！！こんにちは！」
「お久しぶりです！　良ければ俺に稽古をつけてもらえませんか！？」
あっという間に、バルトグラスとハルは騎士たちに囲まれてしまった。
彼は騎士たちの中で人気者らしい。
ハルはそう判断して、さりげなく暑苦しい集団から半歩下がって様子をみていた。
暑苦しい集団は時折ハルのほうをチラチラとみているが、
教育が行き届いているのだろうか。バルトグラスの連れであるハル

に自分から声をかけたりはしなかった。
「お前ら煩いぞ！　静かに訓練もできないのか！・・・あ、バルトさん」
バルトグラスを囲んで稽古を申し込んでいた騎士たちの後ろから、騒ぎを聞いたらしい少し落ち着いた雰囲気の青年が建物の中から出てきた。
深い青の髪の色と猫を思わせるアーモンド形の琥珀の目が、バルトグラスと、ハルにそそがれる。
「バルトさん・・・犬や猫では飽き足らず、まさか人間まで拾ってきたんですか？」
額に手を当てて呆れたように青年はバルトグラスを見る。
どうやら、バルトグラスはよく動物を拾ってくるらしい。
そして、ハルはその動物扱いをされている。
なんだか失礼な話だが、初対面なのでさすがに青年へ突っ込みを入れるわけにはいかなかった。
ちらりとバルトグラスへ目を向けると、彼は青年に弱いのか苦笑いを浮かべながら
言い訳をするように片手を振った。
「いや、おれの親戚でね。騎士になりたいと奇特なことをいうものだから
　しばらく面倒を見てやろうと思ってんだ。
ハル、こいつは俺の部下のダーク。ダークこちらはハルだ」
示し合わせた通りの答えに、一瞬だが、ダークと呼ばれた少年の目に緊張が走る。
だが、すぐに彼はハルに笑顔で話しかけ、手を差し出してきた。
「本当に奇特なお嬢さんですね。騎士になりたいなんて。
まあ、そういうわけなら歓迎します。ようこそ、騎士鍛錬所へ。
私のことはダークと呼んでください」
「はい！　よろしくお願いします！」
ハルは青年の様子に違和感を覚えたものの、顔には出さずにこやか

に握手をした。
悔しいかな頭の高さから、ハルは見上げなければ青年の顔を見ることができない。
首が楽な姿勢でダークと呼ばれた青年を見れば、吸い寄せられるように彼の腰に下げられた剣が目に入った。
黒い。
真っ黒だ。
よく見れば、吸い込まれるような深い黒の鞘は少しだけ青味がかっている夜の闇の色。
ハルはダークという青年が持つ剣が気になった。
他の騎士が使っているものとはまったく違った剣だ。
他の騎士はハルと同じ、支給されたらしい剣を持っている。
大きさや形に違いはあるが、みな同じ黒っぽい赤色をした鞘の色とデザインをしているのでとてもわかりやすい。
見た目も重視されているのか、鞘や柄を飾る銀に彫り込まれた模様は優美だ。
意匠は花と蔦だろうか。
一方、ダークの剣は装飾があまりなく、柄の部分も赤い布が巻かれているだけで
他に飾りめいたものは何もないが、なぜか気になった。きっと刀身も同じ色だと思う。
剣は何かを秘めている。
これはハルの勘だったが、こういう時のハルの勘は大抵の場合外れない。
幼いころから不思議な現象には嫌というほど触れてきたのだ。
世界は違っても、今更こんなことでは驚いたりしない。
だが、自分に対する悪意はダークからも剣からも感じられなかったので
ハルは特に何も言わなかった。
大抵の場合、こういったものは無視するに限る。

下手に刺激しても、面倒だからだ。
「ちょうど良かった。ダーク。ハルに少し稽古をつけてくれないか？」
バルトグラスの言葉に、ダークは嫌そうな感じもなく頷いた。
周りの騎士からは、残念そうな声とヤジが飛んだが、バルトグラスのひと睨みで
素直にハル達に練習場所を開けてくれた。
他の騎士たちにも注目されながら、剣を交わしあえるだけのスペースを一応空けてもらう。
もちろんスペースを空けたのは怪我を防ぐため。

バルトグラスと同じく、ダークもハルを剣の素人だと思っていた。
彼の春に対する紹介に、こちらは、という言葉があったので
ハルという少女は身分を隠した高貴な人だろうと予測をつけたのだ。
貴族の娘か何かがお忍びで城をまわっているのだと考えていた。
戯れに剣を数度合わせるだけにして、怪我はさせるなということなのだろうとも。
数年間の付き合いは浅いものではない。ダークは少ない言葉からバルトグラスの考えを正しく読み取っていた。
騎士たちが明けてくれたスペースに立つと、
いかにもか弱そうだった少女が真剣にダークを見ていることに気がつく。
正確にいえば、ハルが見ているのはダークの剣だった。
その視線をたどって、少女が真剣を使うことに抵抗があるのかと思ったダークは口を開いた。
「ハルさん。剣は練習用の木刀を使いますか？」
「・・・いえ、これでいいです」
怪我をさせないようにするためと、剣を怖がっているのであれば木刀を使わせようと思ったのだが、
ハルはそれを拒んだ。

もちろん、ダークとしては二、三度剣を合わせて終わらせるつもりなので、怪我はしないだろう。
念のための確認だった。
「じゃあ、はじめましょうか」
そう言ってダークは自身の剣を抜く。ハルの予想通り刀身まで真っ黒な剣だった。
ダークが剣を抜いたことで、あたりの空気が少しだけ変化する。
それまで、ヤジを飛ばしていた騎士たちの声も小さくなった。
剣を扱ったことのある大抵の人間は、知識がなくともこの異様な雰囲気と剣を見ただけで魔剣だとわかるはずだ。
魔剣とは持ち主を選ぶもの。
魔剣を持っているということは、剣の実力を認められたということなのだから。
だが、ダークの魔剣を見たハルの反応は違っていた。

22

「やっぱり刀身も黒いんですね。その剣」
驚くでもなく、のほほんとそう言ったハルは1人で頷いた。
鞘に納まっているときにはぼんやりとしか存在が感じられなかったのだが
ダークが剣を構えたとたん、それははっきりとハルの目に映った。
深い闇の色の靄が、ダークの剣を覆うように囲んでいる。
形は定まってはいないようで、昨夜見たものたちとは違うことがわかった。
無関心を装うことが一番良い対処の仕方だとは思うのだが、如何せん好奇心の方が勝ってしまったハルは
靄をじっと観察してしまった。
靄はハルが見ていることにすぐに気が付いたようで、ゆらりと大きく揺れた。
どうやら良い感情は持たれていないらしい。睨まれているような、ぴりぴりとした視線を感じる。
睨まれることで、ハルもその黒いモノを集中して見ることになった。
靄は剣の周りに濃くなっていたが、集中して見たところ全体的に薄い靄がダークに重なっているのがわかる。
それをハルが認識した瞬間、靄が晴れるようにダークの姿が一瞬だけ、はっきりと見えた。
その一瞬で、ハルにはダークという人に感じた違和感の正体がわかってしまった。
「おんなのひと・・・・・？」
「え？」
思わず漏れた呟きは思いのほか大きかったらしい。向かい合ったダークが信じられないものを聞いたような顔をしている。
この世界はなんでもありなのか。

まさか、男性だと思っていた人が女性だなんて。誰が思うだろうか。ありえないことばかりが起きすぎて、思わす笑いが零れてしまった。少し動揺しているダークに、ハルは静かに騎士用の剣を片手で抜いた。

それだけで、見ていた騎士から驚きの声が出る。
ハルが抜いた剣は重いので、騎士でも初めのうちは鞘から抜くときに手元がぶれる。
大の男でも、素人では剣をきれいに鞘から抜くことはできないのだ。
それを12歳くらいの少女は自然にやってのけた。片手でぶれずに、きれいに剣を構えたのだった。
バルトグラスももちろん驚いていたが、ハルがいくら剣の扱いに慣れていても
ダークには勝てないと思っていた。
ダークという青年はこの騎士たちの中において、実力で上位に入るのだ。
騎士の中で実力は最強といわれる近衛騎士になる日も遠くないと噂される、
そんな青年が、あのか弱そうな少女に負けるとは思えなかった。
「始め！」
声がかかるが、二人とも動かなかった。
3メートルほどの距離をあけて向かい合った二人は、剣を動かさずに止まっている。

ダークは動けなかった。
始めという声とともに、2，3回ゆっくりと打ち込んでそのあとすぐに降参に持ち込ませるつもりであった。
ダークの考えは、先ほどの発言と目の前の状態に軽く吹き飛んでいた。
剣を抜いてからハル自身は全く動いていない。何か殺気を出してい

るわけでもない。
けれど、始まりの合図で彼女の眼が変わった。
試合が始まった直後にハルの眼は先ほどまでの、明るく、澄んだ瞳から
深く吸い込まれそうな黒茶へと変わったのだ。
気で押されたわけでもなく、眼で睨まれたわけでもない。
ただ、２つの眼がダークを動かさなかった。
完全に気圧された。
金縛りにあったかのように動かないダークの体、瞬きするほどの間に吸い込まれそうな２つの眼は動いていた。
視界から外れた瞬間に体は動いたが、間をおかずにダークの左上から剣が下される。
構えていた剣でかろうじて防ぐと、重い衝撃が伝わってきた。
少女の力とは思えないほどの。
距離にして３メートルほどを一気に詰めるなんて、素人のやることではなかった。
少女の予想外の力に、手加減がきかなくなる。
剣を弾いて思わず回し蹴りをしてしまう。体術も交えた戦いは騎士の基本だが
少女相手になんて使うつもりはなかったのに。
ハルはいきなりの蹴りに体をずらしたが完全に避けきれず、宙に飛ぶ。

23

周りの騎士たちが息をのむ中、空中で体勢を整えたハルはそのままくるりときれいに回って着地した。

「うー。ちょっと痛いです・・・。でも、ジャヴの蹴りに比べたらっ！！」

ういって、再びダークに間合いを詰める。
今度は空中からではなく、地に足をつけてダークに切りかかる。
弾かれることなく剣は打ちあわされ、さらに言うならば、ダークよりハルの力のほうが強かった。
ハルの攻撃を受けてダークは少しずつ後退する。信じられないが、素早さと、剣の重さが半端ではないのだ。
こんな少女にやられていることも信じられないダークに、剣の打ち合いの間にハルの声がかかる。
「ダークさん、何も言う気はありませんから！　安心してくださいっ」
動いているからか、声が途切れがちであったけれど
ハルの言葉にダークはぞっとした。
彼の秘密にこの少女が、気がついている事実と、
これだけの剣撃を繰り出しながら、喋りかける余裕のある彼女の実力に、だ。
冷静になれない。
「・・・・何・・・・・を・・・」
自分でもなんと言おうとしたのかわからないが、とにかく剣を振るった。
魔剣は、持ち主を選ぶ。
ダークの魔剣は特殊なタイプのものだった。

通常の魔剣というものは何かの呪いがかかっていたりする。
呪いの代わりに、持ち主に力を与えるのだ。
時には魔剣に体を乗っ取られることもあるという。
けれどダークの魔剣は少し違う。
呪いという形で、ダークを守っているのだ。
この世に魔剣は作られてからずっと共にいた主人の、ダークのことを気に入っていた。
だから、主人であるダークをここまで動揺させるハルが気に食わなかった。
そしてハルの一言と、実力に動揺したダークは魔剣に付け入るすきを与えてしまった。
ふわり、と剣からさらに黒い靄の様な空気が流れだす。
その靄はダークの手に絡みついていき
からみつかれた手は、ダークの意思とは関係なしにハルへと攻撃を仕掛けていった。
いつものダークよりも非情で、攻撃的な剣を繰り出す。
その靄を見て、ハルは初めて、不機嫌そうな様子を見せた。
「やっかいですね・・・」
剣撃の間に喋るのは変わらなかったが、あの眼はますます深みを増していった。
ダークの腕は自由がきかなかったが、彼女から思考は、眼は離せなくなっていった。

キィン

ひときわ大きく、打ち合った剣の音の音が響く。
その瞬間にダークのこめかみに鋭い衝撃が走った。
ハルの足蹴りが、こめかみにあたったのだと認識したが
衝撃に耐えきれず、ダークの体は2メートルほどふっとぶ。
ずしゃ、という土に触れた衝撃がダークを襲った。

その手から、魔剣が離れる。
からんと傷一つなく転がった魔剣からはまだ、黒い靄が漂っている。
ダークを吹っ飛ばしたハルは、迷いなくその魔剣へと近寄って拾い上げた。
深い眼で魔剣を見つめ、おもむろに地面に突き立てる。
そのまま剣を構えて言った。
「人に害を加えるなら、壊しますよ」
ハルの淡々とした声と、構えには先ほどまではなかった怒気が籠もっていた。
その空気が重たくなるような声に、魔剣は軽く震えると
靄を消して地面に転がった。
魔剣が自身の敗北を認めたのだった。
黒い剣が今度はあまり音を立てずに地面に転がったのを見届けてから
ハルは倒れているダークに駆け寄った。

24

試合開始直後、バルトグラスは信じられないものを見てしまった。
ハルが静かにダークを眼で抑え込んでいた。気迫でもなく、殺気なんてものも感じられないのに
眼は静かにダークの動きを止めている。
まるで邪眼だ。
伝説の邪眼は眼を見つめるだけで相手を意のままに操れたというがハルがやっているのはそれに近いものがあった。
異質だ。
ダークの動かない様子に、周りの騎士たちの間にも妙な緊張感が生まれている。
あれだけ騒いでいたのに、今は周りの声が全くしない。
ダークは速攻の、すばやさを武器にした騎士だ。
この見つめあっている時間があれば、大抵はもう、相手の騎士の喉元に剣を突き付けているはずだった。
バルトグラスは攻撃を仕掛けたハルを見て、頭を殴られたような衝撃を受ける。
素早さで言うなら、普通の騎士の中でトップを争うほどの動きだった。
3メートルの距離を2歩程度で飛ぶように詰め、そのまま飛びあがって
ダークに剣を振り下ろす。
力のない少女のため、落下の加速で剣を重くしたのだと思うが、ダークに止められて弾かれた。
ダークもよほど焦っていたのだろう。はじいた少女の腹にいつもの稽古のような蹴りを繰り出す。
ハルは避けきれなかったのか、攻撃を受けて空中に飛んだ。
騎士たちが、うわ、と口々にいうが、空中で体制を整えたハルが

地面にきれいに着地するのを見て、別の声も上がった。
なんだ、アレは。
バルトグラスの眼に、信じられないものが映る。
ハルに剣撃で軽く押されているダーク。ダークの顔が焦っていくのに対して
ハルは最初の時から変わらない。だが、繰り出される剣は速さを増し、正確にダークを追い詰めている。
不意に、ダークの焦りからか剣筋が変わった。
攻撃的な、いつもからは考えられないような剣を繰り出している。

様子がおかしいと、バルトが試合を止めようとしたところで
ハルがダークに強烈な上段蹴りを放った。
ハルの身長よりも高い位置のダークのこめかみにきれいに決まる。
ずしゃ、と音を立ててダークは地面に転がった。
ハルはなぜか倒れたダークの剣を取ると地面に突き刺し剣を構えた。
殺気のようなものが一瞬肌をなでる。
バルトも知っている魔剣は、ハルの一瞬だけ見せた気に、地面に転がった。
バルトも他の騎士たちも
あまりの衝撃に誰一人としてその場を動くことができなかった。

「ダークさん。　大丈夫ですか？」
心配そうな声に、ゆっくりと上体を起こしたダークは、瞬きを何度か繰り返した後
ハルを見て、頷いた。
「・・・・・・すみません」
混乱して、自分を見失って魔剣に操られた。
騎士として、剣士として情けない限りであった。しかも、少女に助

けられるなんて。
「いえ、いいんです。そんなにダークさんが混乱することを言ってしまったのは
私なんですから、本当にすみません」
そう言って、ハルは深々と頭を下げた。
それを見て、焦ったのはダークである。
剣などお遊び程度しか持ったことがないお嬢さんだと油断していたのはダークだ。
それに、魔剣と共に掛けられた呪いは強いものだけれど、見破れる人間がいないわけではないということを忘れていた。完全に、自分自身の失態だった。
慌てて何か言おう口を開いたダークのこめかみに、ハルの手が伸ばされる。
小さな手が遠慮がちにこめかみに触れると、その傍をぬるりとした感触が流れているのがわかった。
きっと血が流れているのだろう。さっきの少女の蹴りは半端ないものだったなと、
ダークの顔に思わず笑みがこぼれる。
「・・・・いや、ハルさん。貴女のせいじゃありません」
少女の規格外の強さに、笑いがこみあげてくるが、
いきなり笑い出したダークに、ますます心配になったらしい少女はこめかみの傷を騎士服の袖で抑えながら、自身が泣きそうな声で呟いた。
「そんなことはないです・・・・・女の子の顔に傷をつけてしまいました・・・・
ごめんなさい」
小声で言われた言葉に、ダークは思わず顔を引いてしまった。
「・・・・やっぱり、わかってしまったんですね」
今のダークは完全に男性体だ。
わかるわけがないと思い込んでいた。実際この国の神官達でさえダ

ークの体のことには気がつかなかったのだ。
最高の技術で魔剣を媒介してかけられたこの呪いが
このような少女に見破られてしまった。
決定的になった事実に混乱するダークの頭に
共鳴するかのように、転がっていたダークの剣が震え始めた。

冷静な声が、ダークを現実に引き戻した。
「落ち着いてください。ダークさん。
偶然わかってしまっただけですし、誰にも言うつもりはありません」
深い色の瞳がダークに映る。
少女の眼は少女らしくない深さをたたえていた。
その中に、言うつもりは本当にないのだと信じられる静かな光があった。
深い瞳は、静かだ。
少女という年齢に似つかわしくないほど。
これほどの瞳をするものを、ダークは知っている。
誰にも立ち入らせず、入ることのできない瞳は人外のものと一緒だ。
どうしたことだろう。彼女は人であるはずなのに。
その瞳は幼いダークに、魔剣を与えてくれた神と呼ばれる存在の瞳にそっくりだった。
すべて眼に入れたものは静かに受け入れ、飲み込んでしまう。
静かに瞬きが繰り返される眼に
神の側の眼に
それを認識した瞬間ダークは、囚われたと感じた。
彼女だ、と思ったのだ。

ダークの様子が落ち着いてきたと思っていたら
突然、ハルの手を掴んだダークは立ち上がり、驚いているハルを気

にも留めずに膝を折り騎士の正式な礼を取って高らかに宣言した。
「帝国騎士、近衛騎士団ダーク・ホーブは
貴女に、永遠の忠誠と信頼を誓います！」

「えぇっ！？」

「ハル様！今日から、この拙い身ですが
私の命が続く限り、私はあなたに永遠の忠誠を誓います」
もう一度、簡単に宣言される。
2度言われなくても、ハルには何となくダークの言いたいことがわかったが
それを簡単に受け入れてしまえるほど
高貴な身分でも、ましてや考え方だってない。
「いやいやいやいや、何考えてるんですか？！　無理です！すみませんが、他をあたってください！」
混乱しながら、はっきりきっぱり断りの言葉を告げた。つもりだった。
「いえ！諦めません。・・・・・・もし、あなたに仕えることをお許しいただけないのならば、
　私は今ここで、散る覚悟です」
「散るって・・・散らないで下さい！！　何なんですか！？」
「貴女の騎士になりたいのです。　どうか、許していただけませんか」
ダークの態度は、これ以上ないくらい真剣だった。
正直、冗談だと流してしまいたかったのだが。
彼女の態度と言葉が、ハルにそれを許してくれない。
握られている手から、微かに震えが伝わってくる。
この世界は、一体どうなっているのだろうか。
仕えることを許さなければ死ぬだなんて、簡単に言っていいことではないと思う。

そんなので死ぬなんて馬鹿みたいだと思うけれど、ここではそれは“馬鹿なこと”ではないのだ。
それは、彼女のことを見ればわかる。
だからといって、ハル自身がすぐにその考えに順応できるかといったら答えは否だ。
でも。
困り切ったハルは、こちらを真っ直ぐに見ているダークと目を合わせる。
琥珀の真剣な瞳。そして気迫がハルに伝わってきて。
迷っていた答えが、決まる。
一気に頭の中が冷えて、一つの結論を出すしかないとはじき出した。

25

「・・・・・・・・・わか」

「潔く散れ」
突然の、言葉とともにダークに剣が振り下ろされた。
段違いのスピードにハルも一瞬剣を取るのが遅れる。
間に合わない。

キィン！！

ダークの目の前で、バルトグラスの剣が振り下ろされた剣を受け止めていた。
剣を振り下ろしていたのは、ジャヴだった。
「おまえっは！！　俺の部下を殺す気か！！
　いや、本気で殺る気だっただろう！！！　馬鹿かっ！！」
怒声とともにジャヴの剣をはじいた。
剣を弾かれたジャヴは、表情はいつもとほとんど変わらないが
眼が据わっている。
皇帝に、馬鹿と連呼したバルトグラスを咎めることもなく、
ジャヴは至極当然のことのように頷いて剣を構えなおした。
「散りたいといっていたと思うが。ちがうのか？」
そういって剣先をダークに向ける。
そう、ジャヴからすればダークを斬るのは当たり前のことだ。
ジャヴが部下から執務室に、ハルが鍛錬所に来たと連絡を受けてきてみれば、

ハルが大声で誓いを立てられているところだった。
ハルに忠誠を誓うということは、ハルの騎士になるということ。
ジャヴにとってのバルトグラスのように、近衛としてそばにいるということ。
はっきりいって、許せなかった。
ハルの傍にいていいのは自分だけだ。守るのも、自分だ。
だから、迷いなく剣を振り下ろしたのに、バルトグラスに止められてしまった。
今度は確実に息の根を止めようと、剣を持つ手に力を入れたところで、
突然、少し高めのハルの声がジャヴを怒鳴りつけた。

「ジャヴ！！何を危ないことをしてるんですか！！」
そう言って、ハルもダークを庇うようにバルトの隣に並ぶ。
少女は明らかに怒っていることがわかる顔で、ジャヴを見つめてくる。
ジャヴはハルのダークを庇うような体制が気に食わなかったが、答えた。
「だから、散りたいといっていなかったか？」
すでに、ジャヴの中にはハルが忠誠を受け入れるという選択肢はなかった。
だから、散りたいといっていた通りにしてやろうとしたのだ。
なんで、ハルは怒っているのだろうか。

ジャヴの据わっていた眼が、解りづらかったがきょとんとした。
彼は、本気でダークを切るつもりだったのだろう。
散りたいというダークの言葉通りにしようとしただけ、とでも言いたげだ。
ハルは思わず頭を抱えたくなった。
この世界の人間は、こういったことをばっさりやってしまえる人た

ちなのだろうか。
だが、バルトグラスはジャヴを怒鳴りつけていた。
周りの雰囲気も、緊迫したものになっていることから
ジャヴが、特殊なのだろう。
皇帝という身分からか、ハルの常識からは考えられない思考回路に
正直。怖いなと、思う。
人を簡単に物の様に殺してしまう人たちは案外たくさんいる。
そう言ったことに巻き込まれやすかったことで、何度もそういう人
たちは見てきた。
しかし、そういう人たちと違って、ハルは彼を嫌えない。
なぜか、怖いとは思っても
ジャヴには嫌悪や、気持ち悪いというのは感じないのだ。
でも、ダークを殺されるのは嫌だった。
「駄目。違います。・・・ダークさんは死にたいなんて思っていま
せん」
そういうと、ジャヴはいぶかしげな顔になった。
「なぜだ？さっきは散りたいといっていた」
本気でそう思っているのかわからないが、
敏く、女性が嫌いと言っていたジャヴだ。
もしかしたらダークの隠されている女性的な部分を感じ取って
ここまで、排除しようとしているのかもしれなかった。
引くつもりがなさそうなジャヴに、効果的な一言を探す。
選び取った言葉で間違いがないかは分らなかったが、
迷って、ハルは、先ほど言おうとしていた言葉を言った。
「・・・・・ダークさんは私の騎士になりました。　だから、駄目
です。　やめてください。
ジャヴ、私は年の近い友人が欲しかったところなんですよ」
ホラ、とハルは後ろで固まっていたダークの手を取ってジャヴの前
に出す。
万が一、ダークが斬られそうになっても飛び出せる位置にしておく

ことは忘れない。
少しだけ、ハルのことを見つめてからジャヴは無言でダークへ視線を移した。
彼なら、きっと気が付いてくれる。
そんな確信がハルの中にはあった。

なぜかは判らないし、直感としか言いようがなかったのだが
ハルは敏くて、女性嫌いなジャヴならば
ダークの違和感に気がついてくれると思ったのだ。
ジャヴはしばらく無言でダークをじっと見つめていたが、ふいに何かに気がついたように眉間に皺を寄せた。
また、視線をハルに移して、口を開く。
「・・・・・・なんで、おん」
「ストップ！ジャヴ、解りましたよね？と、いうわけでダークさんは私の友人です。
　だから、私の許可なく斬らないでください」
ジャヴの言葉を遮って、ハルは大きな声で言った。
どうやら、ハルのもくろみ通りジャヴも気がついてくれたらしい。
ダークは女性ということを隠して生きているようだし、ばらすのは気が引ける。
あわてて、彼の声を遮った。
「・・・・・・・・・・・・許可があっても、普通は駄目だろうが・・・・・」
隣で、バルトグラスが呆れたようにつぶやいたが
ハルは構っていられなかった。
理解不能なジャヴの思考回路には、こちらも強気で無茶苦茶な発言をするのが
結構効果的だと思う。
幸いにして、女性という性別を持っているがハルはジャヴにそれほど嫌悪されているわけではないようだし、

話は聞いてくれるだろうと踏まえた上での発言だ。
ジャヴは、考え込むような仕草で剣を下に降ろした。
「ハル。それを友人にして害はないんだな？」
「はい。害なんてありません。あったら私が斬ります」
確かめるように尋ねたジャヴにハルはニッコリと笑う。
少しでも知りあってしまった今、ダークを斬るなんて行為はハルには到底できそうにもないのだが
ここは、突き通すしか術はない。
隣のバルトグラスからはまた、呆れた様な視線を感じたが
無視しておく。
ジャヴはハルの笑顔を見て、ため息をついた。
「・・・・・・ダークと言ったか。　しっかり守れ」
そう言って剣を納めたジャヴに
ハルは、思わず溜めていた息を吐く。
だが、ちょっと引っかかった。
今のジャヴの行動に。
「ジャヴ、もしかして今までもこんな風に
　何もしてない人に切りつけたりしてませんでしたか？」
ハルは自身の疑問を、ジャヴに向かってはっきりと口にした。
ダークは、皇帝に楯突くような真似は一切していない。
ただ、ハルの騎士になりたいと言っただけだ。

26

ハルの鋭い言葉に、ジャヴは目をそらしたまま、黙り込んだ。
ついでにバルトグラスも、何か覚えがあるのかハルから目を逸らしている。
「なんで、バルトグラスさんも眼をそらすんですか？
・・・・・・・・・・・・まさか、
バルトグラスさんもジャヴを止めなかったとかはないですよね？
女性に暴力なんて、男の風上にも置けないんですよ？・・・二人とも」
ハルは笑顔だ。
この上なく凶悪な笑顔を浮かべていた。
目が笑っていない。
さらにはハルのほうから何か冷たい空気まで流れてきたような気さえしていた。
ハルとしては
ジャヴの女性嫌いが、そんなに酷いものだったのには驚いたが
女性を傷つける言い訳になるはずもない。
ましてや、二人は男なのだ。女性よりも力もある。
そんな人たちが女性に暴力をふるうのは正当防衛以外許されないことだ。
ハルの怒りに、気圧されたのか周りで見守っていた騎士たちがちょっと後ずさった。
殺気とかではないのに、妙な圧力があるハルの笑顔に
ジャヴも、バルトグラスも顔をそむけたまま、冷汗を垂らす。
「・・・・・・二人とも。　傷つけた方たちには謝りましたか？」
謝るわけはない。
ジャヴはそう言いたかったが、言ってしまったら最後

何かもっと嫌な状況になりそうで言えなかった。
バルトグラスも眼を泳がせている。
ジャヴと同じ気持ちなのだろう。

「あ・や・ま・り・ま・し・た・か？」

少女の笑顔はどんどん凄味を増している。
「・・・・・・・ハル」
ジャヴが宥めるように少女の名前を呼ぶが、ハルは全く表情を変えずに二人を見つめた。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・謝罪シマス」
「・・・・・・・・・・・・・・善処しよう」
無言と笑顔の圧力に勝てなかった。
バルトグラスとジャヴが諦めたように言うと、ハルはため息をつきながら言った。
「女嫌いでも、別の対処の仕方はありますよね。もう、女性に不当な暴力は絶対に止めてください。特にジャヴ」
「・・・・・・努力する」
嫌そうにジャヴは言ったが、案外律儀なジャヴのことだ。暴力を振るわないようにするだろう。
そう考えて、ハルは怒りと話を打ち切った。

「ところで、ジャヴ。お仕事はいいんですか？」
怒りで忘れていたが、今はまだお昼前である。
いつものジャヴは執務室というところで仕事中のはずだった。
「抜けてきた。まさかこんなことになっているとは思わなかったが」

そういって、ちらりとダークを見る。
斬られかけたことが怖かったのか、ダークは慌てて眼を逸らすと礼をとった。
「ジャヴ」
「見ただけだ。・・・・・・ところで、ハル。お前は何でそんな恰好をしている？」
ハルの今の恰好は、騎士の服だ。
何か可笑しいところがあっただろうかと、ハルは自分の格好を見直した。
「・・・・・・・？　変ですか？　余っているのを借りたんですけど」
軽くて丈夫そうな素材とベルばらのような衣装がちょっと気に入っていたりする。
似合うかどうかは、ちょっと考えたくはないが。
ハルがそう告げると、なぜかジャヴは少し不機嫌になった。
「・・・・・用意したものの方が、軽くて丈夫だろう」
「うっ、確かにあの服は丈夫ですけど・・・・」
ジャヴの用意してくれた服は確かに丈夫だし、動きやすいものだ。
そして何より可愛い。
ただ、
ただ、素人目のハルから見て物凄く高そうなのである。
お世話になるにあたって、最初は服を作ってもらうのも断ったのだ。
どうやって作られているのかもわからないから、値段も分らない。
メイドであるディアさん達の着ている服とかの予備を借りれたらと思っていた。
しかし、それを告げたハルに、ジャヴはバッサリとハルに合うサイズがないと言い切り
メイドさん達もジャヴの言葉に頷いた。　そうして、知らない人達がやってきたかと思うと、何を言う隙もなく体のあちこちを採寸されきちんとした服ができるまで使ってくださいと下着や服を置いてい

った。
置いていった服だって可愛くて、サイズも合っていたからこれで十分だと言ったのだが、一切聞き入れてもらえず。
すぐに届けられた服は更に凄かった。
明らかに手の込んだ模様や刺繍が入っていたり、
きれいな邪魔にならない飾りがついていたりするのだが、
ハルはそんな服達をしばらく着ていて思ったのだ。
綺麗な飾りはすべて本物の宝石じゃないか、と。
ジャヴとの稽古でよく転んだり、滑ったりしているのに、飾りには全く傷が付いていなかった。
さらに言えば、服にも傷はつかなかった。ただ、汚れただけで。
こんな奇想天外な服があっていいのかと思ったりもしたが
奇想天外なだけに、値段が想像できなかった。
貨幣の価値はまだ、教えてもらっていないが
自分の着たものは自分で洗おうとマリーさんの所に行ったとき
聞いてみたのだ。この服っていくらぐらいするんですか？と
マリーさんはにやりと笑ってこう言っただけだった。
「ハル様。　女は男に貢がせてこそ、輝けるものですのよ。　ホホホ」
そういって、
マリーさんは高笑いをしながら、
ハルが洗おうと思っていた服全部をかっさらってすごい勢いで洗濯してしまった。
手洗いであんな速い洗濯は見たことがなかった。今でも、信じられないくらいだ。魔術というものだろうか。
今度、是非とも教えを請いたい。
遠い眼をして回想にふけっていたハルにジャヴは不満そうに言う。
「あっちの方が似合うだろう。その騎士の服は可愛らしくない」
ぐはっっ
ジャヴが言った瞬間に、バルトグラスが咳き込んだ。気管に唾液で

も入ったらしい。
げほ、ごほ、と苦しそうな咳を繰り返し、
やっとおさまったと思ったら、ジャヴをまるで化け物でも見るような眼で見つめた。
「・・・ジャヴ、・・もしかして、この間急に城に仕立て屋を呼んだのは・・・・
ハルに、着る物を用意するためか・・・・？」
バルトグラスはおかしいと思ったのだ。先日いきなりジャヴ個人御用達の仕立て屋を城に呼んだことが。
しばらく新しい衣装が必要な式典なんかはなかったと思っていたのに、急に呼び寄せていた。
3日ぐらいで衣装ができたと連絡を受けたとき、
執務室から出ようとしたジャヴに代わってバルトグラスが受け取りに行ったのだが、大量にあった箱の中身は見なかった。
ただ、仕立て屋たちが恐ろしいほどに目の下にクマを作っていたのを見ただけだった。
型紙や何やらを仕立て、服を完成させるのは3日では絶対に終わらないだろう。
バルトも不思議に思っていたのだ。
それがまさか、ハルに服を作らせるためだったとは。
ジャヴはどんなことを言って、仕立て屋を動かしたのだろうか。
「ああ。3日で作らないと、店を壊しに行くといっておいた。
そうしたら、本当に3日で終わらせたらしい。仕事が早いのはいいことだな」
普段は無表情のくせにこんなときだけ、爽やかな笑顔を浮かべてジャヴは言い放った。
ジャヴとしては冗談半分だったのに、仕立て屋たちは無表情なジャヴの顔を見て
本気にとったのだろう。これで、あのかわいそうな仕立て屋たちの目の下のクマの理由がわかった。

「・・・・・・そ、そうか」
それしか、バルトはジャヴにいうことができなかった。
この、マイペースというか天上天下唯我独尊を地でいく男にあまりつっこみたくない。
つっこんだ方がややこしいことになりそうだからだ。
かわいそうな仕立て屋たちには今度、何か詫びを入れようと、バルトはひそかに誓う。
貴族の女たちにはかけらも同情心がわかないが、仕事をしているやつらは別だった。
「ハルに似合っていたから、今度またあの店に作ってもらおうと思っている。
ハル、何かほかに入用のものはないか？」
よほど、似合っていたのだろうか。笑顔のままで、
さっきまでとは変わって機嫌良くハルに欲しいものを聞いたりしている。
この様子だと、ジャヴはハルの欲しいもののためなら何でもしそうだ。
傾国の美女ならぬ傾国の少女・・・・・・笑えない。
ジャヴが馬鹿なことをしないように、目を光らせておく必要がありそうだった。
ハルが常識人なのがせめてもの救いだろうか。
しばらく悩んでいたハルは、いきなり思いついたように顔をあげていった。
「あの、じゃあ・・・申し訳ないですが今日もジャヴの部屋で寝てもいいですか？」
ごふっっ
常識人だと思っていたハルの言葉に、バルトは再びむせた。
今度は、ハルの言葉が聞こえていたダークまでもが目を見開いている。
「いけませんそんなはしたないこと！！！！」

ダークが叫んだ。ハルに近寄って肩を揺さぶる。
「ハル様！！　あなたはまだ、結婚前で！　しかも、まだ、子供なんですよ！！
やっていいことと、悪いことがあります！」
根が真面目なダークなので、よほどショックだったらしい。
バルトは何もなかったことを知っているが、今のハルの言葉は
誰がどう聞いても、大人な夜のお誘いだった。
涙目になりながら、叫んでいるダークに
ハルはきょとんとした顔で言った。
「え？　添い寝してもらうのは駄目なんですか？」
ハルとしては、ジャヴが男の人が好きな人だと知っている。
ロリコンでも、女が好きでもないのだから間違いが起きるはずもない。
悪夢を見たとき、傍に誰かにいて欲しかったのだ。
昨夜ジャヴは、そんなハルに傍にいろと言ってくれたからこそのお願いだった。
「駄目です！！　添い寝なら、いくらでも私がしますから！！」
ダークは気が動転していたのだろう
ダークとしては自分の本来の性別を考えていったのだが。
ハルとジャヴ以外には、確実に自分と寝てくれという意味になっていることに気がつかなかった。
「おい！　ダーク！！　お前もわけのわからないこと言ってんじゃねえ！！
お前だって男だろ！！！　ハルと寝ていいわけないだろうが！！」
バルトがダークをハルから引き剥がす。
バルトとしては、こんなことを言ったダークが今度こそジャヴに斬られないかと心配だったのだが、
ジャヴは、別に怒った様子もなく考えているようだった。
「・・・・・・うーん。ダークさんは駄目です」
「・・・そうだな。お前には向かない」

ハルとジャヴがそれぞれ否定の言葉を放つ。
「なんでですか！」
ダークの言葉に、ハルは顔を赤らめ、ジャヴは若干ひきつっていった。
「これは、寝ぼけた時が一番危険だ。
起きている時に敵わない相手だったら確実に、重傷か死だ」
「・・・・・・えへへ、声だけとか1人で起きるのはいいんですけど、ゆり起こされるとつい」
もとの世界でも常に危険が傍にあったせいか、
無理やり起こされると、つい手が出てしまう。
ハルは寝起きが悪かった。
授業中などに居眠りしてしまってもそれを起こす生徒も、先生でさえもいない。
理由は簡単。怪我をしたくないからだった。
無理に起こすときは半径5メートル以上離れて大声で呼びかける。
その時周りに人がいてはいけないのだ。
寝惚けたハルにぼこぼこにされるから。
いつの間にか、寝たハルは起こすなという暗黙の了解が出来上がっていた。
この世界に来てから、ジャヴやメイドのおばさまたちに起こされたことがあったのだが
寝ぼけて切りかかったり蹴りかかったりしたらしい。
ジャヴや、区域の使用人たちは皆強さが半端ではないので
誰が起こしに来ても結構大丈夫なのだが
寝ぼけてディアさんの腕を折る直前で目が覚めたときは、ディアさんにものすごい勢いで怒られた。
土下座する勢いで必死に謝って何とか許してもらったもののの
そんな事件もあって、ハルを起こしに来るのはジャヴがほとんどだった。
ダークと一緒に寝ていて、寝ぼけたら

確実にダークは軽い怪我では済まないだろう。
ジャヴとハルの言葉に感じるものがあったのか
バルトとダークはお互いに顔を見合せてから
『わかった。やめよう』
と全く同じことを言った。
バルトがハルとジャヴに何もないことを説明しても
それでも、ダークはまだ納得いかないようだったが
ハルが、嫌な夢を見るので、と悲しそうに言うと
しぶしぶ、了承した。
「ハル様。そういうことは、大人になったら駄目ですよ」
ダークがそういうと、ジャヴも、ハルも変な顔をした。
「ダークさん。この国では、１６歳は成人じゃないんですか？」
ハルが、確かめるように言う。
「もちろん。　１６歳から成人ですよ！　ハル様も
そのような御歳になる前には怖い夢も克服出来る様頑張りましょうね」
ダークが笑顔で言うと、ハルは目に見えて暗くなった。
「いえっ、怖い夢は私も幼い時は見ましたし、今でも時々飛び起きます！
悩まれているのはハル様だけではないんですよ！　元気を出してください！！」
ダークは一生懸命励ますが、その励ましが逆にハルには痛かった。
完全に少女扱いされている。
ここまで来るとちょっと、怒るより悲しさが襲ってくる。
「ハルは１６歳だ。ここと全く同じ暦で」
ジャヴが、落ち込んだハルに代わって言った。
「・・え？」
「・・・・・・・・・嘘だろ？」
ダークとバルトの呟きが、軽くハルの胸を抉っていった。

26（後書き）

これで、序章は終了です。
４日にまた序章の文章改訂と区切り直しします！リハビリかねてぶちぶち改訂していったので文章がおかしなことになっていますね・・・
読みにくい話なのに、読んで下さっている方に感謝です！本当にありがとうございます＞（｜　｜）＜
次の章も４日から頑張ります。

1

「キール・・・あなたが私の希望。光。

・・・・・・・・・・ねえ、あんな女の産んだ子供なんて

あなたには敵わないのよ・・・・・・」

女が1人、豪奢な部屋でつぶやいた。

部屋には、うっすらとほこりが積もっていたが

女はそんなことは構わずに

楽しそうに呟いている。

部屋には女のほかに誰もいない。

いや、

部屋には誰もいないと言った方が正しいだろうか。

「かわいい、かわいい

わたくしの、キール。

あの女はね、死んだくせに

まだ、陛下を放さないの・・・・

・・・・でも、ほら

あなたがいるわ。継ぎの皇帝であるキール・・・・」

ふいに

女の、首がごろりと落ちた。

首は転がって、カーテンの隙間から照らす月の光にさらされた。

首は楽しそうに呟くのをやめない。

何年も使われていないその部屋からは

夜中じゅうずっと、女の声が聞こえていた。

2

苦しい。

夜中に、唐突に眼が覚めた。

苦しくて目が覚めたのは初めてだった。
頭が一気に覚醒して、自分の状況を判断する。
暗い、まだ夜中だと思われる室内に、いつもの布団、変わりはない
抱きしめられた腕が苦しいことを除けば。
案の定というべきか、苦しさの正体はジャヴの腕だった。
いつもは苦しくない程度の力なのに、今日は違った。
ぎゅうぎゅうと、まるで締め付けるように抱きしめられている。

「ジャヴ？」

抵抗しながら名前を呼んでみるが、反応はない
眠っているようだった。
何か悪い夢を見ているのだろうか、彼の顔がひどく険しいものになっている。
そんな顔をしていなければ、ハルは苦しさから
ジャヴのみぞおちか頭に一発殴ろうと思っていたのだが。
少し考えて
よいしょ、とハルはジャヴの拘束から腕だけを引き抜く
そのまま、小さな子供にするように頭を撫でてやる。
しばらく続けていると苦しそうなジャヴの表情が、ほんの少しだけ楽になった気がした。
腕の力はちょっと強くなったような気がするが
ハルがそのまま優しくなで続けていると

ジャヴはだんだん覚醒してきたようだった。

「・・・・キール・・・」

呟きを漏らして、目を完全に開く。

なぜ、目覚めた後の方が腕の力が強くなるのだろうか。
眼が覚めたジャヴはさっきよりも強い力で、ハルを抱きしめていた。
苦しくて、息がとまりそうだ。

「ジャヴ・・・・・・痛いです・・・」

何とか声を絞り出すと、気が付いてくれたのか
ジャヴの腕の力が弱まった。
「・・・・・悪い。・・・・・ハル、大丈夫か？」
ハルの苦しそうな様子に、彼はゆっくりと締め付けていた腕を外し
てその背を確かめるように撫でる。
やった本人に背中をさすられるというのも変な話だが、
ジャヴに悪気はなかったことが感じられたので、ハルは許す言葉の
代わりに少しだけ笑った。
悪気があったら、今頃戦闘態勢になっているだろう。
しばらくするとハルの呼吸も落ち着き、
二人の間に妙な沈黙が流れる。
ハルはジャヴの行動の理由を聞きたかったが、
苦しそうだったし、起きた時呼んだ名前も気になるしで
どこから手をつけようか、と悩んでもいた。

ジャヴは、自分の見ていた夢を説明するべきか
それとも、誤魔化してしまおうか
悩んでいた。

3

同じベットで寝るようになって約2週間がたつが、
ハルが悪夢を見て飛び起きる以外
なんら変わったことはなかった。
もちろん、同じベットで寝るだけで、やましいことなど一つもない。
ハルは、ジャヴを同性愛者だと思っているし
ジャヴは、ハルをまだ子供だと認識している。
どちらも聞いたら怒りそうな理由であったが、幸いにして
この理由を知る城の人間はまだ、誰も
両者にそのことを洩らしてはいなかった。
このジャヴの居住区域の人間は、ハルを皇妃にと推している。
本人の意思は尊重されるどころか聞かれてもいなかったが
同じベットに寝ているだけで、万歳と叫びだしそうなのに
わざわざ、ハルの誤解を解いて別々に寝るようなことになったら
とんでもない！と
ジャヴの同性愛者だという誤解を解かないでいるし
グランやバルトグラスも面白いという理由から沈黙を守っていた。

ハルが悪夢に起きた時は、ジャヴは何も聞かずに
ただ、黙って頭をなでてくれていた。
それを思い出したハルは、ジャヴにしてもらったように
ジャヴの頭をなでてやる。
サラサラの銀色の髪が指を通る感触は気持ちよく
最初は驚いたらしいジャヴも、嫌ではなかったのか大人しく撫でら
れるままになっていた。

しばらくして、ジャヴの目にゆっくりと睡魔が訪れたのを確認して
から

ハルも、目を閉じる。

翌日、ハルが目を覚ますとジャヴはもういなかった。
眼をこすりながら、部屋に置いてある時計を見るとまだ、７時頃だった。
こちらの世界の時計も、暦も元の世界ととてもよく似通っていた。
違うのは記してある文字と、暦は４つに分けられるということだった。大体９１日くらいで１季だ。
７日単位なのは向こうと変わらずで、休みもある。
大体、春夏秋冬でわけられているらしいが、世界共通なので
このサングルドでは、暖かい季節が多く冬に似た寒い季節は暦よりも大分短いということだった。
今は春に近い季節で、緑がわさわさと伸びてきている。
立ち上がって窓の傍に行くと
外が今日も晴れていることにうれしくなった。
窓をあけると、ちょうどジャヴがすでに着替えて
バルトグラスと執務室のある塔の方へと向かっていくところだった。
それを見てハルは、ジャヴが昨日朝早くに会議があるから先に起きるといわれていたのを思い出した。
「ジャヴ！バルトさん！いってらっしゃい！！」

大声で声をかけると、二人とも窓から顔を出すハルに気が付いてくれた。
「いってくる」
「おう！！・・ハル！！落ちるなよ！！」
「落ちても大丈夫だろうが、気をつけろ」
ジャヴとバルトが軽く手を挙げながら応えてくれる。意外と心配性なところがあるバルトグラスは窓から身を乗り出していることに注意を促して、別の塔の方へ歩いて行った。
窓から離れ、自分の部屋に戻ったハルは、着替え終わると
ドアの外にいる気配に話しかけた。

「ダークさん。別に中にいても構わないですよ？女の子同士ですし」

女の子のところをわざと大きな声で言ってやると、がたがたっと騒がしくドアが開けられた。

「ハル様！！どこで誰が聞いてるかもわからないのに！！！
やめてください！！」

顔を真っ赤にした青年、もとい魔剣に力を借りて青年に変わっている彼女は
ハルの言葉に焦って扉を開けた。
彼女はとても、素直だった。
バルトグラスがこの騎士を気に入っているといっていたのもわかる。
気を許した人間には、いちいち行動が素直なのだ。嘘がつけないともいう。
ハルの言葉にすぐに反応を示し、彼女は何より真面目だった。
「えへへ、ごめんなさい。ダークさんが可愛いからつい・・・」
ハルが素直に謝ると、それ以上何も言えなくなったのか、ダークはため息をついた。

「ハル様。ハル様と陛下以外には私は男だと認識されております
その私が、ハル様の部屋に、それも着替えの最中になんて入れるはずないでしょう？」
確かに、ダークは外見上というか体の構造も今は男だ。
ジャヴはダークが女だと知っているから別に何も言わないだろうが
確かにバルトを始めとした周りの人たちはうるさそうだった。
ダークがこうやって、ハルの傍につくようになってから１０日ほどたっただろうか
ジャヴの城の人たちも今では慣れて、ダークを受け入れているが
バルトだけがなぜかずっと渋っている。
ダークもまだ騎士としての仕事や訓練が必要だといって
ハルが勉強している時間帯は鍛錬所に連れ戻してしまうのだ。
こちらの世界に来てから初めての同年代の女性の友人ができそうなので
なるべく傍にいたかったのだが、バルトは譲らなかった。
でも、本来真面目なダークは、嘘をついているのが苦しいらしく
ハルの傍はとても楽だと、照れながら話してくれた。
それに彼女は今、皇帝陛下も認めたハルの騎士だ。
そのため、ダークはハルと朝食や昼食をとりにこの区域まで来てくれている。
ほとんど、バルトとジャヴと一緒だったが。

「それに、さんづけはいりませんと何度申し上げたらよろしいのでしょうか？
　私はあなたの騎士なんですから、さんはおやめください」
「いやです。ダークさんは年上で、私にとってはさんをつけるに値する方なんですから
それに私は忠誠を誓われるほど、偉い人じゃありません」
何度目かわからないやり取りだったが二人とも譲らなかった。

ダークはハルの腕と人柄に傾倒しているからこそ
ハルは自分が一般人だと思っているからこそのやり取りだったが。
「ハル様、私は貴女の騎士なのです・・・」
床に跪いて、騎士の礼を取りながらダークは譲らない目をしてハルを見上げた。
真面目なダークのことだ、悩んだのだろう。
何度も、悲しそうな困った顔で言われては、ハルも折れるしかなかった。
外見は猫のようなのに、行動はどこまでも忠犬のよう。

「・・・わかりました。　これからはダーク、と呼ばせてもらいます・・・」
「ありがとうございます！ハル様っ！」
かなり戸惑ったが、嬉しそうな笑顔で言ったダークに
ハルも笑った。
ちぎれんばかりに振られている尻尾が見えたのは幻覚だろうか。

昼までの勉強が終わって、ダーク共に昼食を取った後
ダークは、また呼び出されたといって鍛錬所の方へ戻っていった。
ハルはまたこれから勉強である。

4

この環境に慣れてきたからだろうか、ハルの勉強時間は増やされていた。
朝の9時ごろから昼の12時ぐらいまでだった勉強の時間が
教師も増えて3人になり、昼の3時くらいまで続けられるようになってきたのだった。
それ以降は自由時間で、ダークと城の探検に行ったり
早く仕事が終わったジャヴと稽古をしたり出来るのだが、
3人に増えた教師たちはそれぞれ厳しかった。
1人は今までと同じように歴史と政治についての勉強を教えてくれるグラン
もう1人は礼儀作法とかを教えてくれるここのメイドさんのディア
そして、ハルの世界ではまったく縁のなかった魔術とやらの原理をカイザークが教えてくれていた。
先の2人はいいのだ
厳しいが、面白いし優しい。

だが、カイザークだけは違った。
「あら、小娘。まだ、ジャヴに愛想をつかれてないの？」
来た。
ハルが振り向くと、そこには案の定嫌みたっぷりな笑顔を浮かべた外見だけなら王子様そのもののオカマ野郎がいた。
ハルは、このオカマにだけは素直に勉強を教えてもらうことができない。
と、いうかあっちがハルを嫌っているのだ。

「なんですか、カイザーク。私小娘って呼ばれる年じゃないんですけど」
「十分小娘よ！胸はないし、ちっちゃいし、コレで１６歳だなんて、どういう栄養取ってきたのかしら」
否定もすぐに切り返される。
栄養という点では、きちんととってきたとは胸を張って言えないのでハルは言葉に詰まった。
ほとんどすべてのことにおいて、人並み以上のことができると自負しているハルは
料理が苦手だった。
味音痴ではない。おいしいものは好きだし、食べたいとも思う
だが、才能としか言えないような代物が出来上がるのだ。
材料は書いてあったもの以外入れていないのにもかかわらず
まずいものができる。
食べられないほどではないが、食べたくもない料理ができるので
元の世界では、もっぱら近所の人たちのおすそ分けに頼っていた。
限界はあるので、自分でも作って食べてはいたが
もしかしたら、成長が遅いのもあの料理に原因の一端があると考えられるかもしれないと
深刻な顔で悩み始めたハルに、カイザークの後ろから優しい声がかけられた。
「ハルさん。気にしないでくださいね、この人気に入った人にはいつもこんな調子ですから」
赤毛の美人が苦笑しながらハルに告げる。
彼女はイリアリスという。この迷惑なカイザークの部下だ。しかも、カイザークとは違い、とても性格が良い。
肩口でそろえられた髪の毛がよく似合う、涼しい目元が印象的な美人さんだった。
「こんにちは、そうなんですか？　イリさん」
イリの方には愛想よく笑顔でハルは話しかける。

イリは綺麗だし、とても優しい。性格が捩り上がっていそうなオカマの下にいるなんてどんなにできた人なんだろうかと思う。
「小娘！！　なんでイリにはさんづけで私には敬称も何もないのかしら？　一応、あんたの先生をやってあげてる私に対して失礼じゃない？」
カイザークが怒ったように言うが、ハルとイリは顔を見合せて
『しょうがないですよね』
とそろって言った。
「だって、そこのオカマは尊敬に値しないですもん。　間違ったこととして謝ってくれないですし」
「勘違いで人に剣を向けておいて、謝罪の一言もないなんてとんでもないです。
カイ様が、悪いと思います」
そう、まだ
ハルは最初の日のことを謝ってもらっていなかった。ハルも自業自得の部分はあるとはいえ、彼に向けられた剣で首に傷を負ったのだ。仕方なかったことは分かっているが、一言も謝罪がない上にこのような態度では
彼の事を尊敬する気にはなれなかった。
ハルの気持ちも分るのだろう。意外と、身分や自尊心に拘る人ではないのか、彼はちょっと迷った後肩をすくめて見せた。
「そうね、そこは私が悪かったわ。　猿みたいなのとはいえ、女の子の体に傷をつけてしまったものね」
素直に謝った、カイザークに数秒固まったハルとイリは不審げな目を向けた。
そらされることのない二人の視線にカイザークはちょっと口元を引き攣らせる。
「・・・・・私だって悪かったと思ってることには謝るわよ。
・・・・・ほら、小娘始めるわよ」
フンと鼻を鳴らして、カイザークはイスに座った。

イリとハルも隣に座る。
ここでハルは不思議なことに気がついた。
「そういえば、イリさんは何でいつも一緒に来てくれるんですか？」
「邪魔ですか？」
困ったように首をかしげるイリにハルは勢いよく首を横に振った。
「いえ！　そこのオカマと違ってすっごく嬉しいです！！」
「一言多すぎんのよそこの小娘！！　ワザとでしょう」
キーキーと喚くオカマを無視して、ハルは何故だろう、と首を捻った。
カイザークが一人で来たのは1回目だけ。
1回目の授業は険悪な雰囲気になりながらも、カイザークの教え方が上手かったため
ハルはなんとか勉強のほうに集中できた。こんな、軽口を叩きあう雰囲気ではなかったのだ。
2回目からは、なぜかカイザークはイリを連れてきて、一緒に授業を行った。
イリのおかげで険悪な雰囲気にはならずに二人とも勉強に専念できたのだ。
むしろイリがいてくれないとハルは困る。
「ふふ、カイ様が。2人きりだと怖がらせてしまうかもしれないと私を連れてきたんですよ」
「イリ！それは言うなといっただろ・・・・・」
イリの言葉に、カイザークが声を荒げた。動揺したのか男言葉に戻っている。
ハルはちょっと意外だった言葉に驚いたが、思わず笑ってしまった。
カイザークには嫌われているとばかり思っていたが、どうやら、そんなこともないようだ。

「ありがとうございます、カイザークさん」
初めてさんづけで呼んでやると、カイザークは嬉しそうな顔をするどころか奇妙な顔になった。
眉をひそめて、顔をそらされる。
「なんだか、気持ち悪いわ。呼び捨てでいいわよ！小娘」
気持ち悪いとの言われように、ハルが言い返そうとすると隣の席のイリに耳打ちをされた。
「照れてるんですよ。許してあげてくださいね」
イリが目を向けたほうを見るとカイザークの耳が少し赤くなっていた。
「照れると耳が赤くなるんです。昔から」
「余計なことを言わないの！イリ！」
図星をさされて悔しいのかカイザークは、イリに向かって怒ったような声を出すが
イリは華麗にスルーして、教本となる本を広げた。
ハルは、今度こそ大きく笑った。

5

ハルは、飲み込みの良い方だと思うが別に勉強が得意なわけではない。
勉強よりははるかに、体を動かす事の方が好きだし、そちらの方がよほど得意だ。
運動神経と、勘は天性のものだと思うが、こちらの世界に来てからは妙に体が軽かった。
異世界だからか、それともリルヴァーナが何かしてくれたのか。
確かめる術はないが、ハルにとって悪いことではないのは確かだ。

カイザークから魔術の初歩的な原理を聞きながら
ハルは軽く現実逃避していた。
「小娘・・・・・あんた全く理解してないでしょ」
別の事を考えていたのが顔に出ていたのか、カイザークはハルに向かって呆れたように言った。
「どういう育ち方したら、あんたみたいな魔術についてすっぱり抜け落ちた様な考え方になるのかしら？」
不思議そうに言われたが、ハルのいた地球では、魔術なんてものは夢物語や怪しい宗教の象徴だったのだからしょうがないではないか。
いくら、不思議な出来事に慣れているとはいっても、人が何もないところから炎を出したりするなんて、マジックとしか考えられないのだ。
しかし、この世界フォールでは魔術は本当に一般的なもので、適性がなく使えない人も多くいるとはいえ、学校みたいなところで原理は叩き込まれるらしい。
カイザークやイリ、そしてグランなどは魔術と神に関した神殿庁の偉い人なので
魔術に関しての専門家だが、こちとら一般の女子高生である。

歴史とかならともかく、全く知らない世界の理論をいきなり言われても、
天才ではないのだから理解なんて、とてもじゃないができそうにない。

「・・・そういえば、ハルさんはどこのご出身ですか？
眼と髪の色からしても、ここの出身ではないですよね。ムルグあたりですか？」

イリが、不思議そうに聞いてくる。ムルグとはキリエという土神が治める帝国だっただろうか。
グランが黒い髪と浅黒い肌が多い土地柄だといっていた。

イリの質問にハルはどう答えたものか迷う。
正直に言ってしまってもいいのだが、頭がおかしい人だと思われるのがオチではないだろうか。
そう考えて、全くその話題に触れてこないジャヴやグランにも、話すのをためらっていたのである。
そもそも、その話題は何故かスルーされているような気がしてならない。
知識や、いつも話している内容からして確実にジャヴはハルがこの世界の人間でないことなど分かっていると思う。
だが、彼はハルにそのあたりのことなど一切聞いてこないのだ。
あの、思い出すにはちょっと恥ずかしい夜のやり取りで唯一聞かれたのは家族構成だろうか。
「ハルさん？」
「う、はいっ！」
少し顔が赤くなっているのを感じながら、ハルは自分を落ち着けるために深呼吸をした。
異世界から来ました。

軽くそんなことを言って、頭のおかしい人間だと思われるのは嫌だった。
しかし、その認識はここ数日のカイザークとイリとの授業でだんだん崩れてきている。
魔術や竜とかが出てくる世界だから、もしかしたら異世界から来たといってもそんなに驚かれないかもしれないと考えていたのだ。

「正直に言います。　実は、私この世界の出身じゃないんです。
信じられないかもしれませんが、地球という別の世界からリルヴァーナに連れてきてもらったんです」

意を決して言ってしまったが、二人はどう思うだろうか。
ハルは恐る恐るカイザークとイリの顔を見る。
二人は、ハルが恐れたような呆れた顔なんかはしていなかった。
「本当か？！」
「別の世界からですか？！！」
二人ともいきなり身を乗り出して聞いてくる。やっぱり言わない方が良かっただろうか。
そう、ハルが思ったぐらい二人とも必死な顔をしていた。
呆れたとか、頭がおかしい人を見る目ではなかったものの、その必死さはちょっと怖かった。
「お前！それ、ジャヴには言ったのか？」
ジャヴは絶対解っているだろうが、ハルからきちんと告げたことはない。
カイザークの言葉にハルが首を振ると、イリがそれはいけません！と叫んだ。
「早く、陛下にお伝えしてあげてください！」
「執務室の場所は覚えているんだろう？私たちはやることがあるから、今日の勉強はお終いだ。
お前は早くジャヴのところに行ってそのことを伝えてやれ」

そう言いながらカイザークは机の上の教本を乱暴にまとめると、立ち上がった。
「・・・・・・悪いことなんですか？」
あまりの慌てぶりに、ハルが聞くとイリとカイザークは顔を見合わせた。
「いや、異世界からというのは珍しいが無かったことじゃない」
「私たちがあわてているのは、陛下に関する預言のことなんです。けっして、ハルさんが邪魔に思ったとかはないですから、そんな顔しないでください」
酷い顔を見せてしまっていたのか、カイザークとイリは慌てたように、ハルに告げる。
よっぽど焦ったのだろう、わたわたと二人とも手を振って同じ動作をしていた。
安心して微かに笑ったハルを見て、カイザークとイリはほっとしたように手を下した。

二人ともハルが泣きそうな顔をみて、まるで子供を泣かせたような気分になったのだ。
１６歳だとわかってはいても、ハルの外見はこの世界では幼い。
子供の涙に弱いのは世界共通のようだった。
そんなことを二人が思っていることも知らず、ハルは嫌われたのではなかったことにホッとしていた。
「じゃあ、ハルさんお願いしますね」
「頼んだわよ」

そういって、足早にカイザークとイリは神殿庁へと戻っていった。
ハルは、ジャヴに伝えるために執務室がある塔へと向かっている最中だ。カイザークとイリはああいってくれていたが、あの慌てようからいってただ事ではないのは間違いではないだろう。
ここに来てから毎日が、まるで元いた世界で事件に巻き込まれてい

るような時と同じくらい大変だった。
でも、ここではハルの常識が通用しないから大変なのであって別に不幸な目に逢っているわけではない・・・・と思いたい。

「うーん、ジャヴに言いづらいなあ・・・・」

あの二人のような驚きの目で見られたらちょっと嫌だなと思う。
ハルがこっちの世界にきて一番良かったと思えるのがジャヴの存在だ。祖母や祖父のようでいて、違う安心感がジャヴの傍にはあるのだ。たとえて言うならば、兄が出来たようなものだろうか。
と、ハルは独特の思考回路で考えていた。

6

さくさくと、道に敷かれた白い小石を踏みながら歩いていると、ジャヴのいる執務室がある塔が目に入った。
「あー・・・・やっぱりおっきいなー」
何度見ても圧倒される大きさの塔にハルは立ち止って上から下まで眺めてみた。
ジャヴの居住区域も豪華できれいだが城というより館に近いので、この塔とは少し違っている。
この塔は近くで見るとまるで、某ネズミランドのお城のようだ。中学校の修学旅行の行先だったのに、ハルは集合時間に間に合わなかったのでおいて行かれたのだ。早朝散歩中に陣痛が始まったという妊婦さんが、タクシーに乗ってもハルの服を離さなかったせいで行けなかった。必死な顔でしがみ付かれてはもうどうしようもなかったのだ。分娩室でのお医者さんの「初産でも意外と早かったね」という言葉とともに6時間後にハルは解放され、病院の公衆電話から教師に電話をかけるしかなかった。教師はいつものような事件に巻き込まれたのではないことには喜んでくれたが、これから修学旅行に参加するかという問いには、否としか返せなかった。
こうして、某ネズミランドには行けなかったハルであったが、まさか本当に城として機能しているお城に住む羽目になるとは、あの時は欠片にも思わなかった。
綺麗なお城は、周りにも似たようなお城みたいな塔がたくさんあってすべてが通路でつながれているので
ちょっと外見は違うが、とても壮観だ。ハルは暫く見とれていたが、何か声が聞こえたような気がして、周りを見まわした。
人はハル以外にはいない。騎士も今は巡回中のようで塔の入口に一人立っているだけだった。

耳を澄ますと、声はところどころにある庭園のほうから聞こえてきているようだった。
好奇心から、ハルはできるだけ息を殺して近づく

「・・・・・・・・お・・・・・・・よ」
「・・・・・・・・でも、・・・・・・・・・・・・・・・す」

5，6人はいるだろうか、1人だけ女の人の声がするがあとは全員男の声だ。
女の人の口調と声の小ささから何か男女の痴情の縺れかと下世話な想像をしてしまったが
相手が5，6人じゃちょっと多すぎるだろう。
ハルは気がつかれないようにゆっくりと草の陰に身を潜めた。ジャヴのところに行くのを少しでも遅らせたかったのもあるが、万が一女性が危険な目に逢っていたらいけないと思ったのだ。
幸い、ハルには誰も気がつかなかったようだった。
「あなたたちは、裏から入るのよ。わたくしの息がかかった者がすんなりと気絶したふりで通してくださるわ」
「塔の見取り図は？」
「ここにあるわ。すぐに向かって欲しいのは執務室よ。ここにあの男がいるわ」
「本当に、殺しても構わないんだな？皇帝陛下を」
「約束の残りの報酬はここによろしく」

ここまで聞いて、気が付かないほどハルは馬鹿ではない。
ここで話されている内容は、あろうことか皇帝陛下つまりジャヴの暗殺計画だ。
だが、彼の暗殺計画を知ったとしてもハルの中では怖さよりも呆れの気持ちの方が大きかった。こんな大人数で、ターゲットの塔の近くで話し合いをする暗殺者なんて、間抜け以外の何物でもない。大

人数はただでさえ目立つのに、こんなところでこんな物騒な内容を喋っていたら、捕まえてくださいと言っているようなものである。
現に、ハルはここでその話を聞いてしまった。
ジャヴに危害を加えるなんて放っておけない。
とりあえず、塔の入口にいた騎士に伝えてこようと思い立ってゆっくりと立ち上がりかけたハルは
瞬間的に大きく響いた声に、動きを止めた。
「ええ、もちろん。　絶対にあの、極悪非道な皇帝をぶっ殺してくださいな！！・・・」
いやに気合の入った女の人の声が更に大きくなりそうだったのだが。
あわてて他の男が止めたようだ。
「声が大きいですよ、お嬢様。・・・・それよりなんで、そんなに皇帝陛下を殺したいんで？」
野太い声の男が不思議そうに聞いた。
確かに、女の人が嫌いだといっていたジャヴなら玩ばれたとかはないだろう。
ハルもそれは気になった。
女の人は先程より声を抑えて、だが、悔しそうに呟いた。
「あの男、私をこけにしただけじゃなく、手を羽ペンで抉ったのよ！！」
「抉った？！　それはひどい！・・・・・・・・・・・・あ」

ハルは思わず叫んでしまってから、口を覆ったが
もう遅かった。
がさり、と影になっていた葉っぱを動かされたかと思うと手を掴まれて、引っ張られる。
女の人の手だったので、ハルはその手につられるまま隠れていた茂みから顔を出した。
「あなた、どなた？見ない顔ですわね」
無言で引っ張られた先には美少女が立っていた。

茶色の髪を緩くアップにした大人っぽい髪形に対称的な幼さの残る顔立ちが、妖しい魅力を出している。
少しきつそうな深緑の眼が、今ははっきりと敵意を浮かべていた。
ハルは美少女に睨まれ、どう答えたらいいか分からなかったが、とりあえず正直に名前を名乗った。
「ハル・ミカミといいます」
少女に腕はつかまれたままだったが、ハルを少女と思っているのか力はそんなに強くなかった。
これなら逃げられるな、と考えて正直に名乗ったのだったが
少女の瞳がどんどん吊り上っていくのを見て、ハルは名乗ったのが失敗だったと悟った。

「ハル・・・・・ですって？・・・・・あの、女神の御子のハルという方かしら？」

恨まれることなんて、この世界に来てからしたことがないと思っていたのは、ハルだけだったのだろうか。
この上ない怒りに彩られた少女の顔にも見覚えはないはず。
「・・・・・私、何かしましたっけ？」
自分でも間抜けだと思える声が、無言の男たちと少女の間を抜けて行った。

「貴女が、陛下の小さな恋人だなどと噂になっているハルだったなんて、ね。
嬉しい。　わたくし、リルヴァーナに感謝するわ！」
凶悪な顔のまま少女はふふふと、妖しい笑いを浮かべている。
「いや、恋人じゃないんですが・・・」
ハルの言葉も耳には入っていないようだ。うっとりと腕を掴んでいないほうの手でハルの頬を撫ぜる。

「・・・・・あなたのおかげで、陛下が幼女趣味だとい　うわさが流れたのよ。
せっかくわたくしがこの自慢の体と顔を使って陛下を落すチャンスだったと思ったのに！！
あの、男！　わたくしを一切無視したあげく、こんな傷まで作ってくれたのよ！！」
「・・・・・・・・・・・ほとんど自業自得じゃあ・・・・・」
そばにいた髭面の男がぼそりと呟く。
ハルも正直そう思った。ジャヴの女嫌いは相当なものだと周りの人たちは言っていた。
あれだけ言われていたら、近づく女もいないだろう。自殺行為だ。
ハルにいわせればそんなジャヴに近づくのは自分から、熊に食べられに行くようなものである。
もしくは、自殺志願者か。
だが、ひげ面の男の言葉を少女は完全に無視した。
「・・・ほら、この傷。治してもらっても傷跡が残ったのよ！！」
そういってハルの目の前に手の甲が見せられた。美少女の甲には火傷のようなひきつった跡が、醜く残っている。
確かにこれは酷い。
やっぱり彼は女性に酷い事をしていたのか、とハルは内心ため息をつく。
この間交わした約束を守ってくれるよう、もう一度念を押しておかなければ。
難しい顔をしたハルの顔を見ていた少女は、突然いいことを思いついたように笑顔になった。
「・・・・・・ねえ、あなたがいなくなったら、あの男も少しは苦しむのではないかしら？」
言葉の内容はハルには肯けないものだったが。
「・・・・・・しないと思いますけど、恋人じゃないですし！」
もう一度はっきりと大きな声で言っても、少女は笑顔のまま楽しそ

うに言った。
まさか、殺されるとかだろうか。そうなったら全力で抵抗するしかない。
そう思ったハルはつかまれた腕を外すために力を入れようと、しただが、少女のほうが早かった。
掴んでいたハルの腕を上にあげてキラキラとした眼で言う。
「わたくしも女の子を傷つけたりするのは趣味じゃありませんの。
ですから、ハル。あなたわたくしに誘拐されてみません？　あなたが、誘拐されてくださるのなら皇帝陛下の暗殺なんてやめますわ！わたくしあの男の死に顔よりも、苦しさや悲しみに歪む顔が見たいだけですの！！
ね？　誘拐ですけど、丁重に友人としておもてなしいたしますから！」
「え？・・・・・・・・はい？・・・・・」
やっぱりハルの話は聞いていないようだった。いろいろとぶっ飛んだ少女である。
少女はハルの返事も聞かずに、強引にハルの手を取って歩き出す。
少女の手の柔らかさと細さに、力を入れたら壊してしまいそうで、ハルは無理に手を振りほどくことができずに引きずられていった。
他の男たちも無言で少女たちの後ろに続く。
最後まで動かなかった髭面の男だけが、塔の上に見えるように軽く礼をしてからその場を立ち去った。

6（後書き）

感想をいただいて、テンションが上がりました！
ありがとうございます！！

7

「あれ、どーするよ」
執務室の窓から見える光景にバルトグラスは呑気に呟いた。
ハルが、貴族の少女に引きずられている。
ハルの思っていた通り、ジャヴとバルトは窓の外の様子にとっくに気が付いていた。
それこそハルが来る前から、仕事の手を止めて観察していたくらいだ。
彼女の行動は3日前にある騎士から報告された。少女が買収したという騎士だ。
この帝国における騎士団のプライドは妙に高い。
ほとんどの騎士が皇帝に対する忠誠と騎士道精神を貫いている。
そんな彼らが裏切ることはめったにない。城の中での怪しい者の動きなどは騎士たちが率先してジャヴやバルトや団長に報告している。
隣で見ていたジャヴは、溜息をつきながら机に戻った。
「放っておけ。あれの父親から、連絡が入っている」
「げ、あの男からか？」
「ああ、2日前に“娘がまた、君のこと狙ってるよー。ごめんねー”といってきた」
「大概、ふざけた父娘だな」
少女ヴィオラ・ビーデルの父親は政庁の庁官長の一人だ。ふざけた口調と行動が多い男だが頭の切れる男だった。
あの男がいなければ政庁はうまく回らなくなるだろう。娘を処罰するのは簡単だが、あの男まで消してしまうのはまずい。能無しの他の庁官長に力を与えてしまうことになるからだ。
あの男は、ジャヴが娘の手に怪我を負わせた時も
“あー、娘もこれでちょっとは懲りるんじゃないかな”と、笑っていたし、

別に怒ってはいないといっていたが。次の日、ジャヴのところに男から回ってきた仕事はしっかり増えていた。
彼曰く、娘を傷ものにしたささやかな嫌がらせだそうだ。あの男の性格も頭が痛いが、娘の方もひどかった。
まさか、暗殺までいきなり考えが飛ぶとは思わなかった。貴族のバカ女の報復方法は、大抵が噂を流すことと、本人を社会的に追い詰めることぐらいだが、あの少女はいきなり暗殺に走ったのだ。
行動力は認めるが、まるっきりバカとしか言いようがない。
皇帝暗殺は本人も殺され、家も取りつぶしとなるくらいの重罪なのにだ。
父親が先に手をまわしてこなければ未遂とはいえ本人は確実に死刑になっていただろう。
先ほどハル相手に叫んでいたところを見ると、ハルには危害を加える気はないようだし
本当にジャヴの苦しむ顔が見たいだけの犯行だったようだ。
ハルから女性に暴力や酷いことをするなと約束させられたので、ジャヴも今回は少女を傷つけるつもりはなかったが。
「仕方ないだろう、ヴィオラ・ビーデルはまだ１１歳だ。育て方を間違えたな」
「はあ？あの体で？１１歳？」
バルトが驚くのも無理はない。ハルと同じくらいか、それよりも高い身長に
顔が多少幼くてもあの、体だ。
ジャヴだって最初はハルぐらいかと思っていた。
それが、父親から聞いた話によると１１歳らしいのだ。さすがに１１歳にあんなことをしたことは、ジャヴの良心が痛む。それに免じて、今回の未遂事件はさっさとつぶして隠してしまおうと思っていたのだが
あの少女は、ハルを連れていってジャヴにダメージを与えようとしているらしい。

「・・・・・ずいぶんと行動力のある11歳で・・・・」
バルトが手を額にあてて呟く。言動から幼い感じはしていたがまさか11歳だとは。
バカ女かと思っていたが馬鹿な子供だったようだ。
「母親の実家が商家らしくてな。今、母親が国を出ているらしい。それについていけなくて少しグレているんだそうだ」
「ぐれてるって・・・・、まあ、ハルに危険はなさそうなのか？」
「ないだろう。あの男がすぐに気がつくだろうからな。まあ、友人待遇らしいからちょうどいいんじゃないのか？」
ジャヴが書類に目を通しながら、真剣な顔をしているバルトに言った。
「なにがだ？」
不思議そうな顔をしたバルトにジャヴは書類から目を上げて答えた。
「女の友人が欲しいといっていただろう。　この間。　まあ、あれは少し幼いか」
バルトは少し考えて、しばらく前のダークの事件を思い出した。
確かにハルはそう言っていたかもしれない、
だが、普段あまり人に関心を寄せないジャヴが覚えていたとは。
「・・・・・おまえ、ハルのことに関しては、細かいよな」
盛大に本人の前でため息をつきながらバルトも部屋の隅の立ち位置に戻った。
「そうだな」
すんなり肯定したジャヴに、バルトは肩をすくめた。
「じゃあ、しばらくハルは迎えにいかないのか？」
「・・・・・・・・いや、仕事が終わったら行く。一人で出歩いたことを叱らなければな」
ずいぶんと早いお迎えだな、とバルトは呆れた視線をジャヴに向けたが、ジャヴは涼しい顔をしている。
「・・・・・もしかしたら、勝手に帰ってくるかもしれないが」
ふと、手を止めたジャヴは思いついたように言った。確かに、ハル

ならば自力で帰ってくるかもしれない
だが、
「そっちの方が厄介じゃないのか・・・」
ハルはまだ、城の中しか知らない。少女の屋敷があるのは城の外。
ハルがもし少女の屋敷から自力で脱出したとしても、物を知らない世間知らずなハルのことだ。
迷ってしまう方が早いだろう。
「・・・・・・本当に、どこから来たんだろうな。　あのお嬢ちゃんは」

まるで人のいない山奥で育ったといわれてもしょうがないくらいの世間知らずだが
ハルは人と接することに慣れている。
ジャヴは読み終わった書類に署名をしようと羽ペンをとりながらなんでもない事のように言った。
「推測だが、あれは異世界から来たんだろう。　この世界で共通である文字を知らなかったことや、他の言動と、勉強の結果を見ていればわかることだ」
ハルの着ていた見たことがない着物も、歴史などはすぐに吸収できるのに魔術のことは全く分からないことも、危機感が足りないことも。ハルの言葉などを一つ一つ繋ぎ合わせればわかることだ。
「は？・・・・・まあ、確かに。
でも、なんでハルははっきりそう言わねえんだ？」
異世界から来た者は、多くはないがいないわけでもない。言われてみれば、容姿から剣の実力まで彼女はバルトグラスが知る常識とは少し異なっている。ただし、帝国の中枢ともなればそんな規格外は多くいるのだ。
だから、言われてみなければ異世界人だなんて気が付かない。
「・・・・・怖いんだろう。
それに、言わない方が都合がいい」

ハルは、本能的にここの人間に嫌われることを恐れている。1人で知らない世界に来たのだから当たり前だと思うが。異質だと、異分子だと排除されるのを怖がっているのだろう。
ジャヴは署名を終えて、次の書類を取る。
今度はジャヴの言葉にバルトが首を捻っているのを見て、一言言ってやる。
「・・・・・・例の預言だ」
ハルが来る2年前にされた預言。神殿庁の者がしたある事に関わる預言。
思い出したのか、バルトが苦い顔をした。
「あれ、か。・・・・ジャヴ、お前は」
「アレにハルを近づかせる気はない。アレは、帝国の問題だ」
バルトが言いかけた言葉をジャヴは少し強い口調で遮る。
ジャヴの手元の書類がぐしゃりと歪んだ。
「・・・・・・わかった」
バルトはそういうと、執務室のドアのほうに向かった。
「ちょっと行ってくるわ」
「どこへ？」
何事もなかったかのように書類を見ているジャヴに、バルトはにやりと笑った。
「ダークを、先にお姫様のところに送っておくのさ。
迷子になったら大変だからな」
「・・・・・・・・・・お前も、ハルには甘いな」
ため息をついたジャヴに、バルトは馬鹿にしたような視線を送る。
「知らなかったのか？俺は男と子供には優しいんだよ」
そう言って、バルトは部屋を出て行った。

8

ハルは困っていた。とても困っていた。
先ほど少女に引きずられながら、ハルは城の門があるであろう方向に向かっていたと思っていたのだが
どうやら間違いだったらしい。何故か沢山ある塔の一つに連れてこられていた。

「えーっと・・・・・ここどこですか？」
塔の目の前で固まってしまったハルに少女は楽しそうに言った。
「あら、ハルお姉さま知らないんですの？
転移塔ですわ。わたくしたち貴族のお城や屋敷とつながっている陣がありますのよ」
ハルはいつの間にかお姉さまなどと呼ばれてしまっている。
少女に尋ねられて１６歳だと年を言ったら、あら、じゃあ、お姉さまですわね！と
嬉しそうに言われてしまった。そんな少女の顔は幼いが、体は羨ましいくらいだ。ハルは同い年くらいかなと思っていた。
その少女が年下だとわかってしまった今、改めて少女の年齢を確かめる勇気はハルにはない。
少女の名前はヴィオラ・ビーデルというらしい。
話してみてわかったが、皇帝暗殺を企むわりには影の全くない少女であった。
本当に、唯ジャヴの悔しがる顔や苦しそうな顔が見たかっただけなのだと思う。そもそも、この少女が怒っているのは手を傷つけられたことに関してだから、ジャヴには後で謝罪を求めようとハルは考えていた。
「転移塔・・・・ですか？じゃあ、ヴィオラの家は位の高い貴族なんですね」

ダークの説明を思い出しながらハルは答える。城の中を見て回っていたときダークがしてくれた転移塔の説明では城と重要な貴族の城や屋敷、他の帝国との陣を繋いでいる要所だと言っていた。
「ええ、そうらしいのですわ。私の力ではなく父の力ですけど」
ちょっとそっけなくヴィオラは答えた。今までとは少し違う反応にハルはひっかりを覚えた。
「あれ、ヴィオラはお父さんが嫌いなんですか？」
ハルが聞くと、ヴィオラは顔を顰める。
「父が嫌いなわけではないですわ。わたくし、自分の力以外で培われたものに頼るのが嫌いですの。母のように自分で稼いだお金で贅沢をするのが夢です！」
こぶしを握って、力説するヴィオラにハルは感心した。おもわずヴィオラの頭を撫でながら褒めてしまう。
「すごいですね。ヴィオラは偉いです。行動力もすごいですし、でも・・・行動する前に少し考えましょうね」
ヴィオラがもう少し落ち着いたら、考えなしの皇帝暗殺なんて二度としないように
言い聞かせなければならない。
この世界の法律がどうなっているのか分からないが
ヴィオラのやったことが発覚すれば酷い事になるのは間違いないのだ。
褒められて嬉しいのか、ヴィオラは笑顔ではいと、返事をした。
髭面の男が、入り口で立ち止まったままの二人に声をかける。
「ヴィオラさま。行きますよ」
髭面の男はマルコというらしい。ヴィオラの家の庭師で、ヴィオラに無理やり頼みこまれて（脅されて）城まで付いてきたのだと聞いた。
「マルコ、お前は本当に愛想がないわね！」
ヴィオラはマルコの態度に声を荒げたが、マルコはちっとも気にしていない。

「庭師に愛想があっても儲かりませんしね。ほら、いかないんですか？」
扉を開けて、騎士に身分証を見せ終わったらしいマルコがヴィオラを呼ぶ。
「いくに決まっているでしょう！！ハルお姉さま！行きましょう？」
マルコを先頭に、ヴィオラとハル、そして街で雇った４人の暗殺未遂者たちが
扉をくぐった。
４人の暗殺者たちはハルが出てきたあたりからほとんど会話をしていない。
ハルはちらりと後ろの４人を見た。
みな、一様に平凡な顔立ちで特徴すべきことがない。区別できるのは髪の色ぐらいだろうか。
ただ、暗殺者というだけあってかみな一様に陰気だ。ハルの眼には黒い靄が彼らを包んでいるのが見える。
眼も淀んでいる。
元の世界の殺人者と同じ眼だった。
ハルの背筋にぞわりと鳥肌が立つ。あんな目をした人間はとても苦手だ。
彼らから眼を逸らし、扉を抜けるとベージュを基調にした塔の内装が見えた。たくさんの扉がある。
一部屋一部屋が陣を書いてある所になっているらしく、部屋の前には必ず騎士が２人立っていた。
マルコは慣れているのか、戸惑った様子もなく中央にある螺旋階段を上がっていく。
静かな塔の中の空間に、ヴィオラもハルも黙ってマルコについていった。
３階の何番目かはわからないが、周りのドアとほとんど変わらないドアの前でマルコは止まった。
扉の前に居た騎士に軽く頭を下げると、騎士たちも返礼をする。

おや、とハルが思うよりも早く騎士たちによって扉が開かれた。
「ハルお姉さま。ここの上に乗るだけでいいのよ？」
敷物の敷かれていない床に書かれているのは赤や青の顔料だろうか。さまざまな色で彩られた不可思議な模様の集まりだった。明るい室内においてさえ、その書かれた模様は発光しているように見える。マルコは何も言わずに先に模様の中に入った。
すっ、とハルの目の前で消えるようにマルコはいなくなる。目の当たりにしたファンタジーの世界に、動きを止めたハルは、ヴィオラに急かされるようにして陣の中に入った。

目の前が、テレビの画面が切り替わるように
別の部屋の中へと移った。

ヴィオラに手をひかれて、ハルは足を進める。
ファンタジーな出来事は意外にあっけなく終わってしまった。少し物足りなさを感じていたが、初めて見る他の屋敷にすぐに、好奇心が顔を覗かせる。
「ここが、ヴィオラのお屋敷ですか？すごいですね」
陣が置いてある部屋は天井が吹き抜けになっていて、天窓にはステンドグラスのような色つきのガラスがはまっている。降り注ぐ光がその色になっていて、陣がある場所の光と混ざってとても幻想的だった。
ハルが天井を見ながら感動していると、ヴィオラも嬉しそうに言った。
「父の趣味ですの。雰囲気にあった物を用意できるところ、ここら辺は褒めてあげてもいいところですわね」
しばらく二人で天井からの光を眺めていたら、背後でマルコが大きくため息をついた。

「お二人とも。そろそろ行きますよ。この人たちに報酬も渡さなくちゃならないし」
「わかってるわ。・・・お姉さま、そろそろ行きましょう？　まだ、案内したいところがたくさんあるのよ！！」
そういって楽しそうに笑ったヴィオラに、ハルは手を取られて歩き出す。
廊下に出ると、幻想的な雰囲気は消えて、それでも豪華な装飾が単調な壁を彩っていた。
少し歩いて、マルコとヴィオラはある部屋の前で足を止める。
両手開きの扉をあけると、応接間のような感じの部屋だった。ハルはヴィオラとソファに座るよう促される。
テーブルには花瓶と、小さな女の人を模した置物が置いてある。マルコは座らずに立っていたが、あの４人はテーブルを挟んだ反対側のソファに腰を下ろした。
「今回の依頼は、わたくしの都合で変更してしまったから。　あなたたちには、約束通りの報酬をお支払いするわ」
いつの間にか傍に来ていたメイドが４人に袋を差し出す。
無言で、一人が受け取った。

9

「それでは、門まで案内します」

マルコがそういって男たちを促して背を向けた瞬間だった。
ほとんど勘に近いものだったが
ハルはすばやく立ち上がってテーブルの上にあった置物を彼らに投げつけた。
かしゃん
立ち上がった男たちとマルコの間で、ナイフと置物がぶつかった。
マルコは振り向きざまに剣を抜き、男たちに冷たい視線を向ける。
「ありがとうございます、ハル様。・・・・・貴様ら、何の真似だ？」
ナイフを投げた男は、ちらりとヴィオラに暗く淀んだ目を向けてからにたりと笑った。
「そこのお嬢様を消してくれという仕事でね。
騎士上がりのあんたは、女3人も守って戦えるかなぁ？」

言うが早く、ナイフを投げた男と後2人が剣を抜いてマルコに向かっていく
それを見ても動揺することなくマルコは自身の剣を素早く構えた。
どうやら、彼はただの庭師ではなく剣を使えるらしい。
だが、4人のうち最後の1人がヴィオラに向かっていた。
その手には短めのナイフが握られている。振りかぶられたナイフに気が付いたヴィオラは逃げようとしたが、ソファに足をかけて躓いてしまう。

『ヴィオラさま！！』
マルコとメイドの叫び声が重なった。

キィン！！
誰しも、ヴィオラの叫び声が上がると思ったその空間で、
響いたのはナイフの弾かれる音だった。

「婦女子に暴行はいけません！！」
ワンピースの様なドレスの下に隠していた剣を構えて、ハルは暗殺者に怒鳴った。
こういった犯罪者に対峙するのはすごく怖かったが、少女が殺されるのを黙ってみてはいられない。
暗殺者は無言で、ハルから距離を取る。
その隙に、ハルはヴィオラを片手で立たせ、メイドのほうに押しやった。
殺気が、暗殺者から漂ってきたが
このくらいだったら、ジャヴと稽古をしている時よりも全然怖くはない。
ハルが怖いのは眼だ。彼らの眼はどこか、昔に見た彼女の母親の眼を思い出させる。
一瞬、ハルの思考がそれた瞬間を見計らったのか、暗殺者が飛びかかってくる。
「きゃあ！」
後ろでメイドかヴィオラの叫び声が上がるが、ハルにとっては男の動きは遅かった。

男の刃物を避けると足を切りつける。
ザシュ、という肉を切り裂くいやな感触が手に伝わるが、容赦なく切り抜いた。
足の腱まで切った嫌な手ごたえと共に、男は足首から血を流して床に転がった。
言っちゃ悪いが、ダークよりも弱い。

聞くに堪えない声を上げてのたうちまわる男は、どうやらこれ以上ヴィオラを狙うことはなさそうだった。
だが、安心はできない。
ハルは花瓶が転がるのにも構わずテーブルクロスを引きはがして男の両腕を縛りにかかった。
折ってしまった方が確実なのだが、あまり人を傷つけたくないためハルはこの方法を選んだ。がっちりと固め、解けないように縛る。
「見張っておいてください」

まだ、終わったわけではない。
メイドとヴィオラにそういって、もう一度ハルは剣と鞘を手に取ろうとした。
そうして、初めて自分の手が軽く震えていることに気が付く。
自分の意志で人を切った。
「馬鹿ですね、怖がってどうするんですか」
小さく呟いて。
剣先が赤く染まった剣の柄を、鞘をしっかりと握りしめる。
その手が震えていないことを確認して、ハルはマルコに切りかかっている二人に飛びかかった。

1人はマルコが切ったらしく、倒れている。
人間、上からの攻撃にはいきなり対処できないらしい。
テーブルとソファを足掛かりにしたジャンプは結構高く飛べた。
男たちの真上から攻撃を仕掛ける瞬間、マルコの驚いた顔が見える。
ハルは持っていた鞘で、一人をぶん殴る。落下の力も加わっているので相当なダメージになるだろう。
もう1人には、その攻撃に気づかれて避けられてしまった。
だが、甘い。
ハルの鞘から避けようとした男の隙をついて、マルコが男を切った。
男の血が、マルコとハルにかかる。

ハルは、動じなかった。

元の世界でよく事件に巻き込まれていた。
そのことは
ハルの中にはっきりと残っている。
稀だったが、包丁や拳銃で殺される人たち。
その中にいつ仲間入りしてもおかしくない自分。
いつしか、死体を見ても何も感じなくなっていた。
心が、ある意味麻痺してしまったのだろうと、医者は言っていた。
死にたくないという本能だけが、こういうときのハルを動かす。
無表情に、頬についた血を拭うと、
殴った男と、切られた男の様子を確認する。
1人はこと切れていたが、ほかはまだ生きていた。

マルコらが見つめる中、ハルは自分のドレスを引き裂いて
淡々と、男の傷口を圧迫して、包帯のように巻いていく。

意識があるらしいその男は呟いた。
「・・・・・・こ・・・ろせ・・」
虚ろな目、淀んだそれに、あの日の母親が重なった。
きらりと、見慣れない光が男の口の奥に光る。

「うるさい」
ハルはそういって動けない男の口の中に手を突っ込んだ。噛む力もあまり残っていないだろう

その男の口の中を探ると、奥歯に銀色の小さな玉が見つかる。
ハルはそれを取り出して、部屋の隅に放り投げた。
ついでに、男の服で手を拭う。

奥歯に毒を仕込んだりするのは漫画とかでよく見ることだったが、
本当に仕込んであるとは。
ハルの行動に、男の瞳が絶望に染まった。
ハルは、男のその眼を見て告げる。
「あなたが、死ぬのは勝手ですが。私の目の前で死なないでください。
迷惑です。弱いくせに」
これは、ハルの本心からの言葉だ。
別に、男が死のうと生きようとかまわない。ただ、目の前では死んでほしくないだけだ。
弱いという言葉に男が反応する。
ハルは眼を冷ややかに細めて、厭味に笑った。
「あれ、弱いといわれて怒るんですか？　こんな小娘に後ろを取られたのに？　弱い人がいくら吠えたところで弱いんですから。　認めてしまえばいいのに」
「・・・・ぐ・・・・」
ハルの狙い通り、男の眼に怒りがともった。
これは、ハルへの復讐を考えている眼だ。
こんな目をしていればここで勝手に死ぬこともないだろうと判断してハルはその男を離して、立ち上がった。
「マルコさん。医者を呼んでいただけますか？」

ハルが言った言葉にマルコは頷いて部屋を出て行った。
マルコはきっと、彼らから情報を得たいだけだろう。ヴィオラを狙ったことに関しての。
だから、彼は殺さないのだ。

ハルは、足を切って動けなくした男にも同じように淡々と応急処置を施していく。
ついでにとハルが、殴って気絶させた男を縛っている時だった。

「・・・・・なぜ、助けますの？」
メイドの隣にいた、ヴィオラが下を向いて震えた声でいう。
「・・・・ヴィオラ？」
顔を上げたヴィオラは、暗殺者の一人を指さした。
「こんなやつら死んでもいいじゃない！！
なぜ、助けようとしますの！！？」

震えた指に、震えた声がヴィオラが彼らをどう思っているかを示していた。
殺されそうになったのだから、彼女の反応は当たり前だ。
ハルは、ヴィオラの眼を見て言った。
「・・・・確かに、死んでもいい人たちだとは思います。でも、ヴィオラ。
貴女は、この人たちを殺したのがだれか分かっているんですか？」

この人たちが死んだら、殺したのはマルコとハルだ。
実際マルコは一人殺している。

「でもっ！　おねえさまとマルコは悪くないわ！！　こいつらが襲ってきたんですもの！」
「ヴィオラ。　悪くなくても、殺した事実は変わらないんです。
悪い悪くないの問題じゃない。　人を殺したか殺さないか。事実はそれだけです」

ハルの強い口調に、ヴィオラは眼を落した。殺された人間がもう元
には戻らないのと同じように
殺した人間ももう元には戻れない。
ハルはまだ、人を直接殺したことはなかったが
殺された人と、殺した人は何人も見てきた。ときには犯人だったり、
知らない人であったりしたけれど。
マルコには覚悟があった。
彼はもう、人を殺すことに躊躇いはないのだろう。そういう眼をし
ていた。
ハルは、まだ覚悟なんてものはない。傷つけることにすら怯えるく
らいだ。
いつも思っているのは
死にたくない。

それだけだ。
覚悟ができない自分のままであれればいいと思う。覚悟ができてし
まったときは、ハルが人を殺してしまう時だから。
そして、ハルの傲慢だとわかってはいるけれど、まだ幼いヴィオラ
には覚悟も、人を殺していいという言葉も使って欲しくない。

「命を奪うということは、ヴィオラ。あなたにとって“軽い”こと
ですか？」
ハルが問いかけると、ヴィオラは顔を下に向けたまま首を横に振っ
た。
きちんと考えることができる彼女は、きっとこの出来事を消化でき
る。
「・・・・・・ごめ・・・なさい」
「謝ることはないんですよ。　助けているのは私の偽善もあります。
それに、打算もね」

震えているヴィオラをとりあえずこの惨状から移そうと、ハルはメイドに目を向ける。
この状況でも取り乱すことのない彼女は優秀だと思う。目で合図すると、すぐにわかってくれたようだった。
「ヴィオラさま。とりあえず別室に移りましょう？」
メイドは優しく言って、少女をつれ部屋を出て行った。

ヴィオラと入れ替わりに、マルコが部屋に入ってきた。
「申し訳ありません。お客さまに、ヴィオラさまを叱らせてしまって。　正直、助かりました。後、先ほどのこともありがとうございました」
彼は、本当に申し訳なさそうにハルに謝罪する。しばらく前から戻っていたのに、彼は扉の前から動かずに
ハルとヴィオラの話を聞いていたようだった。
「いえ、別にいいですよ。こんなことは初めてだったんでしょう？動転して当然です。なにより、自分を殺そうとした人に殺意が湧くのは当然のことだと思います。
ただ、私がヴィオラには当然のことのように受け入れてほしくなかっただけですから」
時々、こんな傲慢な自分が嫌になる。自嘲の笑みを浮かべながら
縛り終えた男を転がしてハルは言った。
ヴィオラにああ、言ったのは彼女に人の死を軽く受け止めてほしくなかったからだ。
ハル自身のエゴに過ぎない。
「・・・・それでも、私たちではヴィオラさまを叱れなかったでしょう。
ただ、甘やかしてしまうだけになっていたと思います。」

マルコたちだけでは真綿でくるむように甘やかして、優しくしてそうして、いつしか彼女の普通の感覚を、
真綿で首を絞めて殺していたことに気が付いていただろう。
ハルという少女がどう感じていたとしても、マルコたちができないことを簡単にやってのけたのだ。
マルコはハルに深く頭を垂れた。

「貴族社会にとって、このようなことは日常的ですか？」
ハルが聞くと、マルコは黙った。
「・・・・・・・この家にとってはどうですか？」
もう一度重ねて質問すると、マルコは口を開いた。
「ヴィオラさまには、直接は初めてです。この間１１歳になられた際に
家督を継げる資格を持ちましたので。親戚筋のものでしょう」

ハルはそれを聞いて眩暈がした。
１１歳というのはこの際ちょっと置いておくことにして、親戚が、幼い少女を殺そうとしたというのだろうか。
「・・・・・・腐ってますね」
ハルがそう呟くと、マルコも頷いた。
「じきに、犯人も分るでしょう。こいつらのおかげで。
ハル様、あなたは着替えと湯を使ってください。すぐに用意させます」

そういって、マルコは力が入っていないハルの手を引いて部屋を出た。

暗い気分のまま、ハルは案内された部屋に入る。
客間のようで、誰かが遣っている形跡はない。城で使っている部屋もこの部屋もなぜこんなにだだっ広いんだろうか。大きい人が多いか

らだろうか。
「・・・・駄目だ」
暗い気持ちを押しのけようと、違う方に意識を向けるが
血のついたドレスと、自分の手を見ると
先ほどのことがどうしても思い出されてしまう。
部屋についている浴室をのぞくと、すでにお湯が張られてあった。
ハルは先ず、洗面台のようなところで手を洗い
手にこびりついた血を落しにかかった。
なかなか落ちない血に、過去が重なってしまう。

10

「晴ちゃん。どうしてこう血生臭い事件に巻き込まれるのかねえ」
刑事課の森さんが頭をかきながら
血で染まったハルの手を見おろしている。
もう、何度目かもわからない。今回は犯人の血だった。

コンビニ強盗。客はハルと女の人2人で
それに若い店員がいた。
震える店員が、犯人に金を差し出そうとしたとき
女の一人が呟いたのだ。

「最低の人間ね」と

確かに最低かもしれなかったが、今この時に使う言葉ではなかった。

犯人は薬でもやっていたのだろうか

物凄い勢いで女の方を振り返った犯人は逆上し、奇声を上げながら

人質の一人である若い女に飛びかかっていった。

それを見てしまったハルの体はとっさに動いていた。

横から犯人の体に体当たりし、体勢を崩させただけだったが。

犯人には不幸なことに、彼の持っていた包丁が、手から離れ

更には彼の脇腹にすとんと落っこちたのだ。

ついでとばかりに犯人は陳列棚に頭をぶつけて昏倒し、ハルは急いで救急車と警察を呼ぼうとした。

これで終わるなら、まだ良かった。

だが、その時、ハルの目の前で信じられないことが起こったのだ。

襲われかかった女が、何を思ったのか男の脇腹の包丁を抜いたかと思うと

また男に突き立てたのだ。

今度はハルが止める暇もなかった。

女の顔は恐怖でこわばっていた。それは狂気の顔なんかじゃなかった。

自らの迂闊な発言が元とはいえ、強盗に飛びかかられたことが本当に怖かったのだろう。

彼女の頭にはもう、生存本能しかなかったのだ。

そう、ハルは思いたかった。

だが、女性は包丁を刺して男が動かないことを知ると歪な笑顔をその顔に浮かべたのだ。

まるで、安心したとでも言うように。

「きゃあぁぁ」
もう一人の女性が悲鳴を上げたことで、ハルははっとした。
女性から目を逸らし、包丁が抜けたことで血が溢れている傷口を圧迫する。もちろん、刺さったままの包丁は抜かないように。犯人の体勢もあまり動かさないように気を付ける。

「救急車と布お願いします！！」

そう叫ぶと、店員と悲鳴を上げた女性が弾かれたように動き出した。

刺した彼女は、動かなかった。

今でも疑問に思う。
犯人は助かったが、彼女はどうなったんだろう。
彼女の顔に広がったあの歪な闇はどこに行くのだろう、と。
「晴ちゃんは、人の嫌な部分ばっか、触れてるような気がするな。
まるでおれたち刑事以上だ。」

森さんはいつからか、繰り返しハルにそう言った。
闇の部分は、刑事だけが見てればいいんだと。
「じゃあ、私も刑事になればいいかもしれないですね」
手についた血を洗い流しながら、ハルは冗談めかして言った。

だが、森さんは確か、こう言ったのだ。
「馬鹿言ってんじゃないよ。晴ちゃんは刑事になんかなっちゃダメだ。
今よりもっと暗い部分を見ることになっちまう。誰かが言ってただろ。
深淵をのぞく者は深淵にも覗かれている。ってね。
人間を好きじゃない晴ちゃんは、人間以外のものになっちまうぜ」

言われた当初は何のことか分からなかったが、
今なら少しは理解できると思う。
リルヴァーナに言われた言葉。ジャヴに言われた言葉。
ハルは、人間という生き物が信用できなかった。いや、今も信用していない。
でも、信じたいとも思っているのだ。

11

手についた血を落し終わると、ハルはそのままドレスと下着を脱ぎ捨てて
浴室へと入る。

ハルだって人間だ。
汚い感情も、きれいな感情もある。
祖父母が生きていたころはまだ良かった。
彼らは、ハルの安心できる場所だったから。人間が、汚いだけではないと
思いなおせる場所だったから。
彼らがいなくなって、人間に甘えることがなくなった。

他人というものに線を引いていたのは自分だ。
人以外のものに心を寄せたのも。

この世界にきて、よかったことはリルヴァーナとジャヴに出会えたことだと思う。
ジャヴに出会ってから、誰かに甘えるということができた。
元の世界にも友人はいたし、彼らを頼っていなかったわけではないが
線はきっちりと引いていたように思う。
ジャヴにはその線を無理やり消されたような気分だが、
不思議と嫌な感じはしないのだ。

たとえば、
ジャヴに先ほどのようなことがあったとしても
ジャヴは暗殺者に容赦なんかは絶対にしない。
寧ろバッサリと切ってすっきりした顔をしていそうだ。

そして、手加減をしたハルは怒られるのだろう。
この世界のこういったところは好きにはなれないが
ここの人は好きだ。
矛盾だらけの考えに、ハルは苦笑しながら浴槽の中にはいった。
何故か、広い浴槽の隣には台のようなものがある。
それを横目に見ながら暗い考えを吹き飛ばすように、一度頭までお湯に潜った。

「ぷはっ！」

潜っては顔を出す。という行為を何度続けただろうか。
ハルはぶるぶると頭を振って、顔についた水を落した。
それまでギュッと閉じていた眼を開くと、３つの顔が眼にはいる。
トーテムポールのように浴室の入り口から女性が３人顔をのぞかせていた。

「・・・・・・どなたですか」

学校とかでこんな風に覗かれていたら、確実に怪談が一つ出来上がる様な姿だったが、
怪談に出てくるようなものをよく目にするハルには
おかしい人たちだな、というくらいにしか思わなかった。
声をかけた途端、３つの頭は同じことを叫んだ。
『キャー！！可愛らしいですわ！』
３人はいきなりメイド服のまま浴室に入ってくる。
そうメイドさんだった。
「な、何なんですか？」
３人の笑顔に押されながら、ハルはお湯の中に体を隠した。
同性とはいえ彼女らは服を着ているし
何より、年齢よりも貧相な体だと自覚しているだけに恥ずかしいの

だ。
「ハル様！こんな可愛らしい方だったなんて！！
わたくしたち、ご入浴のお手伝いに参りましたのよ！！」
「ふふ、磨きがいがありそうだわあ」
「わたくしたちに、すべてお任せくださいましね！　怖いことなんて何もありませんから！さあ！！」

3人のメイドは鼻息も荒く言った。ポイントは、鼻息が荒い。
眼も異様にギラギラとしている。
こんな人たちに怖くないから、なんて言われても
まるで説得力はないだろう。子供なら、泣いているレベルだ。

「え？・・・いや、いいです・・・って、ぎゃあっ！！」
顔を引きつらせながらハルは遠慮の言葉を告げたが、メイドの一人が無理やり
両脇に手を突っ込んでハルを浴槽の中から引っ張り上げた。
「ハル様。そんな色気のかけらもない声では殿方の一人も落とせませんことよ」
ハルを軽々と引っ張り上げたメイドがウインクをしながら言う。
「いや、あの、どうでもいいんでお湯の中に戻してもらえませんか・・・」
とりあえず、ハルは真っ裸なのだ。さらには、引っ張り上げられているおかげで両手も使えない。
これは確実に虐めだ。
「いいえっ！どうでもよくなんて無いでございますのよ！！
女はよい男性を捕まえてこそ！いい女足り得るのですわ！！」
「え、あの、だから離して・・・」
『ダメです』
ハルの言葉を無視して、メイドたちはハルをマッサージ台のようなものに乗せた。

「さあ！ハル様をいい女へと変えてさしあげるですわよ！！」
『ハイ！！』
「うわっ！ちょおお、やめてくださ・・・・やめてー！！？」
ハルの悲痛な声だけが、浴室内にこだました。

「はーい☆終わりましたあ！ハル様！！・・・はーるーさーまー？」
「あ、放心状態ですわ。よっぽど恥ずかしかったみたいですわね」
「ちょうどいいからこのまま着替えさせてしまいましょうか」
3人のメイドは放心状態のまま動けないハルにバスタオルを被せる。そのまま、ハルにタオルを巻きつけて3人はハルに着せる服を選び始めた。

その時、
ガ・・・バタバタバタッ！！ガタン！
部屋のほうからすごい勢いで音がした。音は段々とこちらに近づいてくるようだ。

ハルは、その音に気がついて放心していた顔を引き締めた。可能性は少ないが先ほどのような奴かもしれないと思ったからだ。
バンッッ！！
脱衣場に繋がる扉が開けられたのと同時に飛び込んできたのは、必死な顔をしたダークだった。
「あ、ダーク」
ダークだとわかって緊張をといたハルにダークは無言で近づくと、

泣きそうな顔をしてハルを抱きしめた。
「・・・・・・・良かった・・・・・ハル様。　無事だったんですね・・・！！」
ぎゅーっと強く抱きしめてくるダークに、ハルは背中をぽんぽんと叩きながら言った。

「すみません・・・・ダーク・・・・・・私、いまバスタオル一枚なんですが・・・」

言外に、ダークが今男性体だとということを含ませると、ダークは真っ赤になって慌ててハルから離れる。
ハルだけだったら別にそのままでもかまわないのだが、今はメイドたちが傍にいるのだ。ダークが、妙な勘違いをされてしまうのではないだろうか。
「・・も、申し訳ありません！！！」
本人も、気が動転しているのだろう。赤くなったり青くなったりしながら頭を下げて出て行こうとしたダークに、メイドたちから意外な声がかかった。
「あら、感動の再会はもうお終いですの？」
「わたくしたちのことは気になさらないでもよろしかったのに」
「ねえ。むしろ物語のようで素敵でしたわ！！」
3人はそれぞれ、含みのある顔で笑った。
ダークはそれを聞いて、真っ白になる。赤青白と器用なことである。
「とんでもない！！　皇帝陛下の婚約者であるハル様に！！　私は只、ハル様の騎士ですか『今何て言いましたの！！！』
ダークの言葉に3人はますます目を輝かさせて、ダークに詰め寄った。
ハルは動揺したダークがわけのわからないことを口走っただけだとわかっていたが、彼女たちは今の言葉のどこで興奮したのだろうか。
3人がかりで、ダークを追い詰めていく様は見事としか言いようが

ない。
「ハル様が！！皇帝陛下の！！婚約者ですって？！」
1人が鼻息荒く言うと、もう一人が手を顔の前で組んで芝居がかった口調で言った。
「愛する方は、皇帝陛下の婚約者！
でも、騎士の思いは止められなかった！！
結婚式の日に、手に手を取って逃げ出す騎士と姫！！
だが、そこには皇帝の追手が待ち構えていた！！」
「え、あの、ちがいま」ハルの声は残念ながら彼女たちには全く届かなかった。
「きゃー！！それでも、騎士と姫は逃げ続けて、最後には幸せな家庭を築くんですわ！！」
「だから、違いま」ダークの声も無視された。
『わたくしたち！！応援いたしますわ！！』
3人のメイドはぎらついた眼のままダークに詰め寄った。
ダークは、3人の眼を見ないようにして言った。とにかく3人の眼が怖いらしい。
「私はハル様の騎士ですが、
ハル様のことは敬愛する主君としてしか見ておりません！！」

当たり前だ。

ハルだって、本当は女の子なダークに友人以外の好きをもらっても困る。必死に否定するダークの言葉をきちんと聞いていたのかいなかったのか、3人は顔を見合わせてにたりと笑う、
「貴女だけの騎士！！素敵・・・・・・・」
メイドの一人が鼻血を出して卒倒した。
慌てて他の2人が支えたが、完全に気を失っているようだった。
「きゃー！ポリィ！！」
「大変！休ませなくっちゃ！！」

よほど慌てたのか、メイドの2人はハルとダークを置いて出て行った。

「災難でしたね。ダーク」
ダークの肩にポンと手を置いてハルが言うと
ダークは情けない表情になった。
「なんだか、女性恐怖症になりそうです・・・」
自身も女性のくせに、ダークはしみじみといった。
ハルもダークの言葉に同意して頷く。女性恐怖症ではなくあの3人
恐怖症になりそうな気がしたからだった。
お風呂での、恐怖は当分忘れられそうにない。

12

「わたしも、あの3人はちょっと苦手です・・・・あ、ちょっとそっち向いてもらえませんか？
着替えてしまうので」
ハルがそう言うと、ダークはまた顔を真っ赤に染め、慌てたように後ろを向いた。ダーク自身も女性なのに、どうしてそんなに動揺しているのだろうか。そう考えながら、ハルは下着とメイド3人が置いていった服の中から一番上に置いてあったワンピースタイプのドレスを着る。
「もう、いいですよ。　ありがとうございます」
そういうと、まだ、顔が赤いダークがハルの方へ振り向く。
振り向いた彼女の顔は赤いが、真剣な表情だった。流れるような動作で膝を折り、ハルの前に跪く。
「ハル様。　貴女の騎士であるはずの私が
貴女の危機に馳せ参じることができず、誠に申し訳ありません。
・・・・・・御無事で良かった」
ダークは最後にそう呟いてハルの手を取り、額に押し当てた。目を閉じていても真剣な顔、声は少し震えている。
本当に、心配してくれたのか。
「どうして・・・」
この世界にはここまで、心配してくれる人がいるのだろう。
ハルが零した呟きに答えは返らず、ダークの微かな微笑みと共に握られていた手に力が籠められる。
ここは、ハルにとって優しい人達ばかりだ。
心配をかけてしまったことが酷く悲しい。
「・・・・ごめんなさい」
「ハル様、違います」
ダークは、ハルの言葉に大げさに顔を顰めて見せた。

「守るべき貴女の傍にいなかった私のせいなのですから。　私へ罰を」
「へ？」
「ああ、そうですね・・・・主を守れない騎士など、価値のない剣。剣の腕も主に及ばず・・・むしろ、消えたほうが」
「ま、っままって下さいダーク！？　どうして、そんな暗い方に考えるんですか！？」
「いいえ、わかっているんです。　こんな虫けらハル様の近くにいるだけで嫌ですよね」
「虫？！　いえいえ、虫って・・・何を分かったっていうんですか？！　誤解です！」
罰なんて与えたくはないし、ダークには罰される理由なんてどこにもない。
狼狽えたハルに、ダークはにっこりと笑って見せた。
「わかってます。　こんな私でもハル様の役に立つところを示して見せます。
手始めに、罰としてハル様を襲った奴らの尋問と拷問を任せて頂ければ、さくっと吐かせて見せます！
ついでに始末もしておきますのでご安心くださいね」
ダークのその言葉に、ハルの頬はひきつった。
ハルがまかり間違って頷いたりしたら、彼女はすぐに行動に移すだろう。
動く方向が、暗すぎやしないだろうか。
先ほど、人の生死についてヴィオラに真剣に語ったばっかりだというのに、あっさりと自分の騎士に殺させるわけにはいかない。
「っダーク！　別の罰にしましょう！　わ、私女の子姿のダークが見たいです！」
ハルは思わず頭に引っかかっていたことを叫んだ。
が、返事がない。
「・・・・・？」

先ほどのハルのような顔をしてダークが固まっていた。
ハルが手のひらをダークの目の前でひらひらさせると、ダークはハルの手から、そっと視線を逸らせる。
「・・・・・・それは、ちょっと難しいです・・・。」
さっきのようにはっきりとした赤や青の顔になるわけではなかったが、ダークの頬が少し赤くなっている。
難しいということは、女の子に戻ることができないわけではないのだろう。
「どうしてですか？
と、いうかダークがどうして男性の姿なのか、理由を聞いても大丈夫ですか？」
何となくダークの持っている剣が、ダークの肉体を変化させているのだろうと
見当は付いているが、ダークがなぜ男になっているのかという理由は聞いていない。
ハルはダークが魔剣に隠してもらっているという印象を受けたが
実際のところは呪われているのかもしれないと、ちょっと気になっていたのだ。
ただ、言いたくないことを無理に聞く気はなかった。
ダークの顔色をうかがうハルに、今度はダークが焦り始める。
「あの、大した話では・・・・」
「・・・・・私に言えない話なんですね・・
いえ、いいんです。どうせ私は成り行きで忠誠を誓ってもらっただけですもんね・・・」
「それは違います！　私はハルに生涯の忠誠を誓っています！！」
悲しそうにハルが言うと慌てたダークが大きな声で叫ぶように言った。
ハルとしては、ダークがこう来ると踏んでの言葉だったが。
ダークの素直な反応に、ちょっと良心が痛む。
「じゃあ、教えてくれますか？

・・・・・あ、本当に言いたくなかったら無理に言わなくてもいいですよ」
ここまで渋るのは何か言いたくない理由でもあったのだろうかと考えて
無理に言わなくてもいいというところは真剣な顔で告げる。
そんなハルに、ダークは苦笑いをした。
「そんなの、罰でもなんでもないじゃないですか」

ダークのこの恰好というか男性体である理由は
言いにくい理由ではあったが、別に呪われたとかそういう話ではない。
もしも、これが呪いの一種だとしても進んでかかったのは自分だからだ。
ハルにはいつか話しておいた方がいいと思っていたが、
理由が自分のためであるのと、ちょっと情けない事態になっているのとで渋っていただけだ。
主である少女は、妙にお人よしなところがある。
最後のところで相手に逃げ道を作ってくれる甘さと、加えて少女のような容姿が反発する気持ちを抱かせない。
「・・・・・ハル様は不思議ですね」
人を従わせるような雰囲気を持っていたり、普通の少女のような時もあれば、妙に人に敏かったりする。
言われた本人は、首をかしげていた。
ダークはこの人に忠誠を誓ったことを絶対に後悔しない自信がある。
騎士を輩出してきた生家である、ホーブの血だろうか。
「ここで話すのもなんですから、椅子のあるところに行きましょうか。　お手をどうぞ？」
ダークが笑顔で貴婦人にするように、ハルに手を差し伸べると
ハルも笑ってダークの手を取った。

「私が生まれた国はこのサングルド帝国ではないんです。ここは光の女神リルヴァーナの帝国ですが、私の生まれはヒューバルド帝国。闇の神ガゥルの帝国です。・・・・私は帝国の貴族の家に生まれました。
ホーブ家は代々、ヒューバルドに仕える騎士の家系です。私も、兄たちとともに小さいころから剣を嗜んでいました。
ヒューバルドの騎士になるつもりだったんです。・・・・・・くそ親父、いえ、父がいきなりあんなことを言い出すまでは」

あの頃は騎士になることだけを夢見て、貴族の女性としての嗜みとともに
毎日、兄たちと剣を振り回していたのだ。
15歳の時に縁談を持ち込まれるまでは。

「15歳の春でしたね。それまでも、父は私が剣を持つのにいい顔をしなかったんですが
どんどん剣にのめりこむ私を見て焦ったんでしょうね。

いきなり、結婚させられそうになったんです。

いえ、珍しいことではないんですよ。ヒューバルドでは婚姻に年齢が規定されていませんし、貴族同士では１５歳以上になるとすぐに結婚するということはよくあることなんです。ただ、私には当日まで結婚ということは知らされませんでした。

結婚式の当日に、相手と初めて会ったんです。無理やり連れて行かされて。

相手は、ヒューバルドの第３皇子でした。彼でなければ、私はあんなに怒り狂ったりしなかったと思いますが、

ともかく大嫌いな相手だったんです」

今思い出しても腹が立つ男だ。

剣でダークに勝てないからか、会うたびに女のくせにといういやみばかり言う相手を好きになれるはずもない。

他の皇子は優しく、ダークに対しても気さくな態度であったためあの皇子でなければ、ダークはそのまま結婚したかもしれない。

「その相手と、式の直前に会って言われたんですよ。

“お前みたいな騎士もどき女を嫁にもらってやるのは俺くらいだろうな”って。

その言葉を聞いた瞬間に私は切れましたね。　不敬で、死罪になっても構わなかったのです。　相手を蹴り倒して窓から逃げて、たどり着いたのが神殿でした。

その時は無我夢中で人のいない方に逃げていただけだったんですけどね。

第３皇子の結婚で、その日の神殿は人がほとんどいなかったんですよ。　そこで、泣きながら叫んだんです。男に生まれればよかったって」

真剣に聞くハルに、ダークはその時のことを思い出しながら言った。

もう、３年も前のことなのに、神に会った瞬間だけは

強烈に残っている。

「叫んだ私の耳に、声が聞こえたんですよ。“そんなに男になりたい？”って
誰もいなかったはずの神殿に、その方は立っていました。
見た瞬間に、闇の神ガゥル様だということがわかりましたが、慌てて跪いた私に
ガゥル様は笑って、この剣をくれたんです。
この剣のおかげで、私は性別を変え帝国から逃げ出しました。　正直、あの第3皇子がいる
帝国に忠誠は誓いたくなかったので。　逃げ出してすぐ、使者として国を回っていたバルトさんに拾われたんです」

今のダークがいるのは闇の神ガゥルとバルトのおかげだ。ガゥルは、自分の帝国から逃げ出そうとしていたダークを笑いながら手伝ってくれたし
バルトは事情がありそうなダークを別に構わないと帝国の騎士団に入れてくれた。
感謝しても、し足りないぐらいだ。ヒューバルドでは、ダークは騎士になれなかっただろうから。
「・・・それに、ハル、あなたのような忠誠を誓いたい人も見つかりましたしね」
ダークの言葉にハルはちょっと顔を赤くした。照れているのだろう、ちょっと目を逸らして言う。
「・・・ありがとうございます。
・・・・・・ダークはもう、女の子には戻れないんですか？」
ダークは別に騎士になりたかっただけで、心まで男というわけではない。
女の人を好きになれる気もしないし、結婚するなら男の人がいいと

思っている。
ガゥルは呪いと呼べそうなダークの体の変化を解く方法だって教えてくれた。

「・・・・・戻れるには、戻れますが・・・・ちょっと・・・・恥ずかしい方法なので・・・・・」
方法を聞いたとき、ダークは脱力した。
ちょっとお前それどこのお伽噺だ。と、ダークだって言いたい。
だが、ガゥルは笑いながらその方法しかないと言い切ったのだ。
彼の神は悪戯が大好き、そして面白いことも大好きだった。
「え？恥ずかしいって・・・うーん。変な踊りを踊るとかですか？」
ハルが不思議そうに聞いてくる。
ダークは耳まで真っ赤になりながら、小声で言った。
「・・・・・・・・・好きな人からの、キスです」
・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「ベタですね・・・・・」
おとぎ話のような解きかたにハルは、遠い眼をして言った。
好きな人のキスで解けるなんて、ロマンチックかもしれない。　けれどダークは今男性体だが、女の子だ、好きになるのも男性だろう。
　好きな男性がゲイだったりしたら話はややこしくならないだろうか・・・
そんな心配をしていたハルに、顔を真っ赤にしたままで、ダークは早口で喋りだした。
「やっぱり、私なんかが、お姫様のような呪いの解き方なんて
おかしいですよねっ？！でも、ガゥル様は笑って、“これ以外認めないよん”って
譲ってくれなかったんです！！・・・・うぅ、だから、いいたくなかったんです」
どうやら、闇の神様というのはとんでもなくふざけた存在のようだ。

ハルは、落ち込んでがっくりとうなだれたダークの肩に手をおいた。
「ごめんなさい・・・・そんな事情があったとは・・・
あ、じゃあ、ダークに好きな人ができたらめいっぱい協力しますね
！！」
励ますように言うと、ダークは顔を少し上げてぼそりと言った。
「・・・・・好きな人がゲイだったら、戻っちゃっていいんでしょ
うか？」
ダークのさっきのハルと同じ疑問に、ハルは固まった。
「・・・・・そもそも、好きな人がノーマルだったら、男に惚れる
って
ありえないと思いませんか・・・」
暗い顔をしてうなだれるダークに、ハルは励まそうと思って言った。
「えっと、ダークは中性的な顔だから！女装すれば大丈夫だと思い
ます！！」
ふっと、ダークが暗い笑いをもらす。
「・・・・・・同じ職場に好きな人がいたらどうします？」
確かに、同じ隊にいる人を好きになってしまったら
女装しても、ダークだってばれないはずがない。
むしろ女装なんてしたら、そんな趣味があるのかと引かれる可能性
の方が高いだろう。
「えっと、無理やりしちゃうとか！」
かなり強引な方法だが、それをしないと女の子に戻れないのだから
しょうがない。
「変態だと思われます」
落ち込んでいる割には的確な言葉に、ハルも詰まる。
「・・・・・寝込みを襲うとか？」
同じ職場なら、騎士だ。　宿舎は同じはずだ。忍んでいって相手に
気がつかれないように
唇を奪ってくればいいのではないだろうか。

すでに、自分たちの考えが危ない方向に進みかけているのに気がつかないまま
二人は方法を考え出していく。
「・・・・・寝込み、ですか？」
「そう！ダークが気配を殺して相手に気がつかれないようにキスしちゃえば、女の子なダークの出来上がり！
それから、ダークの妹ですとか何とか言ってその人に迫ればいいんじゃないですか？」
「いや、でも、その場合私がいなくなったってことになっちゃいませんか？
私、これからも騎士は続けたいです」
あれでもない、これでもないと2人が喋っているうちに、パタパタと足音が部屋に近づいてきた。

13

ばん！と派手な音を立てて扉が開かれる。
足音と扉の音に、目を向けたハルとダークの目に飛び込んできたのは、頬をバラ色に染めたヴィオラだった。
鼻息荒く、彼女は口を開く。
「話は聞かせていただきました！！
ハルお姉さま！ダークお姉さま！わたくし、ダークお姉さまの恋のためなら
いつでも協力させていただきますわ！！！」

そういって、妙にキラキラした瞳でヴィオラは2人の手を取った。
2人は、ヴィオラの今の言葉に茫然としていた。
この部屋に他の人の気配はどこにもなかった。それなのに、なぜ、この少女はさっきまでのハルとダークの会話を
すぐ傍で聞いていたかのようなことを言うのだろうか。
「・・・・・・ヴィオラ？話を聞いていたんですか？」
ハルが問いかけると、悪いことをしていたと気がついたのだろう。
しどろもどろになりながら、ヴィオラは言った。
「えっと、この部屋に、つながっている音管がありますの。
ハルお姉さまがいるのがわかっていたから、お話をさせてもらおうと声をかけようとしたら、知らない人の声がしたものだから・・・・・」
そこまで言って、ヴィオラの顔色が少し陰った。
知らない声だったから、ダークが先ほどの男たちのようなものかと思ったのだろう。

音管とは、屋敷内で使われる内線のようなものだ。ジャヴの館にもある。

それを使って、ヴィオラは話を聞いてしまったのだろう。電話のようなものかと思っていたのだが、一方の部屋の会話を拾える機能があるとは知らなかった。
「そのまま、聞いていたら、さっきの話を聞いてしまって・・・ごめんなさい」
興奮して飛び出してきたらしいが、ここにきて冷静さが戻ってきたらしい。
盗み聞きという悪いことをしていた自覚が出てきたのだろう。
先ほどまでの勢いは鳴りを潜め、ヴィオラは泣きそうな顔で謝ってきた。
顔は、まだバラ色に染まっているが、本人の表情は暗い。
ハルが城で一緒に居た時も、感情の起伏は素直に表す子だと思ったがここまで、激しくはなかったと思う。
ハルはある可能性を思いついて、ヴィオラを見た。
「ヴィオラ。この指を見て下さい」
ハルが人差し指を立てると、ヴィオラは言われたとおり、ゆっくりとその眼を指に合わせた。
だが、焦点は定まっていない。
微かにぶれている。
更に、一点に集中しようとするヴィオラの身体はふらついているのか、足元が忙しない。
興奮のためかと思ったが、どうやら熱のせいのようだ。
「ダーク、ヴィオラは熱を出しているかもしれません」
ハルの行動を見ていてダークも少女の様子がおかしいことを悟ったのだろう、
自分の秘密を知られたことに対しては、一旦置いておくことにしたようだ。
「すぐに、誰かを呼んできます。その方を見ていていただけますか？」
流石に帝国の騎士といったところだろうか、ダークは先ほどまでの

動揺を欠片も見せることはなくヴィオラを座らせ、部屋を出て行った。
ハルは、座らせたヴィオラの傍に屈みこむ。
「ヴィオラ。　少し、くらくらするでしょう？　横になった方が楽ですか？」
ヴィオラは素直にハルに言われたとおりソファーに身体を寄せた。
「ハルお姉さま。・・ごめんなさい・・・」
盗み聞きのことだろう。横になると、ヴィオラの目にたまっていた涙が
はらはらと頬を滑った。
「おねえさまに、そばに来てほしかっただけなんです・・・・だから、
音管をつなげたら・・・話し声が聞こえてきて・・・盗み聞きして、ごめんなさい・・・」
確かに、盗み聞きしていたことはあとで叱らなければならないが、病人の子供にそれをするほどハルは鬼ではない。
「ヴィオラ、盗み聞きしたことはあとでたっぷりと怒ってあげますから、
今はゆっくりと休みましょう？」
ちょっとくぎを刺しつつ、休むように言うと、ヴィオラはハルのドレスの裾を握って言った。
「・・・ごめんなさい。・・・きらいになった？」
涙を流しながら、ハルにそういったヴィオラは年相応の子供だった。
「嫌いになんてなりません。　安心してください」
安心させるようにハルが微笑むとヴィオラは裾を握ったまま言った。
「おねえさま・・・お母さまみたい・・・
眠っても、勝手にいなくなっちゃったり・・・しない？・・・」
「いなくなりませんよ。ほら、ヴィオラが起きるまでずっといます。ね？」
不安そうなヴィオラの頭を撫でながらハルは言った。母親が近くに

いないことが寂しいのだろう。
いつの間にか、ハルはヴィオラに大分気に入られていたようだ。
どうして気に入られたのかはわからないが、小さい子に好かれて悪い気はしない。
ちょっと自分よりも発育のいい１１歳だが。
とりあえず、約束してしまった以上、ハルはヴィオラが起きるまで傍についていることにした。

１４（前書き）

ちょっと時間は戻ります。

14

「あら、まあ。珍しいこともあるものですねえ」
神殿庁内の一室でその男は眼を軽く細めた。
「ラーニ。どうせ解っていたくせに、白々しいことを言うな」
カイザークはいつもの口調ではなく男言葉で言った。言葉遣いもいつもより乱暴だ。
隣にいたイリがすみませんと、慌てて頭を下げる。ラーニは立ち上がると自身の真白い長い髪の毛をさらりとかきあげて、イリに微笑む。
「構いませんよ。慣れていますから」
彼は、ラーニ。神殿庁内の魔術系でもなく神に仕える神官でもない。ある意味では神官というのにふさわしいだろうが、彼自身が神官と呼ばれるのを嫌っていた。
彼は、預言者。

近い未来を見、その一部を語ることを許されたものである。

この世界においての神の力は、未来にまで及ぶといわれるが
実際に神がその内容を語ることはほとんどなく
人が未来を知るということはできない。
神の言葉ではなく、世界の夢を見る預言者という例外を除けば、だが。
預言者は魔力、神力にも属さない。まったくの異色の力だ。
時折、未来を知る事の出来るものが世界には生まれる。力の弱いものもあれば、強いものも。
帝国や各国は、その預言者を国に集め混乱を防ぎ、また国の未来を預言させる。
預言者の言葉は絶対ではないがそれに近いものではある。

彼、ラーニはその中で、帝国一の預言者だった。
彼は真白い長い髪の毛を床につくほどにたらし、血のような赤い眼をした、外見の色を抜かせば優しそうな青年である。
「私たちが何でここに来たか解ってるんだろう？じじい」
預言者をじじい呼ばわりしているカイザークにイリは無言で足を踏みつけた。
確かに彼は青年の外見とは裏腹にお年を召している。
確か今年５０歳以上のはず。
だが、預言者に対してじじい呼ばわりは親しいものであってもイリにはちょっと許せないものがある。ここはカイザークがどう言おうと職場だ。
「お穣さん、いいんですよ。カイは私の甥っ子ですから。小さい時から、こんな風なので別に気にしません」
ラーニが笑顔で言うと、カイザークが何とも言えない顔をした。
「すみません」
イリが謝るとラーニはそれより、と、笑顔のまま2人に椅子をすすめた。
2人が座ると、ラーニは無言でお茶を入れる。
「じじい。お茶はいいから、本題を早くしてくれないか」
少し焦ったようにカイザークがテーブルをこつこつと叩くと、ラーニはお茶を2人の前において自身も座った。
「カイ、君が焦っている気持ちも理解できるけれど、あの預言は君を巻き込んだものではないから
詳細は教えられないよ」
預言者は自身の預言をそれに直接関わる者にしかしないという制約がある。
もちろん、この制約は全てにおいて確実に守られているわけではない。
カイザークは出されたお茶を一口飲み、カップの中の水面を見つめる。

「全部知りたいとは言わない。知りたいのは2つだ。
これくらいは応えてくれるだろう？伯父さん」
静かにテーブルの上に置かれたお茶が微かな音を立てる。
ラーニはカイザークの問いに、笑顔を深めた。カイザークがこんなにラーニに話しかけてくるのは
あの事件があって以来。
呼び方に懐かしさを覚えて、ラーニは自分が年を重ねていっていることを思い出した。
未来を知る者は、時間の感覚が薄い。数年、あるいは数十年世界の夢を揺蕩うことも珍しくないからだ。
その間、彼らは年を重ねることもなく死んだように眠るだけ。
力の強いものほど、その頻度や期間は多く長くなる。
そんな預言者達は人というものに頓着することが無くなっていく者が多い。眠る間に時は流れ、家族と呼べる者達も瞬きをする間のような短さで年を経ていく。
つながりが薄いのだ。
けれど、ラーニは人を好んでいた。彼の甥っ子も、帝国を統べる彼の事も。
「伯父さんと呼んでくれたのは7年ぶりだね。
・・・・そうだ。カイ、お前も少しは関わっていける。少しだけ。
いいよ、2つまでなら答えてあげよう。可愛い甥っ子のためにね」
パチリと片目をつぶってみせたラーニに、カイザークは少し呆れた様な、笑っているような不思議な表情になった。カイザークの纏っていた刺々しい雰囲気が薄れる。
「・・・それに、早くカイのお嫁さんを見るためにも、ね」
ラーニの言葉にカイザークはにやりと笑う。
「そうだね。私も早く結婚したいし、ね。イリ」
イリの手を取ってカイザークは結婚の言葉を強調して言った。
「なっ！私は関係無いじゃないですかっ！！」
「もちろん結婚してからも仕事は続けてもらいたいな。

あ、でも子供ができたらしばらくは家にいてもらった方がいいかな？　イリはどうしたい？」
「私は、子供は自分の手でそだ・・・って！？何言い出すんですか？！」
「もちろん結婚後の家族計画はきちんと話し合おう」
噛み合っていない話にイリは頭を抱えた。

「・・・・・・・・早く本題に戻ってください・・・」

イリの悲痛な声に、ラーニが救いの声をかける。
「カイ、お嫁さんが困っているじゃないか。本題に戻らなくては」
「わかったよ、伯父さん。イリ、そのことは後でじっくり話し合おうね」
ハートマークが飛んできそうなカイザークの言葉と、イリが困っているのをにこにこ笑いながら見ているラーニの笑顔の２つが交じり合うのはきついものがある。
２人の言動に、イリは２人の血がつながっていることに疑問を感じなくなっていた。
外見的な特徴が似ていなくても、この２人は確実に性質が悪いところがそっくりだ。
もう、何も言うまい。
そう、イリは決意した。

「伯父さん。聞きたいことはまず一つ。
・・・・・・ハルという少女が預言の要でしょう？」
カイザークの問いにラーニはゆっくりと頷く。
「そうです。彼女こそが、要。　彼女の運命はもう、動き出しています」
黙って聞いていたカイザークだったが、ラーニの動きだしているという言葉に少しだけ眉をひそめる。

「伯父さん。動き出しているということは、もうあの預言が始まっているということだね」
「ええ、気になるのは、彼女自身も闇を持っているということですが。
些細なきっかけ1つで、未来は大きく変わることもありますから」
2つの問いにしか答えないといった割には、
ずいぶんと口を滑らせてくれるラーニに、カイザークは続けて問いかけた。
「2つ目、・・・・・・・あの剣の持主はまだキールだね？」
イリにはあの剣といわれても何のことだが分からなかったが、ラーニは僅かに顔を固くして、また頷いた。
「・・・・まだ、剣は主人を変えてはいません。
また、剣が認める気もないうちはあの城には誰も入れないでしょう。
皇帝陛下以外は。・・・・カイ。これは、おまけの話ですが、
速い馬を4頭用意しておいた方がいいかもしれませんよ」
「わかった、ありがとう」
カイザークがラーニの言葉にそう答えると、ラーニはそれ以外何も言わず、微笑んだ。

15

ヴィオラの寝室で、ハルは静かに怒っていた。
ダークはそれを横からおろおろと見ているだけで、話しかけることができない。
できれば、笑顔で怒るのは止めてほしいと思っていたが。
今のハルからは何か、冷たい空気が漂ってくるような錯覚まで起こさせる。
だが、正面から見てはいないが、彼女は笑顔だ。
笑顔のまま目が笑っていない。怖い。
ハルの真正面にいる彼は、ダークの錯覚だろうか、いつもの無表情がひきつっているように見える。
彼の横にいるバルトも、さりげなくハルの見える範囲から移動しているあたり
ハルの視線の凄さを表しているといっても過言ではないだろう。

彼、皇帝陛下こと、ジャヴがヴィオラの寝室にハルを迎えに来たのが先ほどのことだった。
事件の報告がいったのか、伝え聞いていた迎えの時間よりも大分早い。
ジャヴは部屋に入ってくるなりハルを見つめて
「大丈夫か？」
といったのだから、彼も結構心配していたのだろう。
ハルも座っていた椅子から立ち上がると、ベットから少し離れてジャヴ達の方に近寄った。
「私は大丈夫です・・・ありがとう」
「無事ならいい」
その会話を交わしたときは、ハルだって普通だったはずなのだ。

問題はその後の皇帝の言動にある。
「帰るぞ」
彼は、無事を確認したハルを抱き上げてそう言った。
「え」
「ここにはもう、用はない」
「ダメです。　私、ヴィオラが起きるまで傍にいるって約束しちゃいました」
抱き上げられたハルはそう言って、彼の腕の中からひょいと飛び降りる。
しかし、皇帝はそれが気に食わなかったらしい。一気に、機嫌が悪くなった。
「・・・ハル」
「ジャヴだって、ヴィオラに言うことがあるんじゃないですか？」
寝ているヴィオラを気遣って小声だったが、固い声にハルが少し怒っていることがわかった。
ダークにはハルが皇帝に怒る原因が分からなかったが
皇帝は思いあたることがあったのか、ちょっと考えるように黙りこむ。
「帝国の皇帝陛下がこんな小さな子に、怪我を負わせたなんて笑い話にもなりませんよ、ジャヴ」
笑顔だが、声が堅い。
部屋の温度が確実に下がったと感じられるくらいになって、皇帝が口を開いた。
「悪かったと思っている」
「そうですか」
「起きたら、謝罪をすると約束しよう」
素直にジャヴが謝ったのが効いたのか、ハルの雰囲気がすこし柔らかくなる。
「・・・・・謝る気になったのは良いことだと思いますけど、私じゃなくて決めるのはヴィオラです」

「・・・わかった。彼女が起きるまで待つ」
そういって、彼はまだ怒りが完全に溶けてはいないであろうハルをもう一度抱き上げ、そのままハルの座っていたベットの傍のイスに座った。

「ジャヴ！！」
いつもの動作だが、ここは彼の館ではない。
近くにはヴィオラも、ダークもバルトもいるのだ。いつものように子供扱いされて、恥ずかしくないわけがない。
さっきだって、抱き上げられたのに驚いたからジャヴの腕から飛び降りたのだ。悔しいことにハルはヴィオラより身体つきや顔が子供っぽい。一応お姉さまと呼ばれているからには
これ以上子供扱いされているところを見られたら、年上としての沽券にかかわる。
恥ずかしさで顔を真っ赤にしたハルが、もう一度ジャヴの腕から抜け出そうとした。
だが、ジャヴの腕の方が力は強い。
「ジャヴ！！」
「諦めろ」
やっている本人に言われると腹が立つものである。ハルはどうにかして抜け出そうと体を突っ張った。
が、外れない。
むしろ、ハルが暴れるとジャヴの腕の力強くなっているような気がする。
「放してください。ジャヴ・・・・人前はちょっと・・」
顔を赤くしたまま、ハルが下を向いて呟く。だが、ジャヴの腕はますますきつくなって、ジャヴの頭がハルの肩に置かれた。
「・・・・・心配した」
ジャヴに小声で言われて、ハルは何か言おうかと口を開きかけたが、

結局何も言わずに抵抗をやめた。

ハルが暗殺者と戦ったと聞いた時
ジャヴはすぐにヴィオラの屋敷に向かおうとした。
もう、ハルの安否しか考えられなかった。それを止めたのはバルトと、ハルが無傷だという情報だった。
ハルは強い、強さでいえば近衛騎士に相当するであろう。
だが、この場合強さは問題じゃなかった。
ハルは人を傷つけることを無意識に避けている。ジャヴとの稽古でも、時々急所と呼ばれる場所を攻撃することをためらっているところがあった。
彼女は人を傷つけること、殺してしまうのではないかということを恐れている。
その恐れは、殺し合いにおいては格段に不利だった。
実力に大きく差のあるものならば、殺さずとも勝てるだろう。
だが、差のないものであったならば、恐れはハルを死へと追い込む。
ハルが死ぬ？
そんなことは認められない。

閉じ込めておけばよかったと、頭のどこかで声が囁いた。
籠の鳥のように、部屋に閉じ込めて誰にも会えないようにすれば良かった。と
危ない考えが頭に響いてくる。
よほど酷い顔をしていたのだろう。バルトが大丈夫かと聞いてきた。
正直、大丈夫ではなかったが頷いて、仕事に戻った。
早く無事な姿が見たかった。
ハルを抱きしめたまま、暫くしてジャヴは二人の騎士がいたことを思い出す。
部屋の隅に目をやれば、なぜか真っ赤になったダークと
呆れた目でこちらを見ていたバルトと目があった。

「・・・・・ジャヴ。」
バルトは小さめの声で呼びかけ、ベットを指さした。視線を向けると、さっきまで寝ていたはずのヴィオラが
ジャヴとハルを見つめている。
ジャヴは軽くため息をつくと、ハルから腕をゆっくりと外した。
「ハル」
ハルの名前を呼ぶと、ハルは少し眠りかけていたのか眼をこすりながらその小さな体を起こした。
そして、周りを見る。
「？」
いつもの部屋ではないことに気がついたのだろう
突然がばっとジャヴの膝から飛び降りると、恐る恐るヴィオラが寝ている
と思っていたベットを振り返る。
ばっちり、起きていたヴィオラと目があった。
「お、おおおおきてたんですか？ヴィオラ？」
ジャヴに子供のように抱きしめられていたところを見られたのだ。
ハルは恥ずかしい気持ちと叫びだしたい気持ちをこらえて挙動不審になりながらも
ヴィオラにひきつった笑顔を向けた。
「お姉さま、お顔がひきつっていますし、おが多いですわ」
ヴィオラは少し寝てすっきりとしたのか幾分顔色の良くなった顔をハルに向けて、にやりと笑う。
「お姉さまの愛はばっちりと見させていただきましたわ！」
「へ！？あ、あいですか？！！いえ、あの、違います！　決してやましいことなんてしてないです！！
いや、あの、むしろ子供にやる様な親愛の情っていうかその、」
「そんな！あんなに抱きしめあっていてそんなこと言うんですの？！」
「抱きしめあって・・・いや、その深い意味はないですよね！！ジ

ャヴ！！
ジャヴは男の人が好きなんですよね！だからその、あの、なんといいますか・・・」
焦っているハルがジャヴに掴み掛るが、ジャヴは冷静だった。
怪訝そうな顔をハルに向ける。
「男が好きだと言った覚えは全くないな。　むしろ愛で合っていると思うが？」
ニヤリとヴィオラに向かって笑ったジャヴにヴィオラは
「やっぱり！」
と何が嬉しいのか笑った。
「ジャヴ！！普段無表情のくせにこんなときだけ笑わないでください！！
ってか、ゲイじゃないってどういうことですか！！？」
笑ったジャヴの襟首を掴んで、振り回しながらハルは叫ぶ
今まで、ハルはジャヴの事を男の人を好きな人だと思っていた。
女性が嫌いだといっていたからだ。
良く考えてみれば彼が自分でゲイだといっているのを聞いたことがなかったことに気がついたが
それを肯定してしまえば、今までの自分の行動が走馬灯のように脳内を駆け巡って行く。
一緒に寝ていることだとか、いつも抱き上げてくれるとか、
１６歳の女が１９歳の男にしてもらっているのだ。
自分はジャヴにとって恋愛対象外だと思っていたからこそ、ハルもジャヴの行動に
甘えて、何も思わなかったのだが。
よく考えてみれば、おかしいだろう。良く考えなくても、だ。
「・・・・・・・ジャヴ？・・・・私、１６歳だって言ってないでしたっけ？・・・」
もしかしたら、ジャヴはハルの年齢を間違えていたのかもしれないと限りなく少ない可能性にかけて、問いかける。

「？　いや、知っているが」
あっさりと返ってきた答えに、ハルはぷつんと何かが切れる音を聞いた。
「ジャヴ！・・・・普通はそういうことしちゃいけないんですよ！？年頃の男女が一緒に寝るなんて、恋人同士でもないなら普通は駄目なんです！！
いや、私も悪いんですけど！　ジャヴは、ゲイだから別に良いかなーとか思ってたのに！！
なんなんですか！？ノーマルですか！　お願いですから違うって言って下さい！！」
無茶苦茶なことを言っているのはわかるが、ジャヴがゲイじゃなかったということになると
最初にダークやバルトが怒ったのも頷ける。
でも、それを認めてしまうと羞恥で床に転がって呻きたいぐらい恥ずかしい。
おじいちゃんおばあちゃんすみませんでした！と空に向かって叫びたい。
ハルが恥ずかしさにしゃがみ込もうとしたとき、ジャヴがハルの手を取った。
「・・・・・ゲイになる気はないな、証明してみせようか」
そういって、ハルをいつものように抱き上げる。
ジャヴはなぜかちょっと不機嫌そうだった。

彼からしてみれば、ゲイだと思われていたのだから当然である。しかも、ハルの恋愛対象外になっているような話をしていたことも。
ジャヴとしては、ハルのことはそれなりに好きだが、ロリコンではないのでハルの幼い外見に欲情しないだけ。
もう少し育ったら確実に襲う自信がある。
今の姿のままでも、まあ、襲うことはできるが。

「わわっ！　もう、いいです！　抱き上げるのはなしで！！　降ろしてください、ジャヴ！」
必死で降りようとするハルに、ジャヴは腹が立った。
「ハル。私が嫌いか？」
むっとした表情のまま聞くと、ハルは少し固まった後、赤くなって答えた。
「・・・・・き、嫌いではないです、けど」
「けど？」
「恥ずかしいです・・・・・」
「はずかしい？」
何が恥ずかしいのかジャヴには判らないらしい。首を捻るとハルが怒ったように言った。
「と、年頃の女の子が、抱っこしてもらって、添い寝してもらってることが恥ずかしいんです！！
いままでは、ジャヴがゲイだと思ってたから・・・
恥ずかしいのは恥ずかしくても、・・・・とか思わなかったんですけど・・・・・・うううう」
自分の言葉に混乱しているらしい。抱きあげられたまま頭を抱えるハルをみて、ジャヴは笑った。
「・・・・それは、私を意識している、ということでいいのか？」
「ちっが・・・わないかもしれない・・・・」
否定しようとして、ハルはできなかった。自分でも意識している以外の何物でもないと思ったからだ。
興奮しすぎてくらくらする頭をジャヴに支えられて引き寄せられた。
なんだ、と思う間もなくジャヴの顔のどアップがハルの視界いっぱいに映りこむ。
紫の眼が楽しげに輝いている様に思わず見惚れかけて
「――――――！！！」
次の瞬間にはハルの唇は、彼の唇で塞がれていた。

あまりのことに頭を後ろに引こうとしたが、がっちりと固定されていて動けない。
唇に当たる柔らかい感触と温かさが妙に現実的で。
状況を理解したハルは極度の緊張と酸欠のためにそのまま意識を手放した。

16

気がつくと、ハルはベットに寝かされていた。
起き上がった室内は暗く、もう日が落ちているようだった。
枕元にうっすらと見えたランプの明かりを灯し、周りを見てみれば、いつも寝起きしている部屋ではないことに気が付いた。
慌てて周りを確認すると、少し離れた壁にはドアが見えベットの傍には剣とハルの靴がきちんと置かれている。
それらを身に着けてドアを開くと、ソファーとテーブルがある明るい部屋だった。
さっきお湯を使わせてもらった客室だと思うが、もしかしたら似たような他の部屋かもしれない。
どうやらここは、ヴィオラの屋敷だ。状況を確認して、ハルは気絶する前のことを思い出した。
「・・・・」
鏡を見なくても顔が真っ赤になっていることが分かる。
緊張のあまり意識を失ったことなんて、今まで生きてきて初めてだ。
どんな事件に巻き込まれているときだって、恐怖と緊張には意識を失ったことなどない。
気絶できればどんなに楽か、と思ったことは何度もあったのだけれど。
「私の、ファーストキス・・・・」
この年になって初めてというのも悲しいが、気が付けば１６年間色恋沙汰には縁がなかったのだからしょうがない。
微かに縁があったといえるのは痴情の縺れに巻き込まれたときだけだろうか。
悲しい思い出である。
ハルはソファーに座って、赤く火照った顔を抑えた。
とりあえず、彼の行動にはものすごく驚いた。

ジャヴがゲイじゃなかったという事実にも、キスされたことにも。
考えれば考えるほど、これまでの自分の言動が頭の中をぐるぐると回っていく。
唇が、柔らかかったこととか。
ハルの指が、その感触を思い出そうとするかのように唇をなぞった。
「――――っは！？」
ゴッ
「・・・・痛い」
恥ずかしさのため、思わず体を丸めかけたらテーブルに頭をぶつけてしまった。
一人で狼狽えて、滑稽だ。
何しろこの世界は欧米文化的な考え方に近い。
だから、キスなんて挨拶とか日常茶飯事な可能性だってある。
「・・・・・・今までそんな挨拶、誰にもされてないけど。
いや、身近な人への挨拶っていう可能性も・・・・」
ぶつぶつと呟きながらハルが考え込んでいたら、寝室に繋がっていないほうの扉がノックされた。
「っうぁい！」
その音に急に思考を断ち切られて、妙な返事になってしまう。
ハルの返事に、扉を開けて入ってきたのはジャヴではなく、ヴィオラだった。
「お姉さま。気がつかれまして？
お腹が空いていたらいけないと思って簡単なものをお持ちしましたの」
そういって、食事が乗った盆をもったメイドと共にヴィオラは部屋の中に入ってくる。
「わたくしも、ご一緒してもいいかしら？」
「もちろんです！・・・でも、家族の人はいいんですか？」
「お父様は、急ぎの用事で明後日まで帰らないのですわ」
フンと、軽く頬をふくらませてヴィオラは備え付けのテーブルに座

った。表情が素直な少女は、体つき以外は可愛い１１歳である。
「ヴィオラ、熱はもういいんですか？」
さっきまで、熱を出していた少女は、にっこりと笑う。
「ええ、お医者さまからも知恵熱だといわれましたの。
熱が下がったら、もう動いても大丈夫だそうですわ。
わたくし、風邪をひいたことはないんですのよ！」
胸を張って言ったヴィオラに、ハルは元の世界の言葉を思い出したが
本人があまりにも嬉しそうなので黙っておくことにした。
一緒に入ってきたメイドはテーブルの上に食事の用意をし終わると、
終わったら呼んでくださいね。と
部屋から出て行った。

食べ始めてすぐに2人の間に沈黙が落ちた。とはいっても、気まず
い類の空気ではない。
自身では気が付かなかったものの、ハルは意外とお腹が空いていた
ようで、美味しい料理に幸せを感じながら味わっていただけだ。
ある程度料理を食べたところで、ハルは口を開いた。
「ヴィオラ、その・・・ジャ、皇帝陛下たち・・・は？」
聞きにくいことだったが、ヴィオラはあっさりと答える。
「あ、皇帝陛下ならお帰りになられましたわ。
バルト様に思いっきり引きずられていきましたの。
なんでも、急ぎの用事が出来たとかですわ。ダーク様を残して行か
れました。
今日はゆっくりして、明日帰って来いとおっしゃっていましたわ。
ダーク様は、今城の方から来た騎士にあっておられますのよ」
「そ、そうですか」
ハルが安心したのを見て、小さく笑いを漏らした。
「どうしたんですか？　ヴィオラ」
なにかいい事でもあったのかと問うハルに、ヴィオラは自身の手を

見せて言った。
「ふふ、謝っていただけましたのよ。この手を傷つけたこと」
勝ち誇ったような笑みを浮かべたヴィオラは拳を握り締めた
「努力すれば何でもできるってことですわね！　わたくしまた１つ賢くなりましたわ。
・・・・・・ところで、お姉さま？」
「？　なんでしょう？」
ヴィオラはにやりと笑う。
「・・・・・皇帝陛下のこと、どう思っていらっしゃいますの？」
「ぶほっっ！！」
「きゃ！お姉さまちょっと！！汚いですわよ？」
思わず飲んでいた水を吐き出したハルに飄々としたヴィオラが言う。
ハルは近くに置いてあったナプキンで、口元と濡れた胸元を拭った。
「すみません・・・水で良かった、っていうか、いきなりどうしたんです！？」
「ごめんなさい？　だってとっても気になったんですもの」
幼いながらもヴィオラもやはり女なのだ。恋の話は大好物らしい。
「正直に言って下さいましね。　お姉さまの中で今の陛下はどの位置にいまして？」
「・・・・・・・うーん。
正直に言いますよ？　好きだけど、恋愛としての好きかどうかはわからない、です」
誤魔化すことなく、今の気持ちを答えると、ヴィオラはにやにやしたままグラスを傾けた。
「それなら、ゆっくり答えを出せばよろしいのではなくって？
お姉さまが、皇帝陛下と微妙な関係なのは分かりましたし。　あまり煽ってすんなりくっついても悔しいですわね・・・・・あ！　それよりも！　明日はわたくしの家の庭をご案内いたしますわ！　ぜひ見て下さいますわよね？　すごく綺麗ですのよ！！」
途中まで何やらにやけたり悔しそうな顔になったりと忙しい様子だ

ったヴィオラは、突然子供らしい期待に満ちた表情でハルを屋敷の庭に誘った。
「わかりました」
ハルとしては、帰ってもジャヴの顔をまともに見られるかどうかわからない状態だ。
屋敷の滞在が伸びるお誘いは大歓迎だった。
「ふふ、お姉さまとお散歩楽しみですわ！」
喜んだヴィオラは、食事を下げに来たメイドに自室へと連れられていった。ハルと一緒にご飯を食べる代わりに、今日は早くベットに入るという約束だったらしい。
明日は庭を一緒に散策しましょうねとなんども念を押して自室に帰って行った。

17

次の日、ヴィオラに案内されて庭に出たハルは言葉を失った。
そこには一面に幻想的な花の楽園が広がっていた。全体的には木々が生えていて普通の庭園とは違う。ちょっとした森のような雰囲気も出ている。だが、すごいのは花の量とバランスだった。
大輪の牡丹のような花もあれば、カスミ草のような小さな花まで、庭はそれ自体がひとつの生け花のように完璧に草花が配置されているのだ。幻想空間にハルはしばらく見とれていた。
そんなハルにヴィオラは嬉々として、花の名前やその由来を教えてくれた。また、この屋敷の庭は斬新な庭園として社交界でも高い評価を得ているという。
屋敷の庭といっても、結構な広さがある。ヴィオラが案内してくれたのは庭の中の池と小さな東屋だった。
池というより泉といった方が正しいようなこんこんと湧き出る水に、ハルとヴィオラは足を入れて遊んだ。
東屋は休憩所のようなものでこれまた、庭の中にあっても違和感がまったくないような繊細な建物。
この中から妖精とかが出てきたとしても驚かない。
たっぷりとおしゃべりと散策をしたハルとヴィオラは、次にこの庭をほぼ一人で管理しているというマルコのいる小屋へと足を向けた。
「マルコの入れるお茶とお菓子は最高なんですの！！」
年相応の子供の顔でうれしそうな笑顔を浮かべたヴィオラは、そう言ってマルコの小屋の扉をたたいた。
しかし、その小屋の中から飛び出て来たのは昨日のメイドの一人だった。
「お穣様、今日はお勉強の日でしたわよねぇ」
そういうが早く、逃げようとしていたヴィオラの首根っこを掴むと、

風のように走っていってしまう。
「いや～～！！お姉さまとお茶するのぉ～～！！」
ヴィオラがそう叫ぶ声が聞こえてきたが、ハルにはどうしようもなかった。
あのメイドたちには関わるなと本能が告げていたからだ。
空いた小屋の前で立ちすくむハルに、小屋の中から声がかかった。
「どうぞ、お嬢様にはあとで届けるので。お茶でもしていきませんか？」
小屋の中から現れたのはマルコだった。手にはお茶の可愛らしいポットを持っている。
ひげとそれがあまりにも似合わなくて、ハルは思わず笑ってしまった。
ヴィオラに振り回されたり、元騎士と言われていたり、この幻想的な庭の製作者だったりと不思議な人だ。
けれど、悪い人ではないと思う。
「じゃあ、お言葉に甘えて、いただきます」
小屋の中も、ものすごく可愛らしかった。あまりのギャップについ浮かびそうになる笑みを堪えていると、マルコが椅子を引いてくれた。
「ありがとうございます」
そういって座ると、あっという間に目の前のテーブルに焼き菓子とお茶が置かれた。おいしそうな匂いが鼻を刺激する。一口よりすこし大きめの焼き菓子に、白い粉砂糖がかけられている見た目はシンプルなお菓子だ。
「どうぞ？お穣様の折り紙つきです」
ハルの様子に軽く笑いながらマルコが言った。どうやらハルが鼻をひくつかせていたのを見られていたようだった。
少し情けなくなりながら、ハルは言葉に甘えてお菓子へと手を伸ばし、その拳よりも小さ目な焼き菓子を口に含む。さくりとパイ生地のような食感のものがバターの風味と共に口いっぱいに広がる。中

には甘いクリームが入っていた。
たとえるならばシュークリームだが、中に入っているものがちょっと違う。生クリームとヨーグルトの間のような爽やかな甘みで、とても美味しい。
「すごく美味しいです！マルコさんが作ったんですか？」
ハルが聞くと、マルコは頷いた。
「時々ですが、ちょっとした趣味なので」
照れているのか、ちょっとそっけない言い方だったが、気にならなかった。一緒に出されたお茶も、紅茶より緑茶に近い風味で、懐かしいのと美味しいので、あっという間に2つほど焼き菓子を平らげてしまう。
3つ目に手を伸ばして、いつものおやつの時間を思い出してしまった。
「食べたいっていうだろうな・・・」
あんな冷たい美貌の皇帝陛下も甘いものが好きなのである。だから、執務中でもおやつの時間があるし、朝食以外はデザートが必ず付いてくる。彼も、このお菓子は絶対喜ぶだろうなという確信があった。考えたことを思わず口にして、すぐに後悔する。
今日帰ったらどんな顔をして彼に会ったら良いのだろう。
昨日のことを思い出して顔が赤くなるハルだったが別のことにマルコは驚いたようだった。
「ハル様は、皇帝陛下と、仲がよろしいんですか？」
彼が問いかけたのは単純に仲が良いのかという言葉だったが、昨日のことを思い出していたハルには仲がいいという言葉が、別の意味に思えてしまう。
「いいえ！　仲っはいいですけど、えっと、っ抱きしめてもらったりもしますけどっ・・・・て
・・・違います今のナシです！！　あれです！　そう、寝言でキールって言ったのも知りません！！・・・・いやー！！！」
慌てて喋っている最中に自分で墓穴を掘っていることに気がついた

ハルは、
恥ずかしさのあまり、両手で顔を覆ってうなだれた。もう何もいわないほうがいいかもしれない。
「うう・・・・・すみません忘れてもらえませんか？」
顔を隠したまま、ハルがいうと
「いえ、こちらこそすみませんでした。陛下にまさか、そんな人ができるとは・・・」
そういってマルコは微笑んだが、明らかに勘違いをしていることだけはわかった。
「だから・・」
「キール様のこと・・・まだ悔やんでいるんですね・・・・」
否定の言葉を出しかけたハルの耳にマルコの呟きが聞こえた。
「キール様・・・？」
マルコは知らないんですか？と不思議そうに聞いてくる。
「5年前に亡くなった皇帝の弟君ですよ」
そういって、おもむろに立ち上がるとマルコは小屋の扉を開いた。
「詳しくは皇帝陛下が教えてくださるでしょうね。
いらっしゃいませ、狭いところですが、お茶でもいかがですか」
立っていたのは、今まさに話題の皇帝陛下その人。
ハルは、驚くよりも皇帝陛下が実はちょっと暇人なのかもしれないと疑ってしまった。
顔に出ていたのだろうか、ジャヴは呆れたように溜息をついた。
「無理やり終わらせてきた」
その言葉にマルコが笑う。
「陛下。どうぞ、こちらへ今お茶を用意します」
「すまないな、もらおう」
ジャヴはマルコの勧めに遠慮なくハルの隣に腰をおろした。
ハルはどういう顔をすればいいのか分からなくなって顔を顰める。
恥ずかしいのと怒っているのと驚いているのがごっちゃになっているのだ。

ちらりとジャヴの顔を横目で見ると、無表情だが、なんとなく楽しそうな顔をしているような気がした。
その二人の様子を見て、マルコがますます笑みを深くした。
「そうしていると、先代皇帝と皇妃そっくりですね。あの二人も、よくこうやって喧嘩をしていらっしゃいました」
ジャヴの前にお茶を置くとマルコは懐かしそうに目を細めた。
「興味深いな。先代と皇妃の話はあまり聞いたことがない」
そういったジャヴに、ハルとマルコの驚きの視線が刺さる。
「え？ジャヴのお父さんとお母さんじゃないんですか？」
「誰からか聞かなかったんですか？！」
信じられないという顔をしている2人にジャヴは呑気にお茶を飲みながら言った。
「先代は、死んだ皇妃の話をされるのをすごく嫌っていたからな。私の周りでは聞いたことがない」
お菓子を食べて、美味いと呟いたジャヴにマルコがため息をついた。
「そうですか・・・皇妃が逝去されてから皇帝の人が変わったようになったという噂はやはり本当だったんですね。本当に仲睦まじい御夫婦でしたから・・・」
「あの男が？」
「ええ、無茶苦茶な方でしたけどね。逝去された方の悪口を言うつもりはありませんが
あの方たちのことを息子であるあなたにも、知ってほしいかもしれません。・・・・少し長くなりますが、聞かれますか？」
マルコの問いに、ジャヴは頷いた。
「あの、」
「なんだ？」
ハルが躊躇いがちに声を上げると、不思議そうな目が2組ハルに向けられた。
「私、外に出てた方がいいですよね？」
そういってハルは席を立とうとした。他人が聞いても良い話ではな

いと思ったからだ。
だが、立とうとしたハルの腕をジャヴが制した。
「いい。お前もここにいろ」
「いや、ちょっとまずいんじゃ・・・・・・わかりました」
ジャヴの眼が行くなと無言の圧力をかけてきたので、ハルは仕方なく椅子に座りなおす。彼が行くなと言っているのだから、ここにいてもいいのだろう。
2人の様子を見ていたマルコがまた、懐かしむような遠くを見るような眼をした。
「本当に、先代御夫婦を見ているような錯覚に襲われます。陛下は、先代とそっくりですね・・」
そういって、マルコは話し始めた。

「マルコ！城下に行くぞ！ついてこい！！」
「えー、陛下またですか？今度こそ誰かに刺されますよ」
マルコがため息をつきながら着替えを始める。
城下に行くのに騎士の恰好をしていると何かと都合が悪いのだ。
皇帝陛下はすでに城下の人々が着るような服を着ていた。
「いや、しっかし、違和感無いですね、アーサー。まったく、皇帝陛下としての威厳が感じられません」
思わず正直な感想をマルコがもらすと、皇帝陛下アーサーはふふんと鼻を鳴らした。
「俺様の美貌は冴えてるだろうが。本当の美貌は着る物を選らばねぇんだよ」
勝ち誇ったように胸を張るが、マルコはげんなりと頷いた。

確かにアーサーはかっこいいだろう。線は細くなく、精悍な顔立ちに茶色がかった金色の髪に深い紫の瞳。
皇帝のきらびやかな服を着ていても、全く違和感はない。が、
「中身が・・・・・」
呟いたマルコに容赦のない蹴りが襲ってきた。だが、日常茶飯事のことなので
マルコはあっさりと避けると、着替えの最後に剣を取った。
「本当のことじゃないですか。こんなに女漁りばかりしていると婚約者の方に嫌われますよ」
彼は皇帝だが、まだ皇妃はいない。側室もいないものだから貴族の爺どもがうるさいのだ。
この間、ようやく婚約者を決めたと思っていたのだが、彼は相変わらずと言っていい頻度で、城下に下りては女性を喰いまくっている。外見のおかげか、彼はとてももてるのだ。
「いいんじゃねえの？俺この結婚嫌だし。まあ、城下の女に種残すような失敗はしねえから。心配すんなって、マルコ」
そういって、彼は窓からひらりと飛び降りる。それを見て、また溜息が出たのはしょうがない。
３階の窓から飛び降りられるアーサーなら大抵のことでは死なないだろう。マルコも続いて窓から飛び降りた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5255z/

世界に嫌われた女の子

2012年1月14日21時45分発行